THE MITSUBISHI FOUNDATION ANNUAL REPORT

2024
三菱財団年次報告書

公益財団法人　三菱財団

THE MITSUBISHI FOUNDATION

私たちは、学術研究、社会福祉、文化財等に関する
事業等に援助を行なうことで
日本の学術、教育、文化、福祉の向上に貢献しています。

THE MITSUBISHI FOUNDATION ANNUAL REPORT

2024

第55回三菱財団年次報告書

目次

ご挨拶 …… 3

未来につながる研究・事業助成 …… 4

助成報告 …… 15

1 自然科学研究助成先一覧 …… 16

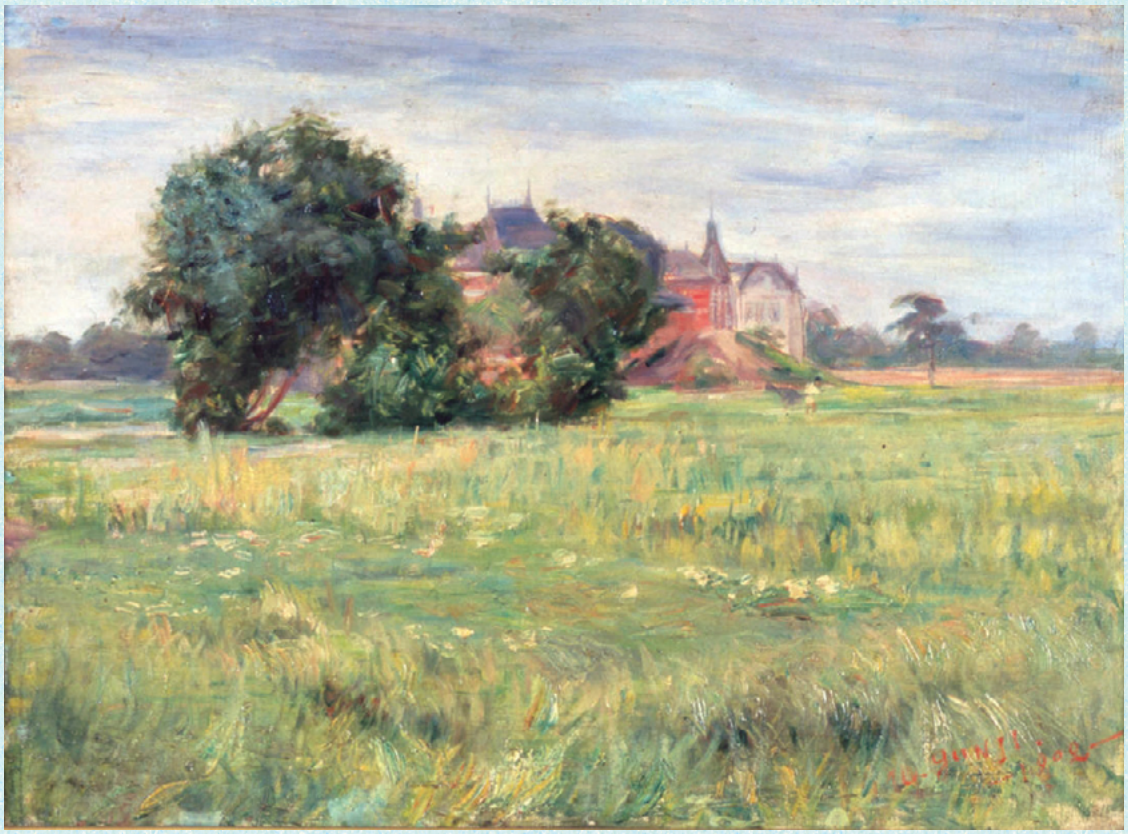
2 人文科学研究助成先一覧 …… 41

3 社会福祉事業・研究助成先一覧 …… 53

4 文化財保存修復事業助成先一覧 …… 67

三菱財団社会福祉特別助成
「外国にルーツがある人々への
支援活動応援助成（第５回）」助成先一覧 …… 72

三菱財団のあらまし …… 75



明治32年頃の丸の内　通称「三菱ヶ原」
画像提供：三菱地所株式会社

ご挨拶

2024年度年次報告書の発刊にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

当財団は、三菱創業100周年を記念し、創業以来の社会貢献の精神を形とすべく1969年に設立されました。2010年に公益財団法人に移行し、2019年には設立50周年を迎え、今日まで一貫して研究助成、事業助成を続けてきました。今後も日本社会に貢献していくというその使命を、引き続きしっかり果たしていきたいと考えております。

2024年度は、自然科学（一般助成及び若手助成）、人文科学、社会福祉、文化財保存修復の各分野で通常助成を計画通り実施するとともに、社会福祉分野では、中央共同募金会との共同助成により特別助成（第５回）を実施しました。

2024年度助成実績としましては、通常助成において、自然科学研究助成、人文科学研究助成、社会福祉事業・研究助成、文化財保存修復事業助成合計で1,562件と非常に多数の応募を頂き、厳正かつ慎重な審査・選考の結果、163件・649.87百万円の助成を行いました。また、社会福祉分野の特別助成（中央共同募金会との共同助成）として、「赤い羽根 ポスト・コロナ（新型感染症）社会に向けた福祉活動応援キャンペーン“外国にルーツがある人々への支援活動応援助成 第５回”」を実施し、36件・40百万円（当財団拠出分）の助成を行いました。これらにその他諸事業費助成３件・３百万円を加え、2024年度助成実績は、202件・692.87百万円となりました。当財団設立以来の助成実績累計では、件数5,118件、助成金額21,644百万円となりました。これまで長年に亘り、多方面の皆様より賜りましたご支援、ご指導に対し、改めて心より厚く御礼申し上げます。

皆さまにおかれましては、引き続き幅広いご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げますとともに、財団の諸活動につきまして、忌憚ないご意見およびご指導を賜りますよう、併せてお願い申し上げます。

公益財団法人 三菱財団
理事長
三毛兼承

未来につながる研究・事業助成

2024年度の助成について

2024年度は、自然科学（一般助成及び若手助成）、人文科学、社会福祉、文化財保存修復の各分野で通常助成を実施するとともに、社会福祉分野では、昨年度に続き、特別助成（第５回）を中央共同募金会との共同助成で実施しました。

内訳としましては、通常助成において、自然科学分野1,092件8,494百万円、人文科学分野290件882百万円、社会福祉分野156件579百万円、文化財保存修復分野24件64百万円の応募に対し、自然科学分野74件420百万円（うち若手助成21件84百万円）、人文科学分野33件85百万円、社会福祉分野42件110百万円、文化財保存修復分野14件34.87百万円、合計163件649.87百万円の助成を行いました。また、社会福祉分野の特別助成として、中央共同募金会との共同助成により、「赤い羽根 ポスト・コロナ（新型感染症）社会に向けた福祉活動応援キャンペーン“外国にルーツがある人々への支援活動応援助成 第５回”」を実施し、70件156百万円の応募に対し36件40百万円（当財団拠出分。中央共同募金会拠出分を合わせた助成総額は80,150千円）の助成を行いました。これらにその他諸事業費助成３件３百万円を加え、2024年度の助成実績合計は、202件692.87百万円となりました。

助成金贈呈式

2024年９月11日、丸の内の東京會舘で、助成金受領者と来賓、選考委員、財団役員合わせて約240名が出席し、2024年度助成金贈呈式が開催されました。

贈呈式では、三毛理事長の挨拶、各分野の選考委員長からの審査報告の後、助成金受領者に贈呈書が贈られ、各分野の助成金受領者代表の方々が、謝辞とともに自らの研究・事業内容等を披露されました。

三毛理事長挨拶

贈呈書授与

自然科学審査報告

自然科学選考委員長
十倉　好紀

2024年度の自然科学部門研究助成の選考結果をご報告申し上げます。

本年度の自然科学部門の研究助成の総額は、昨年対比で５千５百万円の増額の４億２千万円として頂き、選考を行いました。内訳は、一般助成３億３千６百万円、若手助成８千４百万円です。

本年度の応募総数は一般助成763件、若手助成329件、計1,092件、昨年と比べ若干（30件）の減少となりましたが、競争倍率は、一般は14.4倍、若手は15.7倍と引き続き高倍率となり、申請案件の内容としても高いクオリティを維持しております。

選考にあたっては、応募された研究計画のユニークさや既成概念にとらわれない研究かどうか、研究者のこれまでの研究実績などから当該研究の実現性等も考慮にいれ、また、若手については若手らしいチャレンジングな研究か等の観点も含めて見るように心がけました。

審査手続きにおいては、選考委員会は実開催とオンラインを組み合わせ、面接はオンラインを有効に活用し、活発な議論を行った上で、クオリティの高い助成先を選定いたしました。

その結果、助成件数は、一般は昨年比２件増加の53件、若手は６件増加の21件、合計74件を選考委員会にて採択候補と致しました。若手については、ここ数年20倍を超える競争倍率でしたが、今回採択件数を増やすことで、依然として、高倍率であるものの、15.7倍まで引き下げることができております。

次に選考された課題を一般助成で医学・生物系１件、理工系１件を、若手助成で理工系１件を、ご紹介申しあげます。

まず初めは、一般助成の生物系から
４番　大阪大学医学系研究科および生命機能研究科　井上　大地（いのうえ　だいち）さんの、
「セレノプロテイン群による未知の造血制御機構の解明」です。

申請者らは、これまで、幹細胞のがん化・老化を対象として、RNAレベルや翻訳レベルでの制御機構の破綻により遺伝情報が歪められる現象を研究してきました。その過程で、高齢者の造血幹細胞における、脂質過酸化の蓄積防止や抗酸化系に不可欠なセレノプロテイン群及びその合成系遺伝子の発現低下とその加齢に伴う抗酸化機構破綻への関与を想定していました。本研究では、新規生体モデルや単一細胞解析を用いて、セレノプロテイン合成破綻が造血機能に及ぼす影響、細胞系統依存的な脆弱性、それらの制御における骨髄環境の役割を探索します。さらに、正常とがんを切り分けるセレノプロテイン群内の使い分けについても、斬新な解析手法を用いて探索し、がんや老化における造血制御機構の解明を新しい切り口から目指すものです。

次に一般助成の理工系から
20番　東京大学物性研究所　近藤　猛（こんどう　たけし）さんの、
「均一性を極めたCuO2面で発現するモット絶縁相近傍の高温超伝導電子状態の解明」です。

銅酸化物高温超伝導体における超伝導発現機構の解明は、今なお固体物理学における最重要課題の一つです。特に、単位砲あたり３枚以上の隣接するCuO2平面を有する「多層系銅酸化物」は高い臨界温度を示すことが知られていますが、これらは、電荷供給層と直接接することのない均一で「綺麗なCuO2面」を内部に有するため、高温超伝導機構に直接関連する内因的な電子構造の特徴を探る上で重要です。申請者はレーザー光源を用いる最先端の超精密角度分解光電子分光系を整備し、これを用いて、極低温下で内部CuO2面の電子状態を解明し、新しい電子相図を描き出すことを目指しています。特に基礎的物理量であるフェルミ面の特徴など、高温超伝導機構と直接関係する問題を解決できる可能性が高いと考えられます。

若手助成では、理工系から
７番　東京大学大学院工学系研究科 附属量子相エレクトロニクス研究センター　岡村　嘉大（おかむら　よしひろ）さんの、
「マルチフェロイクス中のスピン励起によるテラヘルツ光起電力効果」です。

光起電力効果は、現代の光デバイスの重要なテクノロジーの１つですが、既存の光起電力効果の研究では、可視光・近赤外光領域の光電変換技術として行われてきました。一方で、そこから３桁低いエネルギー領域であるテラヘルツ領域については、通常の電子遷移が存在しないため、同じ原理が使えません。本研究では、この課題を克服するため、磁性と誘電性が共存するマルチフェロイクスという物質群において、エレクトロマグノンと呼ばれる固有の磁気励起に期待される新しい量子機構による光起電力効果を用いることで、新しいテラヘルツ領域での光電変換技術の実現を目指します。この機構では超高速かつ非散逸な応答が期待できるため、既存の熱感知の検出器とは一線を画すテラヘルツ光電変換が実現できるものと期待されます。

最後に、三菱財団の研究助成は、公募制を貫き、将来に向かって大きく羽ばたく可能性を秘めた研究者を選んできたことでもよく知られております。本年度もこの伝統にそった選考を行うべく努力いたしました。

今回は、一般、若手合せて総額４億２千万円の自然科学研究助成により、74件の研究を支援できることとなりました。心からお礼申し上げ、ご報告を終らせて頂きます。

人文科学
審査報告

人文科学選考委員長
岩波　敦子

人文科学部門 研究助成の選考結果をご報告申し上げます。

本年度の人文科学部門の研究助成の総額は、昨年対比で１千５百万円増額の８千５百万円として頂き、昨年度同様、一般助成の枠内で大型連携研究助成（大型助成）を実施しました。

応募は、ここ数年増加傾向にあり、本年度は、大型13件、一般277件の計290件と昨年対比36件の増加となり、コロナ禍前の水準まで戻りました。海外の研究者との共同研究など在外研究に積極的に取り組む研究課題が増え、コロナ禍の影響も一段落したことを強く印象付けております。

審査にあたっては、選考委員会、面接は実開催を原則とし、大型は面接を経て２件、一般は31件、昨年対比３件増加の計33件を採択候補としました。女性の比率は、個人助成32件のうち８件で25％（昨年実績　５件・16.7％）ですので、女性参画の一つの基準となるクオーターとなりました。女性比率はもちろん母数である各分野の女性研究者数と連動しますので、性差あるいは年齢を問わず研究者が継続的に息長く研究活動を続けていける環境整備が引き続き課題と考えております。

選考に当たっては、今年度も深い人間理解に資する人文科学と、現代社会が直面する喫緊の課題解決を目指す社会科学の双方から、これまでの研究成果に裏打ちされた堅実且つ実現可能性の高い研究計画であるとともに、新しい切り口で課題に取り組む意欲的な研究課題をバランスよく採択できました。

ここで今回の助成先のなかで、代表的な研究をご紹介させて頂きます。まず大型助成案件の１番　研究代表者は法政大学江戸東京研究センターセンター長　米家志乃布氏の「都市のアイデンティティの再発見と近未来にむけての再評価－江戸東京研究を事例として」です。

日本の首都として世界随一の大都市東京の「都市のアイデンティティ」を問い直す本研究課題は、都市論や建築史や文化論など多様な分野の研究者による多角的な知見から、変容を通じて新たに生まれてくる「伝統」の創出を長い時間軸で捉え直すことを目指しています。多元的な視座を有した、社会への還元も期待できる大型連携プロジェクトに相応しい研究課題です。

続いて一般助成案件の23番 国立民族学博物館　特定教授　西尾哲夫氏の「ギヨーム＝アンドレ・ヴィロトー著『アラブ音楽事典』の研究－アラブ音楽概念と民族音楽学の形成過程の解明」です。

ナポレオンのエジプト遠征に同行したフランスの音楽学者ギヨーム＝アンドレ・ヴィロトー（1759～1839）のエジプト音楽に関する調査遺稿『アラブ音楽事典』（現在、国立民族学博物館図書室所蔵）は、未公刊で残され、詳細な検討が俟たれている中東音楽の貴重な現地調査資料であり、世界初のアラブ音楽の事典とも呼び得る業績です。その手稿を編集、校訂テクストを出版する作業は、民族音楽研究のみならず、世界水準で音楽学に広く貢献することが期待されます。フランス文学、アラビア語、音楽史といった多岐に渡る専門家が協力して、横断的な文化遺産の調査に当たる本研究は、国際的にも意義の高い研究課題です。

最後に、日本の人文・社会科学研究は、その実証性や緻密さにおいて国際的にも高い評価を得ている一方で、共同研究に比し個人研究も多く、競争的資金の獲得において不利な面は否定できません。その中で三菱財団はこの分野への助成を長期的な視野にたって続けてくださっており、そのご尽力に厚く御礼申し上げたいと存じます。今後もご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

社会福祉審査報告

社会福祉選考委員長
鈴木　俊彦

社会福祉部門の事業及び研究助成の選考結果についてご報告申し上げます。

本年度の社会福祉部門の事業及び研究助成の総額は、昨年対比で１千万円増額の１億１千万円としていただき、選考を行いました。

応募総数は、積極的な広報宣伝活動、オンラインでの応募説明会実施の効果もあり、156件と引き続き高水準となりました。

申請内容につきましては、応募者の的確な問題意識の下、これまで必ずしも十分な取り組みがなされてこなかった様々な社会的課題に対する実践的な事業や、開拓的な研究など、採択に値する良質な案件が数多くありました。

分野別に見ますと、応募は例年同様、地域・在宅支援、高齢者、児童・青少年、身体障害、精神障害が多く、中でも発達障害、災害復旧・防災、自殺予防の分野が昨年に比して増加しております。採択も同様の傾向となっております。

また、審査に当たっては、選考委員会、面接ともにすべて実開催とし、予定どおりの審査を行いました。選考委員会で選定した54件の案件を６日間かけて個別に面接し、最終的に前年対比で９件増の42件を採択候補としました。

内訳としては、一般案件が19件、連携・協働案件が23件であり、増加した９件のうち７件が連携・協働案件となっております。

次に、助成案件のうちから、我が国の社会課題を的確に捉えて対処しようとする取組を２件、御紹介させていただきます。

まず、20番の「認知症の本人や家族の想いを踏まえた地方自治体認知症施策推進計画の策定に向けた議論および手引きの作成」です。認知症の高齢者数は2040年には584万人と大幅に増大することが予想され、誰もが認知症になり得る時代の中で、認知症となっても尊厳と希望をもって暮らすことができるよう社会の各分野で取組が進められています。その中で当面の最大のポイントが地方自治体の認知症施策推進計画に認知症の本人や家族の意見やニーズをいかに反映させるかという点です。本事業は、自治体の計画策定において、認知症の本人や家族の参画を進めるための幅広い取組を行おうとするものであり、今後の共生社会の実現に向け大きな効果が期待されるものであります。

次に、27番の「防窮プログラムの確立と効果検証」です。社会経済の変容を背景として、幅広い層において生活困窮リスクが高まっており、今般のコロナ・パンデミックの影響により、そのリスクは更に増大する傾向にあります。生活困窮リスクに対しては、様々な制度や事業が用意されているものの、実際に生活困窮に直面した場合に、円滑・確実にこれらの支援にたどり着けるとは言い難い状況にあります。本研究は、独自に開発した支援制度検索アプリを活用して生活困窮に対処するためのプログラムを構築し、地域においてその実証実験と普及を図ろうとするものであり、生活困窮の深刻化に対処する効果的な方策として期待されるものであります。

最後に、本財団の助成は、社会福祉分野で先駆的、意欲的な取組を行っている事業者や研究者にとって大きな励みとなっており、我が国の社会福祉の発展に多大な寄与をしているものと考えます。三菱関連各社の御厚意に心から御礼を申し上げ、社会福祉部門の事業・研究助成の審査結果の報告とさせていただきます。

文化財保存修復審査報告

文化財保存修復選考委員長
小松　大秀

文化財保存修復助成事業の助成選考結果についてご報告申し上げます。

本年度の文化財保存修復助成事業の助成の総額は、昨年対比で５百万円増額の３千５百万円として頂き、選考を行いました。

応募件数は昨年度と同水準の24件の実績です。分野別には、絵画、彫刻、工芸品から歴史資料、考古資料に至るまで幅広い分野での保存・修復案件の申請があり、都道府県別には、全国15の地域から応募がありました。

審査にあたっては、各委員がそれぞれの専門性を活かして全案件を評価し、選考委員会にて高得点のものから、各文化財の保存・修復の意義、必要度等を慎重に審査した結果、応募24件中14件（競争率1.7倍）を採択候補と致しました。応募同様に絵画、彫刻、工芸品、書跡、歴史資料等と幅広く採択することができ、修復するに足る良質の採択先を選定できたものと考えております。

応募件数はここ数年減少傾向にありましたが、全国すべての都道府県の教育委員会・公立博物館へのきめ細かな情報宣伝活動を行い、また、日本博物館協会や文化財関連の学会等を通じて本事業の趣旨を広く紹介するなど、積極的に活動した結果、今年度は、応募数が下げ止まり、応募総額は上昇に転じました。

情報宣伝活動の成果には手ごたえを感じており、この動きを2025年度も継続することで、応募件数の増加等、選考母集団の良質化に努めてまいります。

続いて今回の案件のなかで代表的なものを３件ご紹介させて頂きます。

その１は、13番の俵屋宗達筆「狗子図」です。

国宝の「風神雷神図屏風」で有名な俵屋宗達は、日本美術を世界に知らしめた「琳派」の祖とも言うべき日本美術の巨匠です。華やかで装飾的な画風を特色としますが、その一方で、水墨画にも新境地を開き、数多くの作品を遺しています。子犬を描いた作品は十点程知られていますが、中でも本作は宗達派水墨画の特徴をよく示した画趣豊かな佳作と有名です。宗達派の水墨画は、今村紫紅や速水御舟ら近代日本画家にも大きな影響を与えており、今回修復を加えることによって、調査研究、展示などにおおいに活用できるものと考えます。

その２は、10番の「阿弥陀如来立像」です。

本像は信仰の対象として大切に護られてきたため、公開の機会は極めて限られてきましたが、令和５年に神奈川県立歴史博物館の展覧会に出品され、この系統の阿弥陀如来像の中でも出色の出来栄えを示すことが確認され、鎌倉彫刻の優品としてあらためて注目されることとなりました。しかし、全体に保存状態が悪く、早急の修理が望まれるような状況となっています。今回、修理が施され、適切に保存管理が図られることになれば、この分野の研究もさらに進み、その歴史的な価値もさらに高まるものと考えられます。

その３は、９番の「小倉色紙　伝藤原定家筆」です。

小倉色紙は、平安時代末から鎌倉時代初期にかけて歌人として活躍した藤原定家筆と伝えられる色紙で、１枚に和歌１首を書いたものです。著名な歌人の筆ということもあり、桃山時代以降、豊臣秀吉をはじめとする大名や、茶を嗜む数奇者などの間で珍重され、現在では50枚ほどが伝わっています。しかしながら、それらの多くは後世の作であると考えられ、近年の研究では、本作「あいみての」と徳川美術館所蔵の「こひすてふ」の２枚が定家の真筆である可能性が高いと考えられています。このように、書道史、歌道史、茶道史を辿る上できわめて貴重な作品ですが、経年の劣化が著しく、ここで本格的な修理をおこなうことによって、この貴重な文化財の意義を再確認し、さらなる活用を図ることができると考えます。

さて、開始以来６年を迎え、国や地方自治体の力が及ばない部分に支援できる本助成は今後ますます重要になると思われ、三菱関連諸企業のご尽力に厚く御礼申し上げて審査報告を終わらせて頂きます。

自然科学
受領者代表挨拶

東京工業大学物質理工学院応用化学系　教授
田中　克典

2024年度の自然科学研究助成に採択されました一般助成の受領者53名、ならびに若手助成の受領者21名の計74名を代表いたしまして、東京工業大学の田中克典が御礼とご挨拶申し上げます。理事長の三毛兼継様、役員の皆様、選考委員長の十倉好紀先生、選考委員の先生方、そして関係者の皆様に心から感謝申し上げます。助成金を有効に活用させていただき、私達が提案いたしましたチャレンジングで夢のある研究を実現いたします。

近年はともすると着実な成果を見越した研究を行いがちです。これは私達にも責任がございますが、大学や研究機関での運営費が顕著に少なくなっている現状では、「ウケの良い」研究を提案しがちになってしまいます。定常的に研究室を運営し、インパクトファクターの高い研究を行うことはできますが、20年後の自然科学をリードするようなチャレンジで夢のある成果を得ることはできません。若手研究者から中堅研究者となった今、この状況では自然科学を志す若手人材を育てることはできないと危機感を抱いています。私達が新しい世代のリーダーとなり、20年後にやっと活躍する新しい自然科学を開拓することが必要であると感じています。

私は12年前にクロスアポイントメント先である現職の理化学研究所にPIとして着任いたしましたが、マウスからヒトに至るまで、体の特定の疾患部位で有機合成化学を行なって、低分子薬剤を合成して治療することを提案いたしました。体内のがん現地でテイラーメイドに薬剤を調製することにより、副作用の問題を根本から解決して、患者様を救うアイデアです。当初はほとんどの先生からクレイジーな考え方であり、決して実現はできないと酷評されましたが、自分を信じて研究を続けました。今、世界で初めて体内のがん現地で薬剤を触媒的に合成し、治療することに成功しました。これはアカデミアの研究としてだけでなく、一部は臨床研究にも進んでおり、私の第一の夢を実現できました。

私が三菱財団助成にご支援を受けて、次に挑戦するのは、体内でポリマーを有機合成する研究です。血液に溶けないポリマーは静脈から入れると詰まってしまいますが、脳梗塞やがんの多量出血の際に、溶解性の良い低分子と触媒を注射し、疾患の現地で速やかにポリマーを合成して止血します。このチャレンジングな研究によって、多くの患者様を助けることができると信じています。近い将来には、血管の望む位置で望む機能性材料を触媒的に合成して、温度を測ったり、細胞を培養したり、あるいは体内で新しいエネルギーを生み出して循環させることも夢ではないと考えています。

このように私の研究例を紹介いたしましたが、今回のご支援をもとに74名の受領者は常にチャレンジングで独創的な夢を提案し、これに向かって苦労を惜しまず努力いたします。その結果、我が国の自然科学の研究が再び息を吹き返し、20年後には基礎研究の成果に基づく新しい社会を生み出すことができると信じています。このようなチャレンジングな研究を行うことができる機会を与えてくださった三菱財団の関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。最後になりましたが、皆様の益々のご発展を祈念して、代表者の挨拶とさせて頂きます。本日は誠に有難うございました。

人文科学
受領者代表挨拶

法政大学江戸東京研究センター　センター長
米家　志乃布

今年度、貴財団より助成いただく人文科学研究助成の受領者を代表いたしまして、誠に僭越ではございますが、御礼のご挨拶をさせていただきます。

まずは今年度も、大型連携研究助成２件、一般助成31件、合計33件の人文科学研究課題に対する助成を賜わりましたことを心より御礼申し上げます。貴財団は、長い期間にわたり、学術研究に対する援助を通じて、学問の発展に多大なる貢献を果たしてこられました。このような継続的な研究支援活動に敬意を表したいと存じます。

国際社会においては、ロシアのウクライナ侵攻やイスラエルによるパレスチナ・ガザ地区への攻撃など、同じ地球上で深刻で心を痛める事態が起きているなか、私たちにとって重要なことは、異なる価値観を尊重し、その多様性を理解しながら、人々が共生していくことのできる平和な社会構築を目指すことにあります。まさに貴財団のおっしゃる「心の豊かさ」が求められる社会において、人文科学分野の果たす役割は重要性を増しています。本年度助成を賜りました33件の研究課題につきましても、様々な時代や国・地域における多面的な価値観の理解を促す分析的視点、社会的課題へのアプローチをみることができます。

ここで、この場をお借りしまして、私ども法政大学江戸東京研究センターの研究課題「都市のアイデンティティの再発見と近未来への再評価 - 江戸東京研究を事例として - 」について紹介させていただきます。

日本の首都である東京では、明治以降、強固な近代的発展主義と開発志向のもと、より豊かにより強く、欧米列強に負けない首都づくりを模索してきました。そのなかで、多くの伝統的な文化や景観が失われてしまいました。また、大正末期の関東大震災と昭和のアジア・太平洋戦争での空襲による街の破壊、戦後の高度経済成長期における急激な改造、さらにバブル期の過剰な開発等によって街は一変し、豊かな自然の風景も見られません。しかし、より長いタイム・スパンで考えるならば、東京には地形や水流、郊外の自然、地名や名所、生活空間や賑わいなど、江戸や江戸以前から何世代にもわたって脈々と受け継いできたものもあります。そこで本研究では、人文科学を中心とした学際的な研究者グループが、都市のアイデンティティの再発見と近未来への再評価を中心に共同研究を行います。本研究助成の目的である「解決すべき社会的課題」として、都市の経済的な発展だけでなく、都市が急激に変化していくなか、見えないかたちで人々を支えてきた思想や価値観に注目し、近未来への持続的な社会への価値転換を促すことを目標として研究を進めてまいります。

最後になりましたが、貴財団のご支援により、助成を頂いた本研究を含む33課題の遂行が可能となりましたことに、改めて御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

社会福祉
受領者代表挨拶

NPO法人アイ・コラボレーション神戸　理事長
板垣　宏明

はじめまして。兵庫県神戸市からまいりました就労継続支援事業所NPO法人アイ・コラボレーション神戸 理事長の板垣宏明と申します。弊所は、私のような車いす利用者はじめ、視覚、聴覚、精神、発達等、様々な障害のあるスタッフと共に、障害を「価値」としたユニバーサルデザイン対応の製品開発や、アクセシビリティ評価を事業としています。

さて、第55回（2024年度）三菱財団社会福祉事業・研究助成においては、計42件、総額１億１千万円の助成を採択していただき、誠にありがとうございます。

本助成は、開拓的・実験的な社会福祉を目的とする民間の事業並びに科学的調査研究を対象としていらっしゃいます。今回の助成先一覧を拝見し、弊所の活動の視点からも大変勉強になる研究ばかりだと感心しております。

さて、弊所の調査研究は、「だれもが一人で出かけられるまちづくりのためのナビゲーションタグ整備と普及展開に向けた実践的研究」という、少し長いテーマで恐縮です。

「ナビタグ」とは、点字ブロックや、壁にシール貼付されたコードを、アプリで読み取って情報提供を行う技術で、開発メーカーは日本及び海外に複数あり、日本では2019年頃から実証実験を経て実導入され始め、視覚障害のある方々への認知が広がっています。

点字ブロックは岡山県で生まれた画期的なシステムで、1970年開催の大阪万博を契機に、世界中に普及しました。ただ、分岐点でどこに行けば良いか、目的地にたどり着けたのかどうかは分かりませんでした。この問題を「ナビタグ」が解決します。GPSを利用しない「画像認識」なので案内にズレが無く、分岐点や目的地を多言語で案内することができます。

弊所は、「ナビタグ」の各種メーカー・神戸アイセンター・近畿大学・障害当事者団体・障害者支援団体と共創した「チームOTAGAISAMA（おたがいさま）」の主要メンバーとして、2025年の大阪・関西万博開催と連携し、来訪者の移動の容易性や回遊性を高めるツールである「ナビタグ」による移動支援の研究を行います。

これは期間限定の社会実験として終わらせるのではなく、今後の社会実装の中で、ナビタグの普及活動、評価、改善を行い、だれもが一人で出かけられるまちづくりに繋げ、インフラとして日本中へ普及…そして再び、世界へ普及することを目指しています。

また、本事業が私のような障害当事者が率先して主導する連携・協働の「共創モデル」の先駆的な成功事例になれば…と強く思っており、精一杯頑張らせていただく所存です。

私同様、採択された皆様それぞれに助成事業に対する想いや、採択に対する感謝のお気持ちをお持ちだと感じております。

三菱財団の皆様、選考委員の先生方、ご来賓の皆様、本助成のために大変貴重な基金をご提供くださいました三菱グループ各社に対し、心から御礼申し上げます。採択者一同、最善を尽くすことをお約束いたします。2024年度助成決定の42テーマが、社会福祉事業・研究に益々の発展と貢献をもたらし、ひいては社会福祉の向上に資することを祈りつつ、お礼の言葉に代えさせていただきます。

文化財保存修復
受領者代表挨拶

神奈川県立近代美術館長
長門　佐季

このたびは、三菱財団文化財保存修復事業助成に採択いただきまして誠にありがとうございます。諸先生方を前に、たいへん僭越ではございますが、今年度、助成を賜ります文化財保存修復事業14件の受領者を代表いたしまして、ご挨拶させていただきます。

はじめに、三菱財団の皆様、選考委員の先生、関係者の皆様方に心より感謝を申し上げます。

三菱財団発足50周年を記念して2019年度に立ち上げられた文化財保存修復事業への助成は、保存・修復の分野を対象に、先人の残した学術的、芸術的価値の高い貴重な文化財を未来に継承することを目的としたものです。今年度、採択されました文化財は、北は北海道から南は福岡県にわたる、国内の寺社ならびに美術館博物館等が所蔵する、絵画、彫刻、工芸品、書跡、古文書、歴史資料等であり、時代も中世から近代までと幅広いものとなっています。経年による劣化は文化財にとって避けられないものですが、私どものような地方自治体が運営する美術館におきましても、保存・修復にあてられる予算は限られており、貴財団からご支援がいただけますことは、文化財の継承の点からも大変意義深く、あらためて感謝申し上げる次第です。

ここで、当館がこのたび、助成いただきます俵屋宗達筆《狗子図》についてご紹介させていただきます。

俵屋宗達は、桃山時代末から江戸時代初期に活躍した画家であり、建仁寺所蔵の国宝《風神雷神図屏風》などが知られていますが、その装飾的画風の一方で、水墨にも優れた作品を残しており、本作は宗達が好んだモチーフのひとつである犬を描いた墨画です。本作品には、京都御所所蔵の《犬図屏風》と同じ落款印章があり、17世紀前半に描かれたものと推定されます。これまでに修復処置が施された形跡はなく、宗達特有の墨の微妙な階調をもつ「たらしこみ」が子犬の様子を繊細かつ生き生きと伝える、美術史的に価値の高い作品と評価されています。

本作品は、古美術の蒐集家としても知られた日本画家の木下翔逅旧蔵品として、2005年に当館に寄贈されました。国内では県立の美術館が所蔵する宗達作品は希少であり、これまでにワシントンD.C.のナショナル・ギャラリーをはじめ、国内外からの展示出品依頼に応えてまいりました。しかしながら、受贈当初からの焼けや摩耗、剥落といった損傷に加え、経年による劣化の進行が見られることから、他館への貸出がむずかしくなり、早い時期の修復処置が喫緊の課題でありました。

神奈川県立近代美術館は、その名に「近代」を冠した美術館ではありますが、1951年の開館以来、収集および展覧会活動におきまして、「近代」という時代区分の枠にとらわれず、「近代性」という観点から活動を行ってまいりました。近世の画家である俵屋宗達が美術史の上でその評価を高めたのは大正期に入ってからのことであり、小林古径、速水御舟といった近代の日本画家をはじめ、西洋からの美術の動向に対して日本の伝統的な描画や個性というものの再評価を意識した洋画家たち、あるいは19世紀末のアール・ヌーヴォーやジャポニスムといったヨーロッパの芸術への影響も指摘されるところです。

美術館という現場におきましては、時代や地域を越えた横断的な研究、あるいは展示活用がますます求められています。このたびの助成により、適切な処置が行われ、作品公開の機会を確実にすることで、近世以前の芸術を近現代美術史の文脈において検証し直すことは、美術史研究の上でもきわめて重要な意味があると認識しております。

最後になりましたが、このたびのご支援により、修復の推進ができますことを、あらためて受領者一同、深く御礼申し上げるとともに、今後とも文化財がよりよいかたちで未来に継承されますことを心に命じ、文化芸術の発展に務めてまいりたいと思います。

本日は誠にありがとうございました。

研究成果報告会

2024年９月11日、丸の内の東京會館で、2024年度助成金贈呈式の開催に先立ち、助成金受領者と来賓、選考委員、財団役員合わせて約190名が出席し、2024年度研究成果報告会が開催されました。

今回は、過去の助成先の中から、自然科学分野・社会福祉分野の２分野で成果報告をいただきました。

自然科学分野研究成果報告

自然科学分野では、2019年度および2023年度の助成先である、名古屋市立大学理学研究科准教授の秦 和弘（はだ かずひろ）氏から、助成対象となった2019年度の「東アジア国際電波望遠鏡ネットワークで解明する巨大ブラックホールジェットの生成機構」、及び2023年度の「国際ミリ波電波望遠鏡ネットワークで挑む巨大ブラックホールジェットの生成・加速メカニズム」の研究成果をもとにご報告いただきました。

ご報告の後、質疑応答が行われ、最後に自然科学分野十倉選考委員長の講評が行われました。

秦 和弘氏による成果報告の様子

秦　和弘氏

十倉選考委員長講評

社会福祉分野成果報告

社会福祉分野では、2017年度および2023年度の助成先である、一般社団法人ハビリスジャパンの執行理事であり、東京大学医学部附属病院リハビリテーション部副部長・准教授の藤原清香（ふじわら さやか）氏から、助成対象となった2017年度の「上肢欠損小児の運動用義手のニーズと有効性に関する研究および総合的な普及支援事業」、及び2023年度の「スライドリコーダーの製品化と障害のある児童への適応評価、有用性の実証と普及支援活動」の成果をもとにご報告いただきました。

ご報告の後、質疑応答が行われ、最後に社会福祉分野鈴木選考委員長の講評が行われました。

藤原清香氏による成果報告の様子

藤原清香氏

鈴木選考委員長講評

2024

第55回（2024年度）の

助成報告

助成金受領者と助成概要

第55回（2024年度）三菱財団自然科学研究助成先一覧

【一般助成】

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
1	宮城県	東北大学多元物質科学研究所 講師　安達（あだち）　正芳（まさよし）	Fe系合金フラックスを用いたバルクAIN結晶の液相成長法の開発	5,000,000円
2	宮城県	東北大学大学院薬学研究科 准教授　有村（ありむら）　奈利子（なりこ）	運動機能回復における全脳的な代償性回路の構築メカニズムの解析	4,600,000円
3	東京都	東京大学医科学研究所 教授　稲田（いなだ）　利文（としふみ）	コドン最適度とリボソーム衝突依存のmRNA分解経路の解明	6,000,000円
4	大阪府	大阪大学大学院医学系研究科 教授　井上（いのうえ）　大地（だいち）	セレノプロテイン群による未知の造血制御機構の解明	12,000,000円
5	東京都	順天堂大学医学部 准教授　猪俣（いのまた）　武範（たけのり）	不治の病『ドライアイ』の克服に向けたデジタル情報とゲノミクスの融合	8,000,000円
6	長崎県	長崎大学高度感染症研究センター 准教授　浦田（うらた）　秀造（しゅうぞう）	ヒト病原性齧歯類媒介性ウイルスの統合的理解に向けた基礎研究	5,000,000円
7	神奈川県	慶應義塾大学理工学部 教授　緒明（おあき）　佑哉（ゆうや）	非晶質共役高分子ネットワークの創製と新規材料探索の高速化	5,500,000円
8	東京都	東京大学大学院理学系研究科 助教　奥村（おくむら）　大河（たいが）	OBF-STEM法を用いたファーテライトの結晶構造解明	5,200,000円
9	鹿児島県	鹿児島大学学術研究院 准教授　小沼（おぬま）　健（たけし）	表皮細胞におけるハウスの設計プログラム	5,000,000円
10	兵庫県	理化学研究所 生命機能科学研究センター チームリーダー　小幡（おばた）　史明（ふみあき）	微量元素による個体寿命制御機構の解明	6,000,000円
11	群馬県	群馬大学大学院医学系研究科 教授　川辺（かわべ）　浩志（ひろし）	自閉スペクトラム症患者の優れた記憶力の分子機序	5,000,000円
12	愛知県	基礎生物学研究所 研究員　淨住（きよずみ）　大慈（だいじ）	新規な経管腔シグナル伝達「ルミクリン」の構造生物学的理解	7,000,000円
13	宮城県	東北大学学際科学フロンティア研究所 准教授　郭（ぐお）　媛元（ゆあんゆあん）	がんを検知する能動カテーテルの開発	6,000,000円
14	大阪府	関西大学化学生命工学部 准教授　日下部（くさかべ）　りえ	魚類ゲノムの比較解析による運動器形成機構の解明	6,800,000円
15	東京都	東京都立大学理学部 教授　楠本（くすもと）　周平（しゅうへい）	炭素の電子状態制御 ーフロンティア軌道の逆転と遷移金属元素に倣った酸化還元ー	11,500,000円
16	茨城県	筑波大学数理物質系 教授　久野（くの）　成夫（なりお）	南極30cmサブミリ波望遠鏡用2偏波広帯域受信機の開発	6,300,000円
17	東京都	慶應義塾大学医学部 教授　久保田（くぼた）　義顕（よしあき）	臓器横断的なアンジオクラインシグナルの実体の解明	6,000,000円
18	京都府	京都大学大学院薬学研究科 教授　倉永（くらなが）　英里奈（えりな）	生体組織における力学過程の関与と応答メカニズムの解明	5,000,000円

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
19	東京都	順天堂大学大学院医学研究科 教授　小松（こまつ）　雅明（まさあき）	液―液相分離とオートファジーの共創による生体防御機構の解明	6,100,000円
20	千葉県	東京大学物性研究所 准教授　近藤（こんどう）　猛（たけし）	均一性を極めたCuO2面で発現するモット絶縁相近傍の高温超伝導電子状態の解明	11,800,000円
21	東京都	東京工業大学理学院 教授　近藤（こんどう）　美欧（みおう）	金属錯体の配列制御に立脚した触媒反応の自在操作	7,900,000円
22	埼玉県	埼玉大学大学院理工学研究科 教授　斎藤（さいとう）　雅一（まさいち）	メビウスσ芳香族化学の創成	5,000,000円
23	東京都	日本医科大学大学院医学研究科 教授　酒井（さかい）　真志人（ましと）	マイクログリアの機能調節を介した新規MLD治療法の開発	5,000,000円
24	京都府	同志社大学大学院脳科学研究科 教授　坂場（さかば）　武史（たけし）	行動に連関した記憶痕跡シグナル素子の同定	6,000,000円
25	東京都	慶應義塾大学医学部 教授　塩見（しおみ）　春彦（はるひこ）	ES細胞から全能性細胞を誘導する培養系の開発	5,000,000円
26	大阪府	国立病院機構大阪南医療センター 臨床研究部 室長　高松（たかまつ）　漂太（ひょうた）	抗MDA5抗体陽性皮膚筋炎に合併する急速進行性間質性肺炎の病態解明	5,000,000円
27	東京都	東京工業大学物質理工学院 教授　田中（たなか）　克典（かつのり）	マウス体内疾患部位での機能性ポリマーの金属触媒合成と治療研究	11,000,000円
28	茨城県	国立科学博物館地学研究部 研究主幹　對比地（ついひじ）　孝亘（たかのぶ）	最古の恐竜を求めて ：アルゼンチン共和国北西部に分布する中―上部三畳系チャナレス層の動物相と古環境	6,300,000円
29	東京都	中央大学理工学部 教授　坪井（つぼい）　陽子（ようこ）	TOO的多波長分光観測による恒星惑星磁気圏の構造の解明	4,000,000円
30	静岡県	静岡大学農学部 准教授　長尾（ながお）　遼（りょう）	分子構造に基づく光合成集光性色素タンパク質の結合選択機構の解明	5,200,000円
31	福岡県	九州大学大学院医学研究院 教授　中島（なかしま）　欽一（きんいち）	老化脳と神経疾患に共通した脳機能低下機序の統合的理解と病態改善戦略の創出	6,000,000円
32	東京都	芝浦工業大学工学部 教授　中野（なかの）　匡規（まさき）	イオンゲートによるファンデルワールス磁性体の磁性制御	5,500,000円
33	宮城県	東北大学大学院農学研究科 教授　野地（のち）　智法（とものり）	乳幼児の腸内フローラ形成を助長するミルク開発	6,300,000円
34	石川県	金沢大学理工研究域 教授　長谷川（はせがわ）　卓（たかし）	次世代の環境経時変動解析に向けて：極微量アルケノンによる古水温推定法の開発	7,000,000円
35	東京都	東京大学医学部 講師　早河（はやかわ）　翼（よく）	癌組織中の単一細胞糖鎖プロファイリングと標的治療応用	5,300,000円
36	愛知県	名古屋大学大学院工学研究科 教授　日出間（ひでま）　るり	高分子水溶液の流動挙動転移と溶液内部の不均一さに基づくモデル化	5,500,000円

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
37	徳島県	徳島大学先端酵素学研究所 准教授　福井（ふくい）　一（はじめ）	心臓管腔を形成する血行流動を介した熱作用機構の解明	4,500,000円
38	大阪府	国立循環器病研究センター 先端医療技術開発部 部長　藤原（ふじはら）　祥高（よしたか）	遺伝子組換え動物を用いた受精の分子メカニズム解明と精子受精能力検出・制御法の開発	5,200,000円
39	東京都	東邦大学医学部 教授　船戸（ふなと）　弘正（ひろまさ）	睡眠負債と体重負債の並行制御系の解明	11,000,000円
40	熊本県	熊本大学大学院先端科学研究部 教授　町田（まちだ）　正人（まさと）	金属ナノ薄膜型ハニカム触媒の開発	7,500,000円
41	東京都	東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 准教授　松沢（まつざわ）　優（ゆう）	Ⅲ型インターフェロンによる小腸上皮細胞死の誘導機構の解明	5,000,000円
42	愛知県	名古屋大学大学院理学研究科 教授　松本（まつもと）　有樹修（あきのぶ）	免疫リボソームが生み出す翻訳動態の分子機構の解明	6,000,000円
43	大阪府	大阪公立大学大学院医学研究科 教授　水関（みずせき）　健司（けんじ）	環境に応じた柔軟な行動変容を実現する脳領域横断的なセルアセンブリ相互作用の解明	6,000,000円
44	石川県	金沢大学ナノ生命科学研究所 准教授　宮成（みやなり）　悠介（ゆうすけ）	超分子複合体レパトア解析より紐解くクロマチン高次構造制御の理解	10,000,000円
45	神奈川県	聖マリアンナ医科大学医学部 主任教授　宮部（みやべ）　斉重（よししげ）	炎症性腸疾患の病態可視化から新規治療開発に挑戦する	5,000,000円
46	東京都	東京大学大学院工学系研究科 教授　森田（もりた）　剛（たけし）	高温環境下における弾性定数の高精度計測方法の確立	5,000,000円
47	愛知県	基礎生物学研究所 教授　森田（寺尾）美代（もりた　てらお　みよ）	LZYを起点とした重力応答するオーキシン輸送の動的制御機構	6,100,000円
48	東京都	東京大学大学院医学系研究科 講師　柳下（やぎした）　祥（しょう）	思春期モノアミン系発達の分子・細胞生理・行動解析	5,200,000円
49	岡山県	岡山大学学術研究院 教授　湯浅（ゆあさ）　慎介（しんすけ）	心臓を構成する細胞の多様性獲得と病的意義の理解と制御	5,000,000円
50	東京都	東京女子医科大学医学部 講師　横溝（よこみぞ）　智雅（ともまさ）	造血システムの発生機構の解明	5,500,000円
51	京都府	京都大学大学院工学研究科 教授　米澤（よねざわ）　進吾（しんご）	超高感度バックグラウンドフリー磁気光学カー効果測定による量子振動の光観測	6,200,000円
52	北海道	北海道大学大学院理学研究院 教授　和多（わだ）　和宏（かずひろ）	発声学習行動の個体間多様性を創出する神経ゲノム分子基盤の解明	5,700,000円
53	宮城県	東北大学ニュートリノ科学研究センター 助教　渡辺（わたなべ）　寛子（ひろこ）	海洋底地球ニュートリノ観測で挑む地球内放射化熱量の解明：海洋底でのテストベンチ初稼働	7,300,000円
			合　計　　53件	336,000,000円

（所属先・職名については2024年９月11日現在）

第55回（2024年度）三菱財団自然科学研究助成先一覧

【若手助成】

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
1	東京都	北里大学薬学部 講師　朝倉（あさくら）　崇徳（たかのり）	肺非結核性抗酸菌症の喀痰および末梢血を用いたバイオマーカー探索	4,000,000円
2	東京都	国立極地研究所先端研究推進系 助教　石輪（いしわ）　健樹（たけしげ）	堆積物試料分析と固体地球ー氷床モデルによる南極氷床の変動履歴の解明	4,000,000円
3	京都府	京都大学医生物学研究所 助教　一條（いちじょう）　遼（りょう）	毛包幹細胞リモート制御メカニズムの解明	4,000,000円
4	鳥取県	鳥取大学学術研究院 准教授　稲葉（いなば）　央（ひろし）	細胞内における微小管内部空間の解析と応用	4,000,000円
5	福岡県	九州大学大学院人文科学研究院 准教授　太田（おおた）　真理（しんり）	非侵襲的脳刺激法を用いた第二言語獲得の神経機構の解明	4,000,000円
6	奈良県	奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 助教　大津（おおつ）　美奈（みな）	植物寄生性線虫はどのように植物の細胞壁構造を作り替えるのか？	4,000,000円
7	東京都	東京大学大学院工学系研究科 助教　岡村（おかむら）　嘉大（よしひろ）	マルチフェロイクス中のスピン励起によるテラヘルツ光起電力効果	4,000,000円
8	東京都	東京大学大学院工学系研究科 助教　北折（きたおり）　暁（あき）	スピントロニクス材料としての多自由度磁性体	4,000,000円
9	茨城県	物質･材料研究機構ナノアーキテクトニクス材料研究センター 主任研究員　小澤（こざわ）　大知（だいち）	発光中心の自在導入による量子光デバイス開発	4,000,000円
10	神奈川県	明治大学理工学部 専任講師　佐藤（さとう）　寿紀（としき）	X線宇宙観測によるニュートリノ研究を可能にする高角度分解能X線望遠鏡の開発	4,000,000円
11	東京都	東京大学大学院医学系研究科 特任准教授　塚崎（つかさき）　雅之（まさゆき）	非免疫細胞による抗腫瘍効果の解明	4,000,000円
12	東京都	東京大学生産技術研究所 講師　坪山（つぼやま）　幸太郎（こうたろう）	人工タンパク質と機械学習によるタンパク質寿命の統合的理解	4,000,000円
13	東京都	東京大学保健・健康推進本部 助教　平池（ひらいけ）　勇雄（ゆうた）	褐色脂肪細胞の鍵因子NFIAの機能解析とバイオバンクの統計解析から生活習慣病の精密医療へ	4,000,000円
14	静岡県	国立遺伝学研究所新分野創造センター 准教授　福島（ふくしま）　健児（けんじ）	革新的形質の遺伝基盤を発見する多種間遺伝子発現比較法の開発	4,000,000円
15	東京都	国立国際医療研究センター研究所 テニュアトラック部長　町田（まちだ）　晋一（しんいち）	構造機能学的アプローチによるHIV複製メカニズムの基本原理解明	4,000,000円
16	大阪府	大阪大学大学院医学系研究科 特任助教　南（みなみ）　聡（さとし）	オートファジー創薬の実現に向けたヒト糖尿病性腎臓病の病態解明	4,000,000円

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
17	富山県	富山大学研究推進機構 准教授　宮本（みやもと）　大祐（だいすけ）	睡眠時の記憶・情動回路動態の雌雄差	4,000,000円
18	東京都	東京工業大学物質理工学院 テニュアトラック助教　山口（やまぐち）　晃（あきら）	焦電体を電極触媒として用いた内部電場誘起による二酸化炭素還元の活性向上	4,000,000円
19	愛知県	名古屋大学未来材料システム研究所 助教　山本（やまもと）　瑛祐（えいすけ）	セリア原子膜の精密設計・集積による高速酸化物イオン伝導体の開発	4,000,000円
20	東京都	東京大学大学院医学系研究科 助教　吉井（よしい）　紗織（さおり）	拡散障壁と融合分裂がミトコンドリアの若返りにおよぼす影響の定量的解析	4,000,000円
21	東京都	東京大学大学院医学系研究科 助教　Wai（わい）　Kyi（ち）　Mar（まー）	出生前環境がテロメア長および小児の健康に及ぼす影響：出生コホート研究	4,000,000円
			合　計　　21件	84,000,000円

（所属先・職名については2024年９月11日現在）

自然科学研究助成概要（一般）

自然科学 1

Fe系合金フラックスを用いたバルクAlN結晶の液相成長法の開発

東北大学多元物質科学研究所
講師 安達　正芳

次世代パワーデバイスの材料としてAlN単結晶が期待されている。現在、昇華法によりAlN単結晶が作成されているが、大量生産技術は確立されていない。申請者らはAlN結晶の大量生産技術となり得る手法として液相成長法の研究を行ってきた。本研究では、新たな試みとして、Fe-Cr-Nbを溶媒として用いる方法を提案している。これは、Fe融液内においてCrがAlN溶解度積を増大させることに加え、Nbも同じく窒素との親和性が高いことに着眼した手法である。系統的な実験から各条件が成長に及ぼす影響を明らかにして本手法の最適化を目指すとともに、融液の熱物性測定技術やシミュレーションを用いることで、本手法の基礎的な理解を目指した研究も行う。

自然科学 2

運動機能回復における全脳的な代償性回路の構築メカニズムの解析

東北大学大学院薬学研究科
准教授 有村　奈利子

脳梗塞や外傷など脳の一部が損傷すると、一時的に運動機能が損なわれる。しかし、時間がたつと部分的に機能回復する。この機能回復は、脳の損傷していない別の部位が、損傷部位の機能を補填していると考えられているが、その詳しい分子的生理学的機構は不明な点が多い。我々は、小脳を損傷したマウスにおいて大脳等の領域間の脳波の干渉性や同期性が変化することを見出した。これらの変化は、脳の各領域は機能補完のための回路再編機構があることを示唆している。本研究では、小脳機能低下に伴って起きる神経回路再編で何が起きているかを分子的生理学的に明らかにし、運動機能の補填にどのようなメカニズムが関係しているかを明らかにする。

自然科学 3

コドン最適度とリボソーム衝突依存のmRNA分解経路の解明

東京大学医科学研究所
教授 稲田　利文

RNA合成と成熟化過程、翻訳異常で産生される不良タンパク質の蓄積は、タンパク質恒常性の破綻による広範な細胞機能の障害を引き起こすため、アルツハイマー病やパーキンソン病などの神経変性疾患や老化の原因になる。従って細胞の保持する様々な品質管理機構は、遺伝子発現の各過程で産生される異常産物を認識し分解排除することで、正常な遺伝子発現を保証している。本研究では、哺乳類細胞におけるコドン最適度（翻訳速度）依存mRNA 分解機構と衝突リボソーム依存のmRNA 分解機構（NGD：No-Go-Decay）を解析する。不良mRNAを排除する品質管理機構が解明されることで、不良タンパク質に起因する疾患の発症機構や老化のメカニズムを理解するための基盤になることが期待される。

自然科学 4

セレノプロテイン群による未知の造血制御機構の解明

大阪大学大学院医学系研究科
教授 井上　大地

2024年春より大阪大学医学部がん病理学教室に着任し、血液学を中心として正常と腫瘍、老化を切り分ける未知の仕組みについて多角的な視点から研究を進めております。特殊な翻訳を必要とするセレノプロテイン群は抗酸化システムの中枢を担っておりますが、これまでの研究でそれらの合成障害が血液老化形質に寄与することを見出しました。本研究では、新規生体モデルや単一細胞解析を用いて、セレノプロテイン合成破綻が造血機能に及ぼす影響、細胞系統依存的な脆弱性、それらにおける骨髄環境側の役割、がんにおけるセレノプロテイン群内の使い分けについて、斬新なCRISPRスクリーニングやタンパク解析手法を用いて探索して参ります。

自然科学研究助成概要（一般）

自然科学 5

不治の病『ドライアイ』の克服に向けたデジタル情報とゲノミクスの融合

順天堂大学医学部
准教授 猪俣　武範

ドライアイは世界で10億人以上が罹患する眼疾患であり、超高齢社会や With･After コロナにおけるデジタル社会において今後も増加する。本研究では申請者が独自開発したドライアイ研究用スマホアプリを東北メディカル･メガバンク機構のコホート研究にアドオンし、アプリで収集したデジタル化された行動や生活習慣等を含んだ個々人の包括的な健康情報と、バイオバンクの持つゲノム情報を融合し、包括的ドライアイデータ基盤を構築する。このデータ基盤を用いて、ドライアイの発症あるいは重症化に関わる遺伝子領域の同定とともに、ドライアイの多様性理解と層別化による診療の質の向上に資する基盤研究を実施する。

自然科学 6

ヒト病原性齧歯類媒介性ウイルスの統合的理解に向けた基礎研究

長崎大学高度感染症研究センター
准教授 浦田　秀造

我々はこれまでにスリランカにおいて公衆衛生上問題となっている慢性腎臓病の原因候補として齧歯類媒介性の新種のウイルス（ランカウイルス）を同定している。本ウイルスと慢性腎臓病との疫学的な関連は確認できるものの、そのメカニズムは明らかにされていない。本研究ではランカウイルスの他、齧歯類媒介性ヒト病原性ウイルスにも着目して、これらの齧歯類媒介性ウイルスの生態（地域性や保有齧歯類の同定）、ウイルス学的性状（ウイルス増殖や伝播機構）、そして慢性腎臓病の病態との関連ついて明らかとすることを目指す。

自然科学 7

非晶質共役高分子ネットワークの創製と新規材料探索の高速化

慶應義塾大学理工学部
教授 緒明　佑哉

本研究は、複数の共役モノマーの同時多発的な重合で得られる非晶質共役高分子ネットワークにより、高分子材料の広大な探索空間を開拓し、エネルギー関連材料、高強度材料開発に発展させることを目指す。小規模実験データに適用可能なマテリアルズインフォマティクス（MI）を、ハイスループット手法と組み合わせて高効率に最少実験数で目的の性能を実現することを目指す。本研究は、多様なモノマーの組み合わせによる新たな高分子材料の創製や、MIを活用した高効率な高分子材料の探索および性能向上手法としての発展が期待される。

自然科学 8

OBF-STEM法を用いたファーテライトの結晶構造解明

東京大学大学院理学系研究科
助教 奥村　大河

貝殻や耳石のような生物が関与して形成される鉱物はバイオミネラルと呼ばれ、その一部は炭酸カルシウム結晶の準安定相であるファーテライトで構成される。しかし、ファーテライトは50 nm以下の微結晶しか得られず、電子線によるダメージが生じやすいため、その構造解析は困難であった。最近申請者はADF/ABF-STEM法を駆使して実空間での構造決定に成功したが、正確な原子位置の決定には至っていない。本研究では、低電子線量でも最大のコントラストが得られる新規OBF-STEM法を用い、ファーテライトの原子配列を統計的に解析して詳細な構造を決定することで、炭酸カルシウム結晶の成長ダイナミクスに新たな知見を与える。

自然科学 9

表皮細胞におけるハウスの設計プログラム

鹿児島大学学術研究院
准教授 小沼　健

オタマボヤは脊索動物門に属する海産プランクトンである。海水中の餌を濾過する機能をもつ「ハウス」と呼ばれるセルロースを含む袋状の構造体をつくり、その中に棲む。ハウスを分泌する表皮細胞は特徴的な配列パターンをもち、細胞数・形・位置に個体差がない。本研究では、ハウス形成にかかわる表皮細胞の単一トランスクリプトーム解析と、ハウスの三次元展開の力学モデル構築の実施を目指す。申請者はオタマボヤの実験動物化を進め、研究室での継代飼育、ライブイメージング技術、遺伝子スクリーニング、ゲノム情報などの基盤を構築してきた。独自の実験系と、数理理論との連携を駆使することで、新しい形づくりの研究領域を開拓していく。

自然科学 10

微量元素による個体寿命制御機構の解明

理化学研究所生命機能科学研究センター
チームリーダー 小幡　史明

栄養による個体寿命の制御機構において、アミノ酸やその代謝物の研究に比して微量栄養素に関する研究は進んでいない。本研究では、ショウジョウバエを用いて、餌中の微量元素、特に亜鉛が健康寿命に影響する分子機構を遺伝学的に解明することを目指す。亜鉛の摂取制限が寿命を延ばすメカニズムや体内亜鉛動態の制御機構を解明し、微量元素による老化制御について新しい概念を提唱する。また、霊長類マーモセットを用いた解析も行い、ショウジョウバエで認められた機構の進化保存性を検証し、ヒトの老化制御への可能性を追求する。

自然科学 11

自閉スペクトラム症患者の優れた記憶力の分子機序

群馬大学大学院医学系研究科
教授 川辺　浩志

代表研究者は、Nedd4ファミリーE3ユビキチンリガーゼファミリーによって触媒される特異的ユビキチン化が神経細胞発達をどのように制御するかを研究してきた。一連の研究において、あるE3リガーゼが自閉スペクトラム症（ASD）のリスク遺伝子であることを見出した。本研究ではこの発見に基づいて、一部のASD患者が優れた記憶力を持つ機序を特異的ユビキチン化に注目して研究する。本研究はASDの多彩な症状のうちで優れた記憶力に注目したユニークな研究である。将来的には優れた記憶力を維持したままASDの症状を改善させる治療法の開発に貢献できると期待できる。

自然科学 12

新規な経管腔シグナル伝達「ルミクリン」の構造生物学的理解

基礎生物学研究所
研究員 淨住　大慈

本研究では、マウス精子の受精能力を制御する新規シグナル伝達機構であるルミクリンシグナルに着目し、その分子基盤の解明を目指す。研究代表者はこれまでに、ルミクリンリガンドであるNICOLとNELL2が精巣上体に作用し、精子成熟を上位制御していることを明らかにした。本研究では、ルミクリン関連分子の高次構造解析、分子機能解析、in vivoでの生理機能解析を組み合わせ、ルミクリンシグナル伝達の作用機序を解明する。さらにNICOLの活性体を化学合成した協同研究者とともに構造生物学的解析を行い、新たな知見の獲得を目指す。本研究によって精子成熟制御の新たなメカニズムが明らかになることが期待される。

自然科学研究助成概要（一般）

自然科学 13

がんを検知する能動カテーテルの開発

東北大学学際科学フロンティア研究所
准教授 郭　媛元

世界的な高齢化に伴い、がん罹患率は上昇しており、日本では生涯でがんに罹患するリスクが男性で約65.5%、女性で約51.2%とされ、ほぼ２人に１人ががんを経験する可能性がある。特に肺がんは罹患率が高く、５年相対生存率が約50%と低いため、早期診断と迅速な治療選択が急務である。現行の気管支ファイバスコープによる診断は正確性に限界があり、診断率は３～７割に留まる。特に肺の深部へのアクセスが困難であることから、新たな診断技術が求められている。本研究では、能動ファイバカテーテルとがんセンサーを組み合わせた「がん検知能動カテーテル」の開発を提案し、末梢型がんの迅速な診断とモニタリングを目指すものである。

自然科学 14

魚類ゲノムの比較解析による運動器形成機構の解明

関西大学化学生命工学部
准教授 日下部　りえ

本研究では魚類の運動器形成と生理学的特徴を比較解析することにより、水環境に適応した運動様式のメカニズムを明らかにすることを目指す。特に、真骨魚類の筋繊維の性質と分布に着目し、遺伝子操作により環境適応との関係を解明する計画である。ゲノムデータ、解剖学的・組織学的な基礎データを得るところから、CRISPR/Cas9法によるノックアウト系統の作成、表現型の解析を行い、他の脊椎動物で得られている知見との比較を行う。将来的には水産分野や基礎医学分野との連携や応用につなげることも視野に入れている。

自然科学 15

炭素の電子状態制御 ―フロンティア軌道の逆転と遷移金属元素に倣った酸化還元―

東京都立大学理学部
教授 楠本　周平

有機物を構成する主元素である炭素は、我々の社会を構成する最も重要な元素のひとつである。我々を取りまく物質に多様性をもたらすのは、炭素のとる状態（四面体、平面、直線など）の多様性である。本研究では、一般的な４配位炭素ではなく、２配位中性炭素である「カルベン」に着目し、低原子価炭素の電子状態の逆転と酸化状態の制御を行うことを目的としている。カルベンにおける電子状態の逆転、すなわちσ性空軌道とπ性被占軌道という電子状態を実現する。さらに、２価炭素と４価炭素の可逆的相互変換を達成し、身近な元素である「炭素」の隠れた性質に迫る。

自然科学 16

南極30cmサブミリ波望遠鏡用2偏波広帯域受信機の開発

筑波大学数理物質系
教授 久野　成夫

星形成は天文学において最も基礎的かつ重要な物理過程である。星の原材料となる分子ガスは多様な密度・温度環境にあるため、異なるトレーサーを用いた観測が必要となる。本研究は、これまでの観測では検出できず”暗黒ガス”と呼ばれている希薄な分子ガスを中性炭素輝線で、高温高密度分子ガスを一酸化炭素の高励起輝線で同時に観測できる２偏波広帯域受信機を製作する。この受信機を、水蒸気が地上で最も少なく天文観測に最適な南極内陸部ドームふじに設置する南極30cmサブミリ波望遠鏡に搭載する。そして、天の川銀河、さらには大マゼラン星雲中の希薄な”暗黒ガス”と高温高密度分子ガスを観測し、それらの空間分布と運動を明らかにする。

自然科学 17

臓器横断的なアンジオクライン シグナルの実体の解明

慶應義塾大学医学部
教授 久保田　義顕

血管は肺で取り入れた酸素を全身に運ぶためのパイプラインとして、各臓器の活動を支えている。ごく最近、この教科書的な血管の役割に加え、重要な生理的機能が示唆されている。それは血管内皮由来のパラクライン因子が、何らかの形で組織の発生・修復に貢献するというものである。 この因子は臓器、組織によって多様であり“angiocrine factor”と呼ばれ、ここ4-5年脚光を浴びつつある概念となっている。本研究では最新のイメージング技術、シングルセルトランスクリプトームなどを結集し、このangiocrine factorの発現を司るシグナルの実体を突き止め、これを臓器横断的に包括的に理解する。

自然科学 18

生体組織における力学過程の関与と応答メカニズムの解明

京都大学大学院薬学研究科
教授 倉永　英里奈

本研究は、ショウジョウバエの上皮組織をモデル系とし、光遺伝学を用いた非侵襲的な物理的刺激による人工操作を行い、その応答をライブイメージング、遺伝学、単一細胞解析を行うことで、組織が物理的環境の変化にどのように適応するのか、明らかにすることを目指している。光刺激による組織変形の誘導にはすでに成功しており、力学応答の伝搬や持続性、フィードバック機構の解析を通じ、細胞生物学や発生生物学に新たな視点を提供することを目指すものである。

自然科学 19

液―液相分離とオートファジーの共創による生体防御機構の解明

順天堂大学大学院医学研究科
教授 小松　雅明

本研究では、独自に開発したp62 bodyを精製できる革新的手法と選択的オートファジー阻害方法を駆使し、熱、浸透圧、pHなど各種ストレスに応じたp62 bodyの新規構成因子の網羅的探索を行う。また、それら新規構成因子や同定済みの制御因子を介したp62 body依存性生体防御機構を、これまで培ってきた高精度タンパク質結合予測AlphaFold-Multimerや高速原子間力顕微鏡解析などの先駆的タンパク質解析方法により解き明かす。さらに、p62 bodyの形成や分解異常がその発症に関わると考えられている肝疾患に注目、肝疾患モデルマウスやヒト肝疾患検体を用いて検証する。

自然科学 20

均一性を極めたCuO2面で発現するモット絶縁相近傍の高温超伝導電子状態の解明

東京大学物性研究所
准教授 近藤　猛

銅酸化物高温超伝導体における超伝導発現機構の解明は、今なお固体物理学における最重要課題の一つである。特に、単位砲あたり3枚以上の隣接するCuO2面を有する「多層系銅酸化物」は高い臨界温度を示す。これらは、電荷供給層と直接接することのない均一で「綺麗なCuO2面」を内部に有するため、高温超伝導機構に直接関連する内因的な電子構造の特徴を探る上で重要である。本研究では、レーザー光源を用いる最先端の超精密角度分解光電子分光系を整備し、これを用いて、極低温（臨界温度より十分低い温度）下での幅広いキャリア量をもつ試料において、内部CuO2面の電子状態を解明し、新しい電子相図を描き出すことを目指す。

自然科学研究助成概要（一般）

自然科学 21

金属錯体の配列制御に立脚した触媒反応の自在操作

東京工業大学理学院
教授 近藤　美欧

本研究課題では、錯体触媒の配列制御による反応場の構築に立脚し、触媒化学に広く貢献する新材料の創出を行う。触媒活性サイトと分子コネクタ部位とを併せもつ金属錯体触媒（分子性触媒モジュール）の集積化によって得られる会合体（フレームワーク触媒）は、錯体触媒の活性サイトを維持したまま規則的な細孔を形成している。本課題ではこの規則性を積極的に利用し、多岐に渡る触媒反応において、反応の高速化（正の触媒効果の発現）ならびに反応の意図的な低速化（負の触媒効果の発現）の実現を提案する。配列制御と触媒化学の間に存在する潜在的な親和性を顕在化に立脚し、錯体触媒と固体触媒の境界領域を探索する研究提案である。

自然科学 22

メビウスσ芳香族化学の創成

埼玉大学大学院理工学研究科
教授 斎藤　雅一

芳香族性は、長年にわたり基礎化学における重要な研究対象である。一般に平面構造をもつ環状共役系に（4n+2）個のπ電子が存在すると、芳香族性が発現する。このような芳香族性はいわばπ芳香族性とよぶことができる。一方、今世紀になって、ねじれをともなうメビウスの輪のような構造をもつ芳香族分子が合成された。

本課題では、これまで独自の設計指針に基づいて（4n+2）個のσ電子をもつ芳香族分子、すなわちσ芳香族分子を探究してきた代表研究者が、メビウス環構造をもつσ芳香族分子を設計・合成するという、芳香族性の本質に迫る挑戦的な研究を遂行する。

自然科学 23

マイクログリアの機能調節を介した新規MLD治療法の開発

日本医科大学大学院医学研究科
教授 酒井　真志人

異染性白質ジストロフィー（MLD）はアリルスルファターゼA（ARSA）の欠損によって発症するライソゾーム病であり、神経線維の脱髄の進行によって、中枢・末梢神経障害が引き起こされる。現状では有効な治療法はなく、ARSA遺伝子の導入による遺伝子治療、造血幹細胞移植による治療の開発が続けられている。

我々はこれまでにマイクログリアがMLDの病態進展に関与することを見出した。本研究ではMLDにおけるマイクログリアの活性化機構を解析するとともに、神経保護因子を発現する脳内マクロファージの導入による治療効果を検証する。これらの検討によって得られる成果は、脳内マクロファージを介した中枢神経保護に基づくMLD治療の基盤となる。

自然科学 24

行動に連関した記憶痕跡シグナル素子の同定

同志社大学大学院脳科学研究科
教授 坂場　武史

行動レベルの学習や記憶は、神経回路内の特定の神経集団によって形成される。一方で、神経細胞内のどこに記憶痕跡が形成されるか、分子細胞レベルの基盤はわかっていない。本年度は、海馬などで学習・記憶をコードしている細胞集団を選択的にラベリングし、その細胞の樹状突起、軸索などの細胞内コンパートメントからの直接パッチクランプ記録、シナプス応答の記録、シナプス前終末からの開口放出測定を行うことで、細胞内のどのシグナリング素子が記憶素子であるかを明らかにする。また、超解像光学顕微鏡を用いることで分子レベルの素子の可塑的な変化を解像することを目指す。

自然科学 25

ES細胞から全能性細胞を誘導する培養系の開発

慶應義塾大学医学部
教授 塩見　春彦

本研究では、マウス初期胚においてその発現が必須であるトランスポゾンMERVLの機能解析を進める。特にMERVL転写産物（RNA）とその相互作用因子（特に、hnRNPタンパク質）が全能性期特異的なクロマチン構造を構築し、その後の胚発生（全能性から多能性への遷移）を担保するとの仮説を検証していくことでMERVL RNA依存的な宿主ゲノムのリプログラミング機構を明らかにし、その知見を用いてES細胞から全能性様細胞の創出を行う。

自然科学 26

抗MDA5抗体陽性皮膚筋炎に合併する急速進行性間質性肺炎の病態解明

国立病院機構大阪南医療センター臨床研究部
室長 高松　漂太

抗MDA5抗体陽性皮膚筋炎は急速進行性間質性肺炎（RPILD）を合併する非常に予後不良の疾患で、歌手の八代亜紀さんが罹患した疾患として記憶に新しいところである。しかし、RPILDの発症機序は不明で、病態解明と適切な治療法の開発が求められている。申請者は、RPILD症例でIII型インターフェロン（IFN-III）活性が高いことを見出した。本研究では、IFN-III-KIマウスによるRPILDモデルマウスを樹立し、１細胞解析を含む免疫学的な解析を通じてRPILDの発症機序の解明を行い、抗MDA5抗体陽性皮膚筋炎合併RPILDに対する分子標的治療法の開発を目指す。

自然科学 27

マウス体内疾患部位での機能性ポリマーの金属触媒合成と治療研究

東京工業大学物質理工学院
教授 田中　克典

がんの多量出血時には、迅速にポリマーで止血することが重要であるが、ポリマーをそのまま注射することはできない。本研究では、がん出血が判明した時に、研究代表者が世界で唯一有する血液内や体内でも失活しない人工金属酵素を静脈から注射して、がんの出血部位に金属触媒を運搬する。続けてポリマーの原料となる低分子モノマーを静注し、出血部位で触媒的にポリマーを合成して、患部を開けることなく止血する。このように、体内での「ものづくりの有機合成化学」を体内現地でのポリマー合成に展開して、次世代の医療戦略を開拓する。

自然科学 28

最古の恐竜を求めて：アルゼンチン共和国北西部に分布する中―上部三畳系チャナレス層の動物相と古環境

国立科学博物館地学研究部
研究主幹 對比地　孝亘

恐竜類の起源は、現時点での最古の化石記録よりも１千万年以上前の中期三畳紀まで遡る可能性が高い。その様々な側面を明らかにするべく、約2.4億年前に堆積したアルゼンチンのチャナレス層の野外調査を行い、以下の解析を行う。まず最古の恐竜類を発見しその起源について詳細な年代的制約を与えることを目指す。また、そのような新種を含めた系統解析を行い、恐竜類の初期分岐様式について明らかにする。さらにそれらの標本をX線CTスキャン撮影して脳や内耳形態を復元し、彼らの脳・感覚器系の特殊化の起源を明らかにする。また、炭酸塩ノジュールを採取してその凝集同位体比解析を行い、恐竜類の初期放散が起きた時期の古気温推定を行う。

自然科学研究助成概要（一般）

自然科学 29

TOO的多波長分光観測による恒星惑星磁気圏の構造の解明

中央大学理工学部
教授 坪井　陽子

申請者らは、中央大学屋上に、可視光測光カメラ、低分散分光器、可視光測光と高分散分光の同時観測器の３装置をそれぞれの焦点面に据えた可視光望遠鏡を持ち、国際宇宙ステーション上の全天X線モニター MAXIのアラートに連動して可視光追観測を行っている。また、2023年度に打ち上げられたX線天文衛星XRISMのX線CCDカメラXtendを用いた突発天体のサーチ（XTS）の主導も行い、追観測を始めた。本申請は、今まで学生が手動で行っていた一連の作業を自動化し、追観測の効率化を行い、小型ながら、迅速に観測する専用望遠鏡を用いて、恒星周辺の大規模磁気圏の構造を、そのダイナミズムの観点から調べていく。

自然科学 30

分子構造に基づく光合成集光性色素タンパク質の結合選択機構の解明

静岡大学農学部
准教授 長尾　遼

本研究は、光合成において太陽光を捕集するための集光性色素タンパク質LHCが、どのようなメカニズムによって光化学系I（PSI）に配置されるのかという未解明の問題に挑む。LHCの遺伝子数は生物種ごとに異なり、すべてのLHCが光化学系Iに結合するわけでない。このため、どのようにLHCが選ばれ、特定の場所に結合するのか不明である。申請者は、褐色を呈する珪藻の光化学系の機能構造解析で世界をリードしてきた。珪藻は光化学系に緑藻や陸上植物よりも多くのLHCを配置していることが見出されている。本研究では、これまでと異なる珪藻でのPSI-LHCの構造を解き、比較することにより、LHCの結合選択性を明らかにする。

自然科学 31

老化脳と神経疾患に共通した脳機能低下機序の統合的理解と病態改善戦略の創出

九州大学大学院医学研究院
教授 中島　欽一

老齢脳に加え、多くの精神・神経疾患脳でも実は、レトロトランスポゾンLINE1（L1）の発現増加と炎症亢進が見られる。また最近、L1 mRNAから逆転写され産生されるcDNAがDNAセンサーを活性化し、炎症を亢進させる可能性が示唆された。そのため、これらの脳が共通して示す細胞老化や炎症亢進に、L1 cDNAが重要な役割を果たすと考えた。そこで本研究では、老齢及び神経疾患脳内でどの細胞種がどのように老化状態に陥り、脳内炎症が誘発され脳機能低下に至るのか、その普遍的原理を明らかにすることを目的とする。さらに、老化細胞を一時的なリプログラミング因子の発現によりエピジェネティックに若返らせることで、脳機能低下が改善できるかどうかも検討する。

自然科学 32

イオンゲートによるファンデルワールス磁性体の磁性制御

芝浦工業大学工学部
教授 中野　匡規

本研究では、我々がこれまでに分子線エピタキシー法により独自に作製してきた様々なファンデルワールス物質の薄膜試料を対象として、電気化学的インターカレーション技術を利用した物性開拓に取り組む。特に、層間の磁性イオンの種類や配列パターンなどに依存して多様な磁性を示すファンデルワールス磁性体に注目し、層間ギャップ中にLiイオンなどをインターカレーションすることで、キャリア数の制御と磁性の変調を実現する。この研究を通して、平衡状態では実現できない新たな量子相を創成し、それらを電気的に制御することで新原理デバイスの動作実証を目指す。

自然科学 33

乳幼児の腸内フローラ形成を助長するミルク開発

東北大学大学院農学研究科
教授 野地　智法

母乳を介した栄養素および免疫因子の補給は、乳幼児が健康に生きていく上で必要不可欠である。特に、乳幼児が腸管内の微生物環境を適切に形成する際に、乳汁抗体（IgA）の存在は欠かせない。しかし、母乳成分は、母体の健康状態に強く左右されるため、不衛生な環境や飢餓状態にある母体の乳汁には、十分量の栄養素や免疫因子が含まれない。この点を解消すべく、母乳の組成をもとに設計された粉ミルクなどの人工ミルクが、世界的に普及しており、その市場も極めて大きい。しかしながら、母乳抗体（IgA）が有する質的量的特徴を正確に再現させた人工ミルクは未だ開発されていないことから、本研究を通して、免疫機能を付加した人工ミルクを開発する。

自然科学 34

次世代の環境経時変動解析に向けて：極微量アルケノンによる古水温推定法の開発

金沢大学理工研究域
教授 長谷川　卓

アルケノンはハプト藻類が合成する炭素数37-42の直鎖型アルキルケトンである。生息場所の水温に依存して寒冷だと３不飽和、温暖だと２不飽和分子が増加する。同性質は過去の水温変動履歴データを提供する。本研究は海底・湖底堆積物に含まれるアルケノンの超微量（従来量の＜１/100）分析方法を開発し、アルケノン古水温計の応用範囲を飛躍的に高めることを目指す。ガスクロマトグラフ質量分析装置のイオン化法や使用カラムを試行錯誤的に工夫し，定量性の高い分析法の確立を目指す。日本各地の湖堆積物から地域毎の環境変動履歴を解読する研究や、二酸化炭素の濃度の急上昇と水温変動の関連性評価など古気候学の進展にも貢献したい。

自然科学 35

癌組織中の単一細胞糖鎖プロファイリングと標的治療応用

東京大学医学部
講師 早河　翼

胃癌・大腸癌は本邦で頻度が高く、手術不能進行癌の根治は現在でも困難である。申請者はこれらの癌発生過程で生じるムチン・糖鎖の変化が癌細胞の増殖・進展に極めて重要であり、治療標的となりうることを見出した。癌組織中の糖鎖とレクチン受容体の発現状態を単一細胞レベルで把握し、糖鎖・レクチン受容体依存的な相互作用の機序解明と同標的治療の開発を行う。具体的には、単一細胞レベルでの糖鎖・RNA同時解析として、scGR-seqを含む網羅解析により胃・大腸癌組織中の細胞種ごとの糖鎖・レクチン受容体発現パターンを把握し、糖鎖標的薬物複合体の開発として、異常糖鎖の分解酵素を結合させた抗体薬物複合体の作製を目指す。

自然科学 36

高分子水溶液の流動挙動転移と溶液内部の不均一さに基づくモデル化

名古屋大学大学院工学研究科
教授 日出間　るり

ソフトマターを含む溶液は複雑流体となり、溶液濃度やかけた応力には一意に対応しない、観察する時間や長さのスケールに依存した非線形・非平衡な流動挙動を示す。複雑流体の急な流動挙動変化や、各特徴的な流動挙動の境界を明らかにすることは、複雑流体の流動挙動の予測と制御につながり、産業の高精度化、省エネ化に関連するため注目が集まっている。本研究では、複雑流体である高分子水溶液を対象とし、乱流域に見られる流動転移や各流動挙動の境界を、流体内部の高分子の変形・緩和挙動の観点から解明することを目的とする。流動場の特性、高分子の伸長を特徴づける無次元数により流動場を分類し、各流動場の特徴を乱流統計量解析により定量化する。

自然科学研究助成概要（一般）

自然科学 37

心臓管腔を形成する血行流動を介した熱作用機構の解明

徳島大学先端酵素学研究所
准教授 福井　一

組織の形づくりにおいて、力は必須の因子である。ただし、外部から作用する力が常に生じる中で細胞応答がどのように調節されるのか、未だに不明である。本研究では、生体が適切に力学シグナルを調節する機構の解明を目指す。ゼブラフィッシュを用いた自身の研究から、拍動する心臓では管腔が形成される際に力に応答するシグナルの活性時期・部位が限られること、ならびに、さまざまな力学特性の中でも血流から生じるせん断応力の変化が生体シグナルを調節することを明らかにした。申請者は「粘性をもつ血液流体の摩擦抵抗から生じる熱が力学作用本体となる」という新たな仮説について、力学解析を可能とする顕微操作技術を駆使して検証する。

自然科学 38

遺伝子組換え動物を用いた受精の分子メカニズム解明と精子受精能力検出・制御法の開発

国立循環器病研究センター先端医療技術開発部
部長 藤原　祥高

生命誕生の瞬間である受精はとても神秘的であるが、その詳細な分子機構には不明な点が多い。本研究では、遺伝子組換えマウスを用いて哺乳類精子における受精の分子機構を明らかにするとともに、精子受精能力検出法の開発を目指す。近年、精子側の受精関連因子の発見が加速していることから、未知因子の同定を含めた複雑な組み合わせから受精メカニズムの全容解明に取り組む。検出法開発についても、精子受精能力に対する小分子化合物により促進・阻害することで、ヒトや家畜など様々な動物種において生殖をコントロールできる技術の確立に挑戦する。

自然科学 39

睡眠負債と体重負債の並行制御系の解明

東邦大学医学部
教授 船戸　弘正

睡眠の不足は「睡眠負債」といわれ心身に悪影響を及ぼす。過剰な脂肪蓄積も糖尿病をはじめとした多くの疾患のリスクとなる点で「体重負債」と言える。睡眠も摂食・エネルギー代謝も脳が神経系や内分泌系を介して制御することは知られているが、この２つを制御する神経経路がどのように統合されているのかはあきらかではない。

本研究では、研究代表者らは睡眠制御分子として見出したリン酸化酵素の持つ体重制御分子としての役割にも取り組むことで、同じSIK3 パスウェイがどのように睡眠負債と体重負債を制御しているかを明らかにし、神経回路レベルの分解と統合を目指す。

自然科学 40

金属ナノ薄膜型ハニカム触媒の開発

熊本大学大学院先端科学研究部
教授 町田　正人

活性金属表面の二次元性が強まるほど触媒回転頻度（TOF）が著しく増加する現象を見出した。この現象により特定の金属と触媒反応の組合せによってナノ粒子に比べて薄膜ではTOFが二桁も増加する。本研究では、独自の手法に基づいて金属ナノ薄膜触媒の優位性をさらに高め、超高密度ハニカム化に挑戦する。触媒層が数nmと従来製法に比べて圧倒的に薄くすることで、貴金属使用量を劇的に減らし、従来製法では未踏の平方インチ当たり数1,000セルの超高密度化によって高流速の実用条件で高い性能をもつリアクタを実現する。得られるリアクタについてエネルギーおよび環境関連の反応に対する触媒特性を評価する。

自然科学 41

Ⅲ型インターフェロンによる小腸上皮細胞死の誘導機構の解明

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
准教授 松沢　優

クローン病は消化管に潰瘍や線維化を生じる難治性疾患であり、根治療法は存在しない。過剰な小腸上皮細胞死は、腸管バリア機構の破綻からクローン病に至る可能性が示唆されているが、詳細は不明である。

研究代表者は、クローン病の疾患感受性遺伝子の１つ*ATG16L1*が小腸上皮細胞死を抑制することを見出し、クローン病との関連を報告してきた。さらに最近、インターフェロンが小腸上皮細胞死を促進することを独自に見出した。本研究では、特にⅢ型インターフェロンによる小腸上皮細胞死の誘導機構を解明すると共に、*ATG16L1*変異が稀である日本人における意義を検証し、クローン病の新たな治療戦略を見出すことを目標とする。

自然科学 42

免疫リボソームが生み出す翻訳動態の分子機構の解明

名古屋大学大学院理学研究科
教授 松本　有樹修

従来リボソームはどの細胞や組織においても同じであると考えられてきたが、異なる構成を持つリボソームが存在し、ribosome heterogeneityという概念が提唱されている。私たちは横紋筋特異的に存在するリボソームサブユニットRPL3Lを発見し、心臓の機能に必要なタンパク質の翻訳を制御していることを明らかにした。近年、ヒトの心疾患においてRPL3Lの遺伝子変異が報告されており、組織特異的リボソームの重要性が明らかになった。本研究では、免疫細胞に特徴的な構成を持つ「免疫リボソーム」に焦点を当ててその役割の解明を目指す。私たちが開発してきた新技術を駆使して、免疫リボソームの包括的解析を行う。

自然科学 43

環境に応じた柔軟な行動変容を実現する脳領域横断的なセルアセンブリ相互作用の解明

大阪公立大学大学院医学研究科
教授 水関　健司

常に変化する環境の中で、危険や報酬の存在する場所の記憶を更新し、安全な経路を選択して目的地へたどり着くナビゲーションの能力は、動物の生存に必須である。この能力には海馬をはじめ複数の脳領域が協調的に働くと考えられているが、各脳領域がどのように協調して機能するのか未解明である。本研究では、多脳領域から神経活動を同時記録する技術と、危険な場所が毎日変わる環境でのナビゲーション課題を開発し、課題中とその前後の睡眠時にラットの複数の脳領域から同時に電気生理学的記録を行う。得られたデータを数理的に解析し、各脳領域のセルアセンブリがナビゲーション中と睡眠時にどのように領域横断的に相互作用するのかを解明する。

自然科学 44

超分子複合体レパトア解析より紐解くクロマチン高次構造制御の理解

金沢大学ナノ生命科学研究所
准教授 宮成　悠介

このゲノムDNAへのアクセスしやすさ（アクセシビリティ）は、遺伝子発現などのゲノム機能に必要な基盤要素であり、その異常はガンなどの様々な疾患に直結する。申請者はこれまでに、アクセシビリティを制御する新規因子群を複数同定することに成功した。本研究では、アクセシビリティを制御する多種多様な複合体が作り出す超分子複合体の組み合わせ（レパトア）の全容を明らかにする。次に、超分子複合体の機能を説明する数理モデルを構築し、複雑なアクセシビリティ構築のプロセスを再現する。それによって、超分子複合体のレパトアによって協調的に制御されるアクセシビリティの構築原理に迫る。

自然科学研究助成概要（一般）

自然科学 45

炎症性腸疾患の病態可視化から新規治療開発に挑戦する

聖マリアンナ医科大学医学部
主任教授 宮部　斉重

炎症性腸疾患（IBD）は本邦でも約20万人が罹患する難治性疾患であるが、その病態は未だ不明な部分が多い。我々はこれまで、生きたマウス組織で細胞動態をリアルタイムに解析可能なインビボイメージングシステム（IVIS）を開発し、関節リウマチ、脳性マラリア、ヘルペス脳炎や川崎病における免疫細胞遊走機序を解明してきた。近年、我々は蠕動運動している為、困難とされてきた腸管に対するIVISを開発することに成功した。そこで、本研究課題では炎症病態の根底にある細胞遊走に着目し、独自に開発したIVISシステムを用いて、腸管における免疫細胞の遊走機序を解明し、IBDに対する次世代免疫抑制療法の基盤の構築を目指す。

自然科学 46

高温環境下における弾性定数の高精度計測方法の確立

東京大学大学院工学系研究科
教授 森田　剛

弾性定数の中でも減衰定数は振動設計において極めて重要なものであるが、高精度計測は困難であった。そこで近接超音波浮揚技術と電磁超音波励振法で金属細棒を非接触励振することを提案し、独自の高精度計測システムを実現してきた。本研究では、この計測システムを展開し、高温環境下での計測に応用する。高温環境下では、ガスタービンや原子力発電、水素エネルギー関連など高温環境下での減衰定数等の計測が必要である。この計測を可能とすることにより、高温環境下における材料中の微細構造変化と弾性定数との相関系も明らかにすることができ、高温材料における新規かつ独創性のある計測手法として普及することが期待できる。

自然科学 47

LZYを起点とした重力応答するオーキシン輸送の動的制御機構

基礎生物学研究所
教授 森田（寺尾）美代

植物は、重力屈性により自身の体を地面に固定するとともに、資源取得や繁殖を有利にする方向へと器官を伸長させる。重力屈性においては、デンプンを高度に蓄積したプラスチドの一種（アミロプラスト）を平衡石として利用し、重力方向を感知するというデンプン平衡石仮説が100年以上前に提唱され広く受け入れられてきたが、重力感知の分子機構は不明であった。我々は最近、植物特有の膜表在性タンパク質が、アミロプラストから近接する細胞膜（即ち重力方向）へと移行するという、全く新しい重力感知・情報伝達モデルを提示した。本研究ではこのモデルに基づき、さらに詳細な分子機構を追究することで、重力感知の分子機構を解明する。

自然科学 48

思春期モノアミン系発達の分子・細胞生理・行動解析

東京大学大学院医学系研究科
講師 柳下　祥

本研究は、思春期におけるドーパミンとセロトニン神経系の発達過程を、マウスを用いて分子、細胞生理、行動の多階層で解明することを目的としている。ドーパミンやセロトニンは脳機能や精神疾患に関与しており、特に思春期の発達が重要と考えられているが、思春期発達の分子や細胞基盤はほとんど明らかになっていない。本研究では、光遺伝学や蛍光センサーなどの最新技術を活用し、モノアミンの放出特性やcAMPシグナルの発達変化を調査する。さらに、プロテオミクス解析で同定されたタンパク質を検証し、思春期発達過程を調査する。これらの研究成果を将来的に精神疾患研究へ応用することを目指している。

自然科学 49

心臓を構成する細胞の多様性獲得と病的意義の理解と制御

岡山大学学術研究院
教授 湯浅　慎介

心血管疾患は世界の主要な疾患であり、高齢化を迎えた先進国ではますます患者は増えている。中でも人類最大の死因の一つである心不全においては、内科的治療に抵抗性を示す難治性心不全が存在し、革新的治療法の開発が待望されている。心不全の原因には様々なものがあるが、各々の負荷に応じた適応現象が破綻すると心不全として発症する。負荷に対する適応と破綻の際には、主に心筋細胞の役割が解析されていたが、心臓には様々な非心筋細胞が存在しており、その動態と役割は明らかになっていない。本研究においては、心臓を構成する細胞の多様性獲得と病的意義の理解と制御を目的とする。

自然科学 50

造血システムの発生機構の解明

東京女子医科大学医学部
講師 横溝　智雅

成体骨髄では、造血幹細胞を頂点とした造血システムの階層構造が観察される。一方、胎児期には、各種造血前駆細胞が成体骨髄内の血液分化の方向とは逆向きの順番で発生してくる。なぜこのような逆向きの形で血液細胞集団が発生してくるのかは長い間謎であったが、申請者らは最近、転写因子Evi1の発現パターンがこの現象の一部に関与していることを明らかにした。さらに継続中の研究からは、Evi1の発現パターンで造血システム発生の大部分を説明できる可能性が浮上してきた。本研究計画では、Evi1の解析をとおして、造血システムの複雑な発生過程をシンプルに説明しうる新しいモデルの確立を目指す。

自然科学 51

超高感度バックグラウンドフリー磁気光学カー効果測定による量子振動の光観測

京都大学大学院工学研究科
教授 米澤　進吾

量子振動は、磁化や電気抵抗などの物理量が磁場の関数として振動する現象であり、磁場中での電子軌道の量子化に起因する。これは導電体の研究における重要手法として確立されているが、赤外やそれ以上のエネルギーの光学領域における観測例は知られていない。応募者らは、これまで超高感度の磁気光学カー効果測定技術を導入してきた。この手法を改良し、光学部品が磁場中で発生させてしまう巨大なバックグラウンド信号を排除することで強磁場中で超高感度にカー効果を観測する手法を確立し、世界初の量子振動の光学観測を達成することが、本研究の目的である。この新手法が確立されれば、非接触・高速測定可能・空間分解可能な新しい量子測定手段になると期待される。

自然科学 52

発声学習行動の個体間多様性を創出する神経ゲノム分子基盤の解明

北海道大学大学院理学研究院
教授 和多　和宏

学習行動は、遺伝と環境の影響を受けながら動物個体が適応的に生存していくための重要な表現形質の一つである。実際の学習過程において、学習戦略（戦略）・スピード・達成度に個体間で「違い」が生まれる。その結果、学習行動の個体間多様性が形成されるが、その生物学的基盤に関する理解は殆ど進んでいない。これまでに、親鳥から囀り歌を学習獲得する鳴禽類ソングバードをモデルとして用い、異種間戻し交配により遺伝的多様性をもつ個体間群を確立してきた。本研究ではそれら戻し交配個体群に対して、関連遺伝子座解析及び、シングルセル発現解析等を実施し、発声学習行動の個体間多様性の創出に関わる神経ゲノム分子基盤の解明を目指す。

自然科学
53

海洋底地球ニュートリノ観測で挑む地球内放射化熱量の解明: 海洋底でのテストベンチ初稼働

東北大学ニュートリノ科学研究センター
助教　渡辺　寛子

地球内部熱は地球活動の源となる重要量であるが、熱源の分布や量が未解明である。地球内放射性物物質起源の「地球ニュートリノ」の観測による地球内部理解は日本発の世界を牽引する学際的分野として発展してきた。本研究は、現代検出器では観測の難しいマントル放射性熱量の観測を目指す「海洋底地球ニュートリノ観測」の実現に向け、地上とは隔絶された高圧・低温の海底環境で稼働する小型テストベンチ検出器の開発を完了し、世界初の海洋底での観測の実現を目指す。更に大型研究実現に向け他の物理観測の可能性をシミュレーションを用いて考察し、これまで共通の興味を具体的に示すことが実現しなかった素粒子物理分野との接続性を提示する。

自然科学研究助成概要（若手）

自然科学 1

肺非結核性抗酸菌症の喀痰および末梢血を用いたバイオマーカー探索

北里大学薬学部
講師 朝倉　崇徳

肺非結核性抗酸菌（NTM）症は主に中高年以降の女性や既存肺疾患のある患者に難治性の慢性進行性呼吸器感染症を起こす。日本における肺NTM症の罹患率は世界最多であり、肺結核症とは異なり、一部を除き治癒が困難な疾患であるため、新規治療戦略が求められている。本研究の目的は、申請者がこれまで確立してきた肺NTM症の大規模コホートとその臨床情報・検体を基盤とし、1.宿主・病原体ゲノム情報とともに病理組織・喀痰・末梢血のオミックス解析を組み合わせることで新たな病態を解明し、2.ヒト初代気道上皮細胞や血球細胞を用いた培養系で検証することで肺NTM症の新規治療戦略を創出することである。

自然科学 2

堆積物試料分析と固体地球—氷床モデルによる南極氷床の変動履歴の解明

国立極地研究所先端研究推進系
助教 石輪　健樹

温暖化による南極氷床の融解に伴う海面上昇が危惧されている。南極氷床は複数の時間スケールの変動が重畳しており、衛星観測が可能な数年から数十年の変動に加え、数百年以上の変動も解明する必要がある。そのためには、過去の環境情報が含まれている地質試料分析やモデルシミュレーションによる南極氷床変動履歴の復元が有用な方法である。本研究では、東南極の堆積物試料に対して堆積相解析、主要元素分析により過去の環境情報を取り出し、放射性炭素年代測定により環境変化の時期を決定する。そして、固体地球と氷床モデルにより氷床変動履歴を高時空間解像度で復元し、温暖化に対する南極氷床の応答の理解につなげる研究を実施する。

自然科学 3

毛包幹細胞リモート制御メカニズムの解明

京都大学医生物学研究所
助教 一條　遼

皮膚の構成要素は基本的には表皮、真皮、皮下組織である。しかし、その下層には筋層と筋膜が存在する。これまで皮膚における研究は表皮、真皮に関する研究が大半であり、筋膜に着目した研究はわずかである。筋膜の皮膚における役割は創傷治癒、特に深い傷が形成された場合に、傷口を塞ぐことが知られている。しかし、恒常性における役割については不明である。本研究課題では筋膜に着目することで、新たな皮膚恒常性を明らかにする。

自然科学 4

細胞内における微小管内部空間の解析と応用

鳥取大学学術研究院
准教授 稲葉　央

微小管はチューブリンタンパク質からなる内径15 nmの中空構造体であり、細胞の形状や分裂、運動など様々な機能に重要な役割を果たしている。我々は、これまでin vitroにおいて微小管内部に様々な分子を導入することで、微小管の構造や機能が変化することを見出している。本研究では、細胞における微小管内部に存在するタンパク質を同定し、候補タンパク質のin vitroでの微小管への結合解析と細胞における発現制御を実施する。微小管内部結合タンパク質が微小管および細胞に与える影響を解明することとなり、微小管の生体機能の理解に加え、生体応用・材料応用への展開が期待できる。

自然科学研究助成概要（若手）

自然科学 5

非侵襲的脳刺激法を用いた第二言語獲得の神経機構の解明

九州大学大学院人文科学研究院
准教授 太田　真理

近年、安全に脳活動を変化させることが可能な非侵襲的脳刺激法と脳機能計測を組み合わせて、人間の認知・行動の神経基盤を解明する研究が注目されている。申請者も、非侵襲的脳刺激法と脳機能計測によって言語に関与する左下前頭回の活動を上昇させることで、第二言語獲得（外国語学習）の成績が向上することを明らかにしてきた。本研究では、脳深部を含む任意の脳領域の活動を非侵襲的に変化させることができる高密度経頭蓋時間干渉刺激（HD-tTIS）を開発し、外国語学習に関わる左下前頭回・視床・左尾状核の活動を変化させることで、外国語学習を支える神経ネットワークの全容を解明することを目指す。

自然科学 6

植物寄生性線虫はどのように植物の細胞壁構造を作り替えるのか？

奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科
助教 大津　美奈

植物に寄生する線虫の一種であるシストセンチュウは、感染時に宿主植物の細胞を融合させ巨大な多核細胞であるシンシチウムの形成を誘導する。申請者は、この現象に着目して研究を進め、シンシチウムが、柱状細胞壁に取り囲まれた『パルテノン神殿』様の形態をしていることを見出した。本研究では、この発見に基づき、独自の3D発現イメージング系を構築することで細胞壁リモデリングに関連する宿主植物の遺伝子群の同定を目指す。また、研究対象である線虫は世界的に被害を及ぼす害虫であり、本研究により植物寄生性線虫と宿主植物の相互作用が解明されれば有効な防除法の開発にも貢献できる可能性がある。

自然科学 7

マルチフェロイクス中のスピン励起によるテラヘルツ光起電力効果

東京大学大学院工学系研究科
助教 岡村　嘉大

光起電力効果は、現代の光デバイスの重要なテクノロジーの１つである。これまでは電子励起における光電流応答に焦点が当てられ、可視・近赤外領域の研究が行われてきた。一方そこから３ケタ低いエネルギー領域であるテラヘルツ領域では、通常電子励起が存在しないため、同じ原理を使うことができない。そこで本研究では、磁性と誘電性が共存するマルチフェロイクスのスピン励起に注目する。この励起はテラヘルツ領域に存在し、「シフト電流機構」を介することで光電流が生成されることが理論予測されている。様々な物質での実験的な実証を目指すとともに、スピン励起の微視的な機構との相関を調べ、より高効率な光起電力効果の学理を構築する。

自然科学 8

スピントロニクス材料としての多自由度磁性体

東京大学大学院工学系研究科
助教 北折　暁

スピントロニクスは、電子が持つ電荷だけでなくスピンも工学的に利用する、情報処理基盤技術の一つである。多くの過去研究においては、強磁性体を用いてスピンや磁化が上向きの状態を０、下向きの状態を１と定義するなどして情報を取り扱ってきた。

しかし、固体中で向きを定義できる自由度は磁化だけではない。らせん構造の右巻き/左巻き（= キラリティの向き）や極性の向きのような、“空間構造の対称性の破れ”と呼ばれる属性もまた、向きを定義可能である。本研究では、複数の向き/自由度が共存する「情報密度の高い磁性体」としての「多自由度磁性体」をさらに開拓することにより、スピントロニクスに一層の発展をもたらす。

自然科学 9

発光中心の自在導入による量子光デバイス開発

物質・材料研究機構ナノアーキテクトニクス材料研究センター
主任研究員 小澤　大知

今後の研究では、量子光源の実用化に向けた重要な課題である、量子欠陥の位置制御の精度向上に取り組む。現在の技術では、カーボンナノチューブに形成される量子欠陥の位置を正確に制御することが難しく、これが量子光通信やオンチップ光量子回路の実現における大きな障害となっている。次に解決すべき課題は、単一光子源としての純度や効率の向上である。これには、量子欠陥の作製後にその特性を精密に評価し、最適な条件を見出す必要がある。最終的な目標は、シリコンフォトニクス技術と統合可能な高効率な量子光源を開発し、実用的な量子光回路の構築を可能にすることである。

自然科学 10

X線宇宙観測によるニュートリノ研究を可能にする高角度分解能X線望遠鏡の開発

明治大学理工学部
専任講師 佐藤　寿紀

大質量星が寿命の最後に起こす大爆発「超新星」は、強い力・弱い力・電磁力・重力の全ての相互作用が密接に絡む稀有な自然現象であり、この超新星の爆発機構は現代の宇宙物理学上の未解決問題になっている。中でも現在の理論モデル「ニュートリノ駆動型超新星」では、弱い力で相互作用するニュートリノによる加熱が天体の爆発現象の要だと考えられているが、未だに観測を説明出来ていない。その解決に向け注目するのが、超新星内部のニュートリノ過程に関係する超新星物質内の元素のX線測定である。本研究では、X線観測からニュートリノと物質の相互作用を検証するために必要不可欠な高角度分解能X線望遠鏡の開発を行う。

自然科学 11

非免疫細胞による抗腫瘍効果の解明

東京大学大学院医学系研究科
特任准教授 塚崎　雅之

免疫系ががんの抑制に大きな役割を担っていることは、近年の免疫チェックポイント阻害剤のすぐれた臨床効果によって示されているところであるが、非免疫細胞による抗腫瘍効果に関してはほとんど不明である。本研究は、骨膜が腫瘍の近接に伴い3-4倍に厚みを増し、物理的に腫瘍の骨浸潤を抑えるという発見に基づいて、そのメカニズムの解明を目指した提案である。本研究を通じて、間質系ストロマ細胞が腫瘍を認識し応答するメカニズムの解明、およびその際のストロマ細胞の機能解明を進めることで、「非免疫細胞による生体防御学」という新たな領域を切り拓くと同時に、ストロマ細胞を標的とした腫瘍治療戦略の開発、「ストロマ創薬」へ向けた分子基盤の構築を目指す。

自然科学 12

人工タンパク質と機械学習によるタンパク質寿命の統合的理解

東京大学生産技術研究所
講師 坪山　幸太郎

本研究提案は、タンパク質の構造安定性を大規模に測定する実験系を構築した研究経験を活かし、哺乳類細胞内でのタンパク質寿命を大規模に測定し、更にその決定因子の特定を目指した研究を遂行するというものである。細胞内のタンパク質寿命は、がんやアルツハイマー病など多様な疾患と関連していることが示唆されており、タンパク質寿命の理解は疾患の理解にもつながることが期待される。現在は、細胞内のタンパク質寿命の大規模測定系の最適化を行っており、寿命に関する大規模データの取得に今後は努める予定である。

自然科学研究助成概要（若手）

自然科学 13 褐色脂肪細胞の鍵因子NFIAの機能解析とバイオバンクの統計解析から生活習慣病の精密医療へ

東京大学保健・健康推進本部
助教 平池　勇雄

我々は「エネルギー消費の促進」に基づく生活習慣病の治療標的として期待される褐色脂肪細胞に注目し、その分化と機能を制御する鍵因子として転写因子NFIAを同定してきた。NFIAはエネルギー消費の促進と炎症の抑制の双方を介して肥満や糖尿病に保護的に作用する。本研究はNFIAが標的遺伝子を正に制御する場合と負に制御する場合を規定する「文脈特異性」を解明し、正負それぞれの経路を制御するための分子標的を同定することを目的としている。また褐色脂肪細胞の活性を規定するgenetic risk scoreを構築し、ヒト褐色脂肪細胞が臨床転帰に与える意義をunbiasedに評価することも目指している。

自然科学 14 革新的形質の遺伝基盤を発見する多種間遺伝子発現比較法の開発

国立遺伝学研究所新分野創造センター
准教授 福島　健児

形質を規定する遺伝子の探索は、現代生物学の様々な場面で必須となる。しかし、太古に生じた革新的な形質は、遺伝学的解析に必要な種内変異が存在しない場合が多く、遺伝的基盤の探索が困難となる。この課題を克服するため、本提案では、生物の収斂進化（複数回進化）を利用する。収斂進化を「実験的反復」のように取り扱うことで、数億年規模の大進化の尺度で適用可能なトランスクリプトームワイド関連解析様の超多種間比較アプローチを開発する。これによって、マクロ進化スケールで生じた革新的な形質の遺伝的基盤を明らかにする。概念実証として、種内変異を欠く代表的な革新的形質である被子植物の食虫性にこれを適用し、関連する遺伝子発現進化を明らかにする。

自然科学 15 構造機能学的アプローチによるHIV複製メカニズムの基本原理解明

国立国際医療研究センター研究所
テニュアトラック部長 町田　晋一

HIV複製サイクルをターゲットとした抗HIV薬の多剤併用療法は HIV 感染者のエイズ発症を阻止することを可能とした。しかし、ウイルスを体内から完全に排除する根本的治癒は実現していない。また、薬剤耐性ウイルスの出現などの課題があり、現在もHIV複製の様々なステップをターゲットとした抗HIV薬の開発が欠かせない。そこで本研究では、HIV複製機構の基本原理を解明し、新たな抗HIV薬の開発基盤を提供する。具体的には、独自に構築した再構成クロマチンを用いた無細胞HIV複製反応システムを用いて、逆転写からインテグレーションまでの素過程を生化学的およびクライオ電子顕微鏡を用いた構造生物学的手法により明らかにする。

自然科学 16 オートファジー創薬の実現に向けたヒト糖尿病性腎臓病の病態解明

大阪大学大学院医学系研究科
特任助教 南　聡

糖尿病性腎臓病（Diabetic Kidney Disease: DKD）に対する治療法開発は喫緊の課題である。近年DKDにおける老化細胞の重要性が判明したが、どの細胞の老化がどのように病態に関わるかは不明である。申請者はDKD 患者では老化細胞が尿細管に限局することを見出し、病態の根源は老化尿細管にあると考えた。そこで本研究は第一に老化尿細管の特異的除去や１細胞RNAseq解析により、老化尿細管がDKD 進展に果たす役割を検証する。また申請者は抗老化機構オートファジーがDKD では保護的に働く一方で過剰な脂肪酸曝露が調節不全を起こすことを見出し、尿細管オートファジー改善による細胞老化抑制こそが根源的なDKD 治療になると考えた。そこで本研究は第二にCRISPR スクリーニングをはじめとする解析からDKD におけるオートファジー調節不全・細胞老化進展の分子機構解明を目指す。

自然科学 17

睡眠時の記憶・情動回路動態の雌雄差

富山大学研究推進機構
准教授 宮本　大祐

本研究は情動記憶、睡眠、性周期の相互作用を解明することを目的としている。宮本らは、♀マウスは消去学習が遅いが、恐怖条件付け学習後の断眠が恐怖記憶を不安定化させて、消去学習を促進することを解明している。これらから、性周期と睡眠のリズムが情動記憶回路動態に影響する可能性があると考えている。本研究は、光・電気生理学的計測法により、前頭前皮質とその入力元の多領域の活動を長期追跡して、性周期と睡眠の影響を包括的に評価する。本研究は、精神疾患の個別化医療や時間医療の基礎となる知見の提供が期待される。また、国際的な研究動向にも対応し、睡眠認知研究における性差の考慮の推進により世界をリードすることを目指す。

自然科学 18

焦電体を電極触媒として用いた内部電場誘起による二酸化炭素還元の活性向上

東京工業大学物質理工学院
テニュアトラック助教 山口　晃

電気化学的二酸化炭素還元においては、反応を駆動させる上で必要な過電圧が大きく、水素発生反応との競合や、生成物間での選択性の制御が課題となっている。本研究では焦電体、すなわち加熱によって内部電場が生じるような物質を用い、水熱下で反応を進行させることで印加電位を下げ、効率的に二酸化炭素還元を進行させることを狙う。また、本研究では水熱条件という、従来の電気化学反応とは異なる条件で行われるため、印加電位の変化に留まらず、生成物の選択性に関しても制御できる因子が増える。本研究を推進することで、電気化学的二酸化炭素還元に向けた電極触媒開発にパラダイムシフトをもたらすことを期待する。

自然科学 19

セリア原子膜の精密設計・集積による高速酸化物イオン伝導体の開発

名古屋大学未来材料システム研究所
助教 山本　瑛祐

最近、我々は固体界面活性剤を鋳型とする新しい原子膜創製技術を開発し、高選択的に再現性よく単結晶性ナノシートを合成する手法を確立してきた。本研究ではこの固体界面活性剤鋳型法をさらに発展させ、高速イオン伝導度の単結晶性セリア原子膜（1nm 程度の厚み）の精密設計を試みる。このセリア原子膜のイオン伝導特性は、ラテラルサイズや厚みに強く依存するため、原子膜の厚みやラテラルサイズの制御法についても確立する。また、本申請では、ハイスループット合成や解析を合わせて行い、固体界面活性剤鋳型法の体系化を行う。さらには、得られたセリア原子膜を集積膜化し、新規かつ高性能なイオン伝導性材料の創出を目指す。

自然科学 20

拡散障壁と融合分裂がミトコンドリアの若返りにおよぼす影響の定量的解析

東京大学大学院医学系研究科
助教 吉井　紗織

出芽酵母の非対称分裂において、娘細胞に受け継がれるミトコンドリアは質が高いことが知られる。一方、多くの場合ミトコンドリアは母娘間で連続し、さらに活発に融合分裂を繰り返すため、どのように不均一性が形成、維持されるかが不明である。最近申請者は、ミトコンドリア上の母娘境界において拡散障壁が形成されることを報告した。この拡散障壁は、一続きのミトコンドリア上で膜タンパク質の母娘間の交通を顕著に抑制する。本研究では、ミトコンドリアの若返りを定量的に検出する系を確立し、ミトコンドリアの融合分裂のダイナミクスやミトコンドリアの拡散障壁がミトコンドリアの若返りに与える影響を総合的に比較評価する。

自然科学
21

出生前環境がテロメア長および小児の健康に及ぼす影響：出生コホート研究

東京大学大学院医学系研究科
助教 Wai Kyi Mar

妊婦・新生児は環境汚染物質への曝露に敏感であり、胎盤を通じて汚染物質が胎児に蓄積し、細胞遺伝学的損傷を引き起こし発達に影響を与える可能性がある。また、テロメア長（TL）は生物学的老化のバイオマーカーであり、出生時のTLはその後の健康に関連するとされる。本研究はタイ・ミャンマー国境付近で行われるコホート研究であり、胎児期の環境汚染物質曝露および母親の心理的ストレスが、出生後の子どものTLと健康に与える影響を調査する。代表研究者は環境保健や母子保健分野で豊富な研究実績と国際的なフィールド経験を有する。環境保健や母子保健分野に関しての研究基盤・特色を最大限に発揮できる研究提案と考えられる。

第53回（2024年度）三菱財団人文科学研究助成先一覧

【大型連携研究助成】

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
1	東京都	法政大学江戸東京研究センター センター長　米家（こめいえ）　志乃布（しのぶ）	都市のアイデンティティの再発見と近未来にむけての再評価ー江戸東京研究を事例として	8,000,000円
2	東京都	国立情報学研究所情報社会相関研究系 准教授　坊農（ぼうのう）　真弓（まゆみ）	人工知能技術を利用したマイノリティ言語とコミュニケーションの理解	7,500,000円

【一般助成】

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
3	山梨県	大月市立大月短期大学経済科 教授　荒（あら）　哲（さとし）	日本占領下フィリピン周縁社会の抵抗と協力をめぐるビジネスと民衆暴力に関する研究	1,150,000円
4	東京都	立教大学文学部 教授　石川（いしかわ）　巧（たくみ）	江戸川乱歩日記の翻刻と注釈による分析研究	3,800,000円
5	愛知県	名古屋大学デジタル人文社会科学研究推進センター 准教授　岩田（いわた）　直也（なおや）	大規模言語モデルを活用した西洋古典研究と教育の推進	3,900,000円
6	群馬県	群馬県立女子大学 講師　浦木（うらき）　賢治（けんじ）	現存古写経の書写と伝来ー静嘉堂古写経群を中心に	1,110,000円
7	北海道	北海道大学大学院公共政策学連携研究部 准教授　開出（かいで）　雄介（ゆうすけ）	国際人権法の法的構造に関する研究	1,180,000円
8	茨城県	茨城大学人文社会科学部 准教授　川島（かわしま）　佑介（ゆうすけ）	現代日本の危機管理におけるオールハザーズアプローチの研究	2,980,000円
9	京都府	京都大学大学院文学研究科 教授　岸（きし）　政彦（まさひこ）	「ゆいまーる」の行方ー貧困と沖縄的共同性の実証的・実践的生活史研究	2,280,000円
10	京都府	同志社大学<奄美ー沖縄ー琉球>研究センター 嘱託研究員　金（きむ）　美佞（みよん）	第2次世界大戦に参戦したハワイ移民の重層的関係性に関する研究ー移民2世の生と死の記録を通じて	1,030,000円
11	東京都	早稲田大学高等研究所 専任講師　桑原（くわばら）　夏子（なつこ）	カトリック改革期ローマ教会圏における聖母被昇天図像の変容と再創出について	1,150,000円
12	東京都	一橋大学社会科学古典資料センター 助教　東風谷（こちや）　太一（たいち）	19世紀後半ヨーロッパ都市における娯楽消費の大衆化ービール醸造業によるウィーン万国博覧会出展の事例から	1,420,000円
13	東京都	公益財団法人東洋文庫研究部 研究員　小松（こまつ）　久男（ひさお）	近代中央アジアにおけるジャディード運動の総合的研究	1,760,000円
14	東京都	東京農工大学大学院工学研究院 准教授　古宮（こみや）　嘉那子（かなこ）	自然言語処理を利用した古文解析	3,520,000円

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
15	東京都	帝京大学文学部史学科 専任講師　齊藤（さいとう）　茂雄（しげお）	キルギス共和国国立博物館所蔵古代トルコ語タラス碑文の調査研究	840,000円
16	東京都	東京大学医学部附属病院 講師　榊原（さかきばら）　英輔（えいすけ）	精神科医療における客体化についての研究	1,420,000円
17	東京都	明治大学文学部 教授　佐々木（ささき）　憲一（けんいち）	北アメリカ先史時代における巨大モニュメント築造の宗教的・儀礼的背景に関する研究	2,090,000円
18	奈良県	国立文化財機構奈良文化財研究所 企画調整部国際遺跡研究室 室長　庄田（しょうだ）　慎矢（しんや）	ウクライナ先史土器の考古科学的研究を通じた新しい国際協働枠組みの構築	4,400,000円
19	東京都	公益財団法人東洋文庫研究部 研究員　新免（しんめん）　康（やすし）	近現代ウイグル人社会における歴史叙述の変容：民族語文献からの検討	3,150,000円
20	東京都	慶應義塾大学文学部 教授　近森（ちかもり）　高明（たかあき）	令和アーバニズムと「再帰的モール化」の社会学的研究：都心部商業施設の「なめらかな洗練」を手がかりに	1,150,000円
21	兵庫県	関西学院大学建築学部 教授　照本（てるもと）　清峰（きよみね）	災害発生後の観光施設・宿泊施設の観光客・来訪者への支援対応に関する研究	2,220,000円
22	東京都	東京農業大学国際食料情報学部 非常勤講師　戸森（ともり）　麻衣子（まいこ）	江戸時代後期における下級武士イメージの再構成	600,000円
23	大阪府	国立民族学博物館 特定教授　西尾（にしお）　哲夫（てつお）	ギヨーム＝アンドレ・ヴィロトー著『アラブ音楽事典』の研究ーアラブ音楽概念と民族音楽学の形成過程の解明	2,760,000円
24	栃木県	宇都宮大学国際学部 准教授　藤井（ふじい）　広重（ひろしげ）	アフリカ諸国による国際刑事裁判規範の形成に関する研究	1,830,000円
25	大阪府	国立民族学博物館超域フィールド科学研究部 教授　Matthews（ましうす）　Peter（ぴーたー）	「サトイモ」と「クワズイモ」の食の伝統と遺伝的多様性	3,410,000円
26	大阪府	関西大学文学部 准教授　松井（まつい）　幸一（こういち）	UAVレーザー測量と土地整理期絵図を利用した琉球村落空間の復原	3,420,000円
27	大阪府	大阪大学大学院人文学研究科 教授　松井（まつい）　太（だい）	モンゴル時代カラホト出土社会経済文書の言語横断的研究	3,520,000円
28	東京都	東京大学史料編纂所 教授　松方（まつかた）　冬子（ふゆこ）	外交の世界史の再構築ー15～19世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制ー	4,150,000円
29	北海道	北海道大学大学院 メディア・コミュニケーション研究院 学術研究員　武藤（むとう）　優（ゆう）	公開される「朝鮮雅楽」:「朝鮮雅楽」をめぐる日本人ならびに朝鮮人知識人の言説分析を中心に	830,000円

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
30	京都府	京都大学経済研究所 教授　森（もり）　知也（ともや）	都市という「レンズ」を通してみる日本の未来：経済集積理論で予測する人口減少下の日本の地域経済	3,520,000円
31	東京都	立教大学学校・社会教育講座 特任教授　山形（やまがた）　眞理子（まりこ）	チャンパ城郭遺跡の考古学的検討：ベトナム・フエ市タインロイ遺跡の測量調査を中心に	2,220,000円
32	神奈川県	理化学研究所生命医科学研究センター 生命医科学倫理とコ・デザイン研究チーム 研究員　由井（ゆい）　秀樹（ひでき）	色覚検査と就業制限をめぐる論争と制度の変遷過程の分析	710,000円
33	福岡県	九州大学大学院農学研究院 教授　渡辺（わたなべ）　敦史（あつし）	なぜスギ在来品種「メアサ」は九州の寺社・神宮に植栽されたのか？～九州スギの起源と信仰の対象としての杉～	1,980,000円
			合　計　　33件	85,000,000円

（所属先・職名については2024年９月11日現在）

人文科学研究助成概要（一般）

人文科学 1

都市のアイデンティティの再発見と近未来にむけての再評価 ―江戸東京研究を事例として

法政大学江戸東京研究センター
センター長 米家　志乃布

都市のアイデンティティとは何か。江戸や江戸以前の歴史を振り返り、江戸東京にある名所や様々な場所の記憶を掘り起こして再発見することは、近未来の東京の在り方にも重要である。都市の変容とは、常に新しいものだけがかたちづくられるのではなく、伝統が新しいものの一部になっていくことでもある。本研究は、このような江戸東京のアイデンティティを再発見すること、それを近未来の東京デザインに活かし、再評価することを目的とする。都市論や建築史、文化論や景観工学など多様な分野の専門家が集まり、共同で地図を作成して江戸東京の事象を可視化し、研究成果を論文集として刊行することで、社会にむけた学術的成果の発信を目指す。

人文科学 2

人工知能技術を利用したマイノリティ言語とコミュニケーションの理解

国立情報学研究所情報社会相関研究系
准教授 坊農　真弓

本研究は、日本手話といったマイノリティ言語、触手話、指点字といったマイノリティコミュニケーションを人工知能技術を利用して理解することを通し、日本社会における言語とコミュニケーションの多様性を照らし出すものである。研究対象データとして、研究代表者の研究室で収録を進めてきた次の四つを用いる予定である：『日本手話話し言葉コーパス』、『日本触手話対話コーパス』、『指点字コミュニケーションコーパス』、『日英オンラインクロスサインコーパス』。研究開始は2025年４月であるが、そのための準備として本年度は、これらのデータのうちどれから着手すべきかについて研究チームで検討を進めた。

人文科学 3

日本占領下フィリピン周縁社会の抵抗と協力をめぐるビジネスと民衆暴力に関する研究

大月市立大月短期大学経済科
教授 荒　哲

本研究は、日本占領下のフィリピンで展開されたインフォーマルな経済活動と戦時暴力との関連を検討する。フィリピンの戦前からの植民地経済活動は、現地エリート層によっても担われてきたが、日本占領時代のフィリピンにおいては、植民地経済の担い手となったエリート層以外の下位中間層がインフォーマルセクター内で突出した経済活動を展開し、短期間で富を蓄積するに至った。本研究では、戦時下フィリピン社会におけるこうしたインフォーマルな経済活動に着目し、彼らが対日抵抗並びに対日協力をめぐり、いかに戦時社会を乗り切ったのか、その経済活動がフィリピン社会の基層部分に戦後、どれほどの影響を与えたかを検討する。

人文科学 4

江戸川乱歩日記の翻刻と注釈による分析研究

立教大学文学部
教授 石川　巧

本研究は平井太郎（江戸川乱歩）が遺した自筆資料の日記（カード、手帖、スケッチブック、用紙メモ、掛け紙を含む）を翻刻するとともに、記述内容に注釈を施すことを目的としている。平井太郎の日記は、これまで平井家（著作権継承者・平井憲太郎）が所蔵してきたものであり、その内容はもちろん日記が存在していることすら知られていない貴重資料である。また、日本における探偵小説の草創期である大正初期から戦後までの長期間の日記資料となっていること、江戸川乱歩として生きた平井太郎の実像を明らかにすることができる資料であることなどにおいて、この日記を翻刻し注釈を施したうえでデジタル公開することは画期的な仕事であると考える。

人文科学 5

大規模言語モデルを活用した西洋古典研究と教育の推進

名古屋大学デジタル人文社会科学研究推進センター
准教授 岩田　直也

本プロジェクトは、私たちが開発・公開したAI対話システム「ヒューマニテクスト」（Humanitext Antiqua）をさらに発展させることを目的としている。このシステムは、西洋古典学に特化したRAG（Retrieval-Augmented Generation）手法を採用しているが、本プロジェクトではその精度をさらに高めることに焦点を当てている。これにより、LLMが古代ギリシア語やラテン語の原典データをより効率的かつ精密に参照し、広範な文献を短時間で深く分析することを可能とする。最終的には、人文学全体に新たな研究手法を提供するとともに、国際的な研究プラットフォームの構築を目指す。

人文科学 6

現存古写経の書写と伝来—静嘉堂古写経群を中心に

群馬県立女子大学
講師 浦木　賢治

本研究では、明治期以降、岩崎彌之助（三菱二代社長）·小彌太（同四代社長）父子が収集した静嘉堂所蔵古写経群の調査成果をふまえ、関連する他機関所蔵の古写経を調査し、それらの接続や僚巻関係を検討、また類例との比較から各経巻の歴史的位置づけを明らかにしていくことを目的としている。そのためには、経巻の紙質や界高·界幅などの規格を計測し精査することや関連する歴史資料をふまえた分析が欠かせない。さらに古写経群の成立や伝来過程を検討することで、古写経のもつ歴史的価値を見出し、そこから新たな古写経の「発見」にもつなげたい。これらの調査研究を通じ、国内の資料状況の再評価とその周知·普及に貢献することも目指したい。

人文科学 7

国際人権法の法的構造に関する研究

北海道大学大学院公共政策学連携研究部
准教授 開出　雄介

人が人だけで有する権利である人権は、国際法上も保障されている。現代、国際的に保障されている人権の役割は益々重要となっている。このような状況のなか、国際的に保障される人権に関する法（国際人権法）について法学的な検討を進めることは急務であるが、世界的に見ても十分に進んでいない。

本研究は、国際人権法の法的構造という、国際人権法に関する法的な課題の一丁目一番地にあると言える問題に取り組む。その際には、申請者のこれまでの検討で得られた、国家が他の国家にする「約束」の存在を踏まえることによって国際法に関する分析を適切に行うことができるとの知見を踏まえて、世界的にも新しい見解を打ち出すことを目指す。

人文科学 8

現代日本の危機管理におけるオールハザーズアプローチの研究

茨城大学人文社会科学部
准教授 川島　佑介

日本では、自然災害と人為的災害には、それぞれ別々の法と所管官庁による対応が用意されている。しかし、近年の自治体では、自然災害と人為的災害をあわせて「危機管理」と捉えて、類似の対応を取っており、法体系との整合が崩れてきている。

注意すべきは、日本ではなし崩し的にオールハザーズ「的」なアプローチに向かっている点である。自然災害と人為的災害では、異なる対応が必要なところもあるため、十分な理解を欠いたこうした動きは、むしろ危険である。本研究は、国と自治体の関係に注目しつつ、危機管理の実務を担う自治体において、オールハザーズ「的」なアプローチへの動きがどのように、どの程度進んでいるのかを明らかにする。

人文科学研究助成概要（一般）

人文科学 9

「ゆいまーる」の行方 ―貧困と沖縄的共同性の実証的・実践的生活史研究

京都大学大学院文学研究科
教授 岸　政彦

これまで沖縄は、「共同性の社会」として描かれてきた。しかし近年になって、沖縄社会の内部の貧困や経済格差が明らかになりつつある。ここで注目されているのは、沖縄の地域共同体のもつ「包摂と排除」の機能である。それは人びとを包摂もするが、ときには沖縄の人びとにとって過酷な「排除」の場としても現れるのである。

本研究では特に、この沖縄的共同性が厳しい経済的状況にある人びとに対して持つ多様で複雑な社会的機能に着目し、それがどのように形成され、維持されてきたか、そして人びとをどのように包摂／排除しているのかを、当事者の「生活史」に対する調査を通じて、実証的に明らかにする。

人文科学 10

第2次世界大戦に参戦したハワイ移民の重層的関係性に関する研究 ―移民2世の生と死の記録を通じて

同志社大学＜奄美－沖縄－琉球＞研究センター
嘱託研究員 金　美佞

本研究は、第２次世界大戦に自発的に参加したハワイ移民２世の生と死の複雑な関係性を明らかにすることを目的とする。彼らの自発的入隊は、日本人として見なされることから解放され、米国市民として認められる契機となった。移民２世は、１世の母国への強い繋がりから解放され、「アメリカ人」としてのアイデンティティを形成した。彼らの軍人としての記録を検討することで、移民が国民およびエスニック・アイデンティティを維持しながら生きていた方法を理解する手がかりとなる。本研究の意義は、ハワイ発のマイノリティの重層的関係性を通じて、現代の国民国家におけるディアスポラの未来の可能性を探る点にある。

人文科学 11

カトリック改革期ローマ教会圏における聖母被昇天図像の変容と再創出について

早稲田大学高等研究所
専任講師 桑原　夏子

カトリック改革期において、これまで多様な図像で描かれてきた「聖母被昇天」の統一的な図像が作り出された。この定型化した図像はその後、ヨーロッパ内のみならず、アジア、南米、北アフリカにも伝わり、広く受容された。しかしこの定型化した図像がいったいどのようにして作り出されたかは未だ明らかになっていない。

本研究では、神学者ヨハネス・モラヌスがカトリック改革の一環として記した美術注釈書の精読を通して、いかなるカトリックのロジックのもとに「聖母被昇天」の統一的な図像が定められたのかを探る。またカトリック改革期以前の当該図像や典拠との比較から、どのような視覚的要素が継承もしくは排除されたのかを分析する。

人文科学 12

19世紀後半ヨーロッパ都市における娯楽消費の大衆化―ビール醸造業によるウィーン万国博覧会出展の事例から

一橋大学社会科学古典資料センター
助教 東風谷　太一

近代ヨーロッパの消費社会化に関して重要な論点となってきた流行の生成は、社会競争的模倣論により上から下への動きと規定されてきた。本研究は、シュヴェヒャト醸造所によるウィーン万博（1873年）へのラガービール出品に着目し、「労働者の栄養源」とみなされていたビールが「下女から皇帝まで」流行した背景を分析する。さらに万博を契機とする供給システム再編を介して、ビールが19世紀ヨーロッパの「都市消費景観」を一変させた過程を実証的に解明する。本研究の意義は、流行が従来の想定とは逆の動きを示した事例の検討を通じて社会競争的模倣論に修正を迫り、大衆消費社会の源流の新たな一面を示すことにある。

人文科学 13

近代中央アジアにおけるジャディード運動の総合的研究

公益財団法人東洋文庫研究部
研究員 小松　久男

ジャディード運動は、20世紀初頭から帝政ロシア統治下の中央アジアで展開されたムスリム社会の改革運動である。これを担ったムスリム知識人は教育改革の実践、新聞・雑誌の刊行、新文学の創造などにあたり、1917年のロシア革命期には民族的な覚醒と自治運動を先導し、ソビエト期の1920年代にも教育・文化の分野で大きな役割を果たしたが、スターリン時代に粛清の犠牲となった。ソ連の解体期からウズベキスタンを中心にジャディード運動の再評価が進んでいるが、この研究は変革期の様相のみならず、現代のイスラームやナショナリズムを考えるうえでも示唆を与える。本研究はこのジャディード運動の総合的な研究をめざす。

人文科学 14

自然言語処理を利用した古文解析

東京農工大学大学院工学研究院
准教授 古宮　嘉那子

近代以前の日本語の文章は現代の話者にとっては簡単に理解できないものであり、その理解には特殊な訓練が必要である。また日本語学や言語学では内省を行って文を解析することがあるが、近代以前の日本語には母語話者が存在せず、内省を行えないのに対して、機械学習はデータを根拠に統計的な学習を行う。本研究は、ChatGPTなど既存のモデルを利用すると、ランダムな回答がありうること、またモデルが更新されることで結果が揺れることがあるため、再現性の観点から独自のモデルを構築し、自然言語処理を利用して古文解析を行うものである。自動解析結果を日本語学の研究者に提供することにより、古文研究の進展に貢献する。

人文科学 15

キルギス共和国国立博物館所蔵古代トルコ語タラス碑文の調査研究

帝京大学文学部史学科
専任講師 齊藤　茂雄

キルギス共和国に現存する古代トルコ語のタラス碑文は、死者の追悼のために作成されたとされ、古代トルコ系民族の基層文化を知るために重要な意味を持つ。これまで、多くの研究者によって読解が行われてきたが、それぞれの読解に沿うような恣意的な転写しか公開されておらず、拓本を採取することで先行研究の読解を客観的に検証する必要がある。

そこで本研究では、現地研究者の協力のもと、ビシュケクにあるキルギス国立博物館に所蔵されているタラス第８碑文・第10碑文・第11碑文の拓本を採取し、その拓本に基づいて、より客観的な碑文の読解を行う。そして、助成終了後には国内外の専門誌に読解結果を公開することを目指す。

人文科学 16

精神科医療における客体化についての研究

東京大学医学部附属病院
講師 榊原　英輔

精神医学や精神科医療に対する不信や批判は常に存在している。この不信感や疑念の由来の一つに、精神医学は患者の心をモノのように扱っているのではないか？という疑念が存在する。人間をモノのように扱うことは、フェミニズムの思想の中で客体化（objectification）と呼ばれてきた。人間の身体を扱う医学において、客体化は不可避の現象であるが、人の心を治療対象とする精神医学においては、医学の他の専門領域よりも、客体化がよりパラドキシカルなものとして知覚される。本研究課題は、精神医学における客体化の意味と機能を分析することで、精神医学に対する不信感の由来を明確化し、疑念を解きほぐすことを目指す。

人文科学研究助成概要（一般）

人文科学 17

北アメリカ先史時代における巨大モニュメント築造の宗教的・儀礼的背景に関する研究

明治大学文学部
教授 佐々木　憲一

本研究では、アメリカ合衆国ミズーリ州南東部に所在するマウンド（墳丘墓・豪族居館の基壇・祭祀用の土盛り建造物）遺跡のデジタル測量と地下レーダー探査を行う。マウンド遺跡には複数のマウンドが立地しており、精密に測量することで、マウンド間をつなぐ方位が天体の動きと関係している可能性を探ることができる。関係しておれば、農耕民である先史時代先住民が天体を意識・畏怖していたことを示せる。同時に地下レーダー探査により、個々のマウンドが墳丘墓なのか、豪族居館の基壇なのか、祭祀用の土盛り建造物なのか、その機能を明らかにできる。また、共同体一般成員の住居など、地表に残るマウンド以外の遺跡の諸側面にも迫れる。

人文科学 18

ウクライナ先史土器の考古科学的研究を通じた新しい国際協働枠組みの構築

国立文化財機構奈良文化財研究所企画調整部国際遺跡研究室
室長 庄田　慎矢

本研究では、ウクライナの首都キーウに所在する科学アカデミー考古学研究所に所蔵されているトリピリア文化の土器の残存有機物を分析し、その用途を明らかにする。ウクライナの専門家にサンプリング法を技術移転し、採取した試料を日本へ運搬する。奈良文化財研究所および英国ヨーク大学において分析技術の移転を行いつつ、残存脂質分析などの科学的分析を共同で行い、成果を導出する。このような一連の共同作業を通じて、ウクライナの先史時代のハイライトともいえるトリピリア文化における食性・調理文化の特性を明らかにすると同時に、これまでとは異なる新しい国際的共同研究の枠組みを構築し、ウクライナ戦争からの復興を支援する。

人文科学 19

近現代ウイグル人社会における歴史叙述の変容：民族語文献からの検討

公益財団法人東洋文庫研究部
研究員 新免　康

本研究の目的は、中国新疆における主要な民族であるウイグル人をとりあげ、彼らによって自らのテュルク系の言語で著された文献を系統的に検討することを通して、近現代のウイグル人社会における歴史叙述の変容の具体的な様相を明らかにすることである。その際、近代的な民族意識の形成を背景に展開したウイグル人の政治的・社会的活動との連関に注目した上で、過去の事象がどのように自らの歴史として認識され、具体的な歴史叙述へと構築・表現されたのか、という問題に焦点を当てる。意識様態や精神文化という側面にアプローチする本研究を通して、現代新疆における民族問題の特質について考える上での有効な視点・知見を得ることができる。

人文科学 20

令和アーバニズムと「再帰的モール化」の社会学的研究：都心部商業施設の「なめらかな洗練」を手がかりに

慶應義塾大学文学部
教授 近森　高明

近年の都心部に登場する大型商業施設は、渋谷のMIYASHITA PARK、新宿の歌舞伎町タワーなどのように、旧来のモール的均質性を回避すべく、周囲の固有の場所性を再帰的に観察し、その結果を建築形態や内部プログラムへと組み込んでいる。本研究では、そうした施設の開発意図やコンセプト、内装や空間デザイン、技術システムを調査・分析することによって、これらが周囲の地域と連接しながら、「なめらかな洗練」とも呼びうる独特の空間的性質を生成している実態を明らかにする。そうした「再帰的モール化」の動きをもとに、近年の都市空間の変容――いわば「令和アーバニズム」――を特徴づける傾向を浮かびあがらせたい。

人文科学 21

災害発生後の観光施設・宿泊施設の観光客・来訪者への支援対応に関する研究

関西学院大学建築学部
教授 照本　清峰

日本の沿岸部には様々な観光地が存在し、国内外から多くの観光客がこれらの場所に来訪している。一方で沿岸部の観光地では、地震及び地震に起因する津波により被害を受ける危険性もある。海溝型地震の発生が懸念される現在、観光客及び来訪者を対象とした津波避難体制を構築するためのスキームを形成することは喫緊の課題である。本研究では、令和６年能登半島地震において津波に対する危険性があった宿泊施設・観光施設を対象として、インタビュー調査、質問紙調査によって、地震発生後の津波避難対応の実態と対応課題を把握することをねらいとしている。観光客・来訪者の支援のあり方を検討するための素材を得ることに本研究の意義がある。

人文科学 22

江戸時代後期における下級武士イメージの再構成

東京農業大学国際食料情報学部
非常勤講師 戸森　麻衣子

日本近世の武士社会には、将軍から足軽・同心まで重層的な序列の構造が存在した。本研究は、このうち下級武士と呼ばれる階層について、その特質と、彼らが果たした歴史的役割を位置づけようとするものである。下級武士については、社会的機能に則した分類や整理がいまだ不十分な状態にあり、一部の事例にイメージが引きずられている。そこで、多角的な視点に立ち、階層に共通して見出される動向を検討していきたい。下級武士は、その身分のため権限が抑えられていたものの、役所などで事務処理能力や関係者との調整力を発揮していき、武家政治の質的展開を促したと仮説している。史料を渉猟しながら、彼らの能力や業績の実態を明らかにする。

人文科学 23

ギヨーム＝アンドレ・ヴィロトー著『アラブ音楽事典』の研究―アラブ音楽概念と民族音楽学の形成過程の解明

国立民族学博物館
特定教授 西尾　哲夫

フランスの音楽学者ギヨーム＝アンドレ・ヴィロトー（1759～1839）は、ナポレオンのエジプト遠征に同行した学者団の一員としてエジプトの音楽を調査した。その成果は、ナポレオンが刊行した歴史的大著『エジプト誌』に掲載されたが、元資料も含まれる遺稿『アラブ音楽事典』（現在、国立民族学博物館図書室所蔵）は、未公刊の手稿として詳細な検討が待たれている。同遺稿は中東音楽の貴重な現地調査の資料であり、世界最初のアラブ音楽事典でもある。本書を分析して校訂テクストを出版し研究者に供することは、中東地域の音楽研究にとってはもちろんのこと、民族音楽学の歴史的研究ひいては音楽史研究全体にとっても大きな貢献となる。

人文科学 24

アフリカ諸国による国際刑事裁判規範の形成に関する研究

宇都宮大学国際学部
准教授 藤井　広重

これまで、国際的な規範やルールは、先進諸国によって主導されてきた。しかし、2010年代にアフリカ諸国は、国際刑事裁判所（ICC）に非常に強く反発し、ICC締約国会議にて自己の利益に適う制度改正を成し遂げるなど、国際的な規範に対し一定の影響力を行使した。そこで本研究は、先進諸国のような力の裏付けがあるとはいえない地域が、国際的な規範やルールにどのように影響力を行使できたのか、そのプロセスを探究したい。そして、どのような環境下でアフリカ諸国がICCに影響力を行使できたのかを解き明かすことで、アフリカ諸国による国際的な規範への影響力そのものを捉え直す契機とし、ICCの課題についても検証する。

人文科学研究助成概要（一般）

人文科学 25

「サトイモ」と「クワズイモ」の食の伝統と遺伝的多様性

国立民族学博物館超域フィールド科学研究部
教授 Matthews Peter

このプロジェクトでは、サトイモ（*Colocasia esculenta*）の地理的起源の候補地であるバングラデシュと、東アジアで農耕が発達した時期に栽培食用植物としてサトイモを導入したと考えられているベトナムと日本において、農業研究機関（ex situ）によって保持されてきた栽培サトイモの基本情報を収集する。形態と遺伝的多様性に関する情報を収集整理することにより、それぞれの地域におけるサトイモの調理方法と栽培品種の形態的、遺伝的相違との関連をさぐる。これにより、栽培サトイモの進化と人類の食生活におけるその役割について、新たな知見が得られることが期待される。また、バングラデシュとベトナムにおけるAlocasia属の食用利用についても調査する。

人文科学 26

UAVレーザー測量と土地整理期絵図を利用した琉球村落空間の復原

関西大学文学部
准教授 松井　幸一

本研究はグスク時代の旧村を対象として、村落空間構造の形成と祭祀空間が持つ意味を、近代に作成された絵図とUAV（ドローン）レーザー測量等を利用し実証的に明らかにすることを目的とする。これまで琉球の村落研究は琉球王国時代の各要素の特徴的な面を強調し、単一的視点からおこなわれることが多かった。本研究は思想・景観・祭祀の統合という視点から、フィールドワークと史料分析に加えて、グスク時代の旧村を対象に精緻な測量と3Dモデル化による景観復原という新たな手法を通じて多角的に検証する。その先には琉球の伝統的村落の空間構造が何を指向していたのか、その核心的空間ともいえる祭祀空間の原点の役割を明らかにすることを目指す。

人文科学 27

モンゴル時代カラホト出土社会経済文書の言語横断的研究

大阪大学大学院人文学研究科
教授 松井　太

中国内モンゴル自治区西端のカラホト（黒城／黒水城）遺跡から出土したモンゴル帝国（元朝）時代のモンゴル語・西夏語・漢語の社会経済文書類を主要な分析対象として、モンゴル世界帝国下で多言語・多文化が共生したカラホト社会の歴史的諸相を具体的に解明する。原文書調査を通じて正確な校訂・録文を提出するという文献学的手法に立脚し、さらにモンゴル語・西夏語・漢語古文書を言語横断的に鳥瞰比較することで個別文書の未詳語彙や難読・不分明なテキストの分析と内容理解を深化させ、歴史像の再構成に結実させることをめざす。また、非漢語由来の術語（人名・地名など）のデータベースを構築して、将来的な調査研究の展開に資す。

人文科学 28

外交の世界史の再構築 —15～19世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制—

東京大学史料編纂所
教授 松方　冬子

本研究は、15～19世紀（すなわち広い意味での近世）のユーラシアで、各政権が交易や人の移動に対してどのように保護を与え、どのような統制を加えようとしたかを、文書や現場のあり方に着目して、実証的に考察するものである。なかでも、①外国人や外国人との取引を統制する方法、②交易から利潤を吸い上げる方法、③居留民（自国から出ていった人々を含む）を統制する方法に着目し、これらが条約、関税、領事と呼ばれるものへと収斂していく過程を検討する。この作業を通じて、19世紀的な国際社会の形成をゴールとし、朝貢体制と条約体制との対比で理解されてきた外交の世界史を見直すとともに、ヨーロッパとアジアを統一的にとらえる新しい外交の世界史を構築する。

人文科学 29

公開される「朝鮮雅楽」:「朝鮮雅楽」をめぐる日本人ならびに朝鮮人知識人の言説分析を中心に

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院
学術研究員 武藤　優

日本の植民地となった時期の朝鮮では、宮廷の祭祀・宴礼楽である「朝鮮雅楽」が日本帝国の宮内省が管轄する「李王職雅楽部」によって保存され、振興した。同時に日本人や朝鮮人知識人によって朝鮮雅楽をめぐる様々な学知や言説が形成され、それらは朝鮮雅楽に新たな価値を付与していった。朝鮮雅楽はどのように公開され、その「伝統」はいかにして発展、変容したのか。本研究は、朝鮮雅楽と観客との関係に注目し、とりわけ知識人らによる言説を分析することにより、朝鮮雅楽の保存と振興の過程を解明する。朝鮮雅楽を日本近代史の枠組みから捉え直すとともに、朝鮮の文化・芸術の側面から帝国主義・植民地支配の構造的解明を目指すものである。

人文科学 30

都市という「レンズ」を通してみる日本の未来：経済集積理論で予測する人口減少下の日本の地域経済

京都大学経済研究所
教授 森　知也

日本は今後、未曾有の高齢化と人口減少に直面する。人口は100 年後には 3 千万人程度まで減る見通しだ。本研究では、人口の 8 割以上が暮らす人口集積としての「都市」に注目し、経済集積理論に基づいた統計モデルを用い、国全体の変化、個々の都市の変化、そして 1 km 四方というミクロな地域で起こる変化のメカニズムを、一貫した経済理論で理解し、データを駆使して予測する。100年後、人口の重心は西日本に移り、存続する都市の内部では低密度化が進む。地方創生・コンパクトシティなどの国主導の地域活性化政策に対して「選択と集中」の必要性を定量化し、都市外の地域にも光を当てた、視野の広い地域政策を提案する。

人文科学 31

チャンパ城郭遺跡の考古学的検討：ベトナム・フエ市タインロイ遺跡の測量調査を中心に

立教大学学校・社会教育講座
特任教授 山形　眞理子

ベトナム中部・フエ市に位置するタインロイ遺跡はチャンパ（後 2 世紀末から 8 世紀半ばまでの中国名称は林邑）の城郭遺跡であり、中国の歴史書に登場する林邑の軍事拠点「区粟城」に比定されている。林邑と中国の交州が衝突するたびに城の攻防戦が繰り返されたという重要な歴史的背景をもつ遺跡であるが、発掘調査が行われたことはなく、開発による遺跡の破壊が進行している。そこで本研究では日越の考古学者が協働し、現存する城壁などの遺構の位置を示す精度の高い地図を整備する。衛星画像や空中写真を参照しながら、GNSS測位システムを駆使して測量を行い、近い将来の発掘調査や保存計画の策定に資する遺跡地図の作成を目指す。

人文科学 32

色覚検査と就業制限をめぐる論争と制度の変遷過程の分析

理化学研究所生命医科学研究センター
生命医科学倫理とコ・デザイン研究チーム
研究員 由井　秀樹

2023年 6 月に良質かつ適切なゲノム医療を国民が安心して受けられるようにするための施策の総合的かつ計画的な推進に関する法律が成立した。同法は不当な遺伝差別が行われないようにすることを基本理念として掲げるが、不当な差別に対する具体的な対策は明らかでない。

本研究で焦点をあてるのは、色覚に基づく就業制限をめぐる問題であり、これは、遺伝差別という側面も有している。1980年代以降、徐々に制限が緩和されていくが、現在でも一部で制限が残されている。本研究では、1980年代から2010年代まで、いつ、どのような立場から、どのようなことが語られ、就業制限の緩和や制度改定に結びついていったか検討する。

人文科学
33

なぜスギ在来品種「メアサ」は九州の寺社・神宮に植栽されたのか？～九州スギの起源と信仰の対象としての杉～

九州大学大学院農学研究院
教授　渡辺　敦史

九州本土のスギは氷河期に消滅し、その後九州以外の地からスギが持ち込まれたとされる。このうち、樹齢800年の霧島神宮御神木をはじめとして推定樹齢1000年を超える九州各地のスギ古木には、メアサと呼ばれるスギ在来品種が複数存在する。一方で、英彦山神宮周辺では、「メアサ」植栽の影響は乏しいことが明らかとなった。そのため、九州本土ではスギ植栽に関し、信仰を含む何らかの意図や寺社・神宮等の文化圏・勢力圏が関与していた可能性が考えられる。九州各地に残るスギ古木・在来品種を対象とした由来などの調査を行うことで、古文書などの記録には残っていない九州本土特有の文化的特異性を明らかにすることが本研究の目的である。

第55回（2024年度）三菱財団社会福祉事業・研究助成先一覧

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
1	宮城県	特定非営利活動法人World Open Heart 理事長　阿部（あべ）　恭子（きょうこ）	被害者加害者及びその家族を含めた「犯罪によって傷ついた人々」の包括的な支援体制の構築に関する実践研究	2,270,000円
2	神奈川県	社会福祉法人かしの木会 理事長　飯田（いいだ）　雅子（まさこ）	「知的障害のある人の健康測定による未病改善への継続的取り組み」	930,000円
3	兵庫県	特定非営利活動法人アイ・コラボレーション神戸 理事長　板垣（いたがき）　宏明（ひろあき）	だれもが一人で出かけられるまちづくりのためのナビゲーションタグ整備と普及展開に向けた実践的研究	6,220,000円
4	東京都	国立精神・神経医療研究センター 認知行動療法センター 部長　伊藤（いとう）　正哉（まさや）	エビデンスに基づくトラウマケア及び心的外傷後ストレス症治療の全国実装	5,060,000円
5	大阪府	聴覚障害のあるアルコール症者のグループ検討会 代表　稲（いな）　淳子（じゅんこ）	聴覚障害のあるアルコール依存症者のグループ検討会	710,000円
6	福岡県	西南学院大学人間科学部 准教授　栄留（えいどめ）　里美（さとみ）	心理的安全性を担保した児童相談所の子ども参画援助方針策定方法の開発	3,150,000円
7	東京都	東京大学大学院医学系研究科 特任講師　エルタイバニ　サメハ	在宅要介護高齢者のセルフケア行動継続戦略に関する探索的研究：混合研究法	1,930,000円
8	千葉県	順天堂大学医療看護学部 助教　王（おう）　迪（てき）	高齢者向け住宅居住者の生活ならびにサービスの国際比較ー日本、シンガポール、台湾の国際共同研究ー	990,000円
9	三重県	三重大学教育学部 特任教授　大野（おおの）　恵理（えり）	フォニックス指導法を活用した聴覚障害児童生徒のための英語読み書き学習支援システムの開発と実践	1,140,000円
10	千葉県	国立がん研究センター東病院精神腫瘍科 科長　小川（おがわ）　朝生（あさお）	わが国の実態に配慮をした意思決定支援のフレームワークの構築と実装に関する検討	2,340,000円
11	東京都	国立成育医療研究センター政策科学研究部 政策開発研究室長　越智（おち）　真奈美（まなみ）	院内虐待対応組織（Child Protection Team：CPT）の地域連携機能強化に向けたアセスメントに関する研究	2,730,000円
12	東京都	特定非営利活動法人イシュープラスデザイン 代表　筧（かけい）　裕介（ゆうすけ）	認知・身体機能が低下し孤立する認知症ご本人の社会参加のための当事者利用型生成A.I.の研究開発・社会実装	5,800,000円
13	京都府	京都府立医科大学大学院医学研究科 准教授　笠井（かさい）　高士（たかし）	ダウン症候群におけるアルツハイマー病発症時の社会生活能力低下の特徴解析と病院前認知症診断調査票の開発	4,550,000円
14	京都府	京都女子大学発達教育学部 教授　ガハプカ　奈美（なみ）	音楽を通じた障がい者理解の当事者意識を育むプログラム構築ーホワイトハンドコーラスの活動から考えるー	840,000円

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
15	静岡県	浜松医科大学医学部附属病院腫瘍センター 副センター長　柄山（からやま）　正人（まさと）	インターネットを用いたAIと医療者によるハイブリッドがん相談システムの構築と検証	2,270,000円
16	岡山県	旭川荘総合研究所特別研究部門 研究員　狩谷（かりや）　明美（あけみ）	高齢者の質の高い看取り（QODD）と栄養マネージメントに関する研究：看取りの予測	2,720,000円
17	埼玉県	ケアの倫理・ケア労働研究会 会長　川池（かわいけ）　智子（ともこ）	本邦における保育の『構造の質』に関わる実証的研究 ー縦断的保育士調査の自由記述分析を中心としてー	1,840,000円
18	東京都	国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 リサーチフェロー　川口（かわぐち）　敬之（たかゆき）	精神障害当事者と支援者との共創に基づくリカバリーに向けた共同意思決定実施ガイダンスの開発	1,890,000円
19	岩手県	JUMP 代表　熊谷（くまがい）　章子（あきこ）	外国人災害死に対応する者たちのためのメンタル訓練用バーチャル教材制作	1,280,000円
20	東京都	特定非営利活動法人日本医療政策機構 代表理事　乗竹（のりたけ）　亮治（りょうじ）	認知症の本人や家族の想いを踏まえた地方自治体認知症施策推進計画の策定に向けた議論および手引きの作成	6,380,000円
21	京都府	社会福祉法人全国手話研修センター 理事長　黒﨑（くろさき）　信幸（のぶゆき）	デフリンピックに関する資料・映像の収集、保存、展示、普及のためのプロジェクト	4,320,000円
22	京都府	京都大学大学院医学研究科 特定講師　河野（こうの）　文子（あやこ）	日本でベトナム人技能実習生が直面する就労経験と身体的健康およびメンタルヘルスの問題解決に向けた研究	1,990,000円
23	山梨県	山梨大学大学院総合研究部 教授　小谷（こたに）　信司（しんじ）	重複肢体不自由者の共生社会の実現に向けた移動支援ロボットとスマートウォッチによる心と身体の状態推定	2,140,000円
24	北海道	北海道小児膠原病の会 代表　さくま　しほこ	小児期から膠原病をもつ子の「就労」について考える	730,000円
25	京都府	立命館大学衣笠総合研究機構生存学研究所 准教授　桜井（さくらい）　啓太（けいた）	沖縄のシングルマザーの貧困と孤立に対する居場所事業の構築と調査研究	2,490,000円
26	熊本県	熊本保健科学大学防災・減災教育支援室 教授　佐々木（ささき）　千穂（ちほ）	重症心身障害児に対するICTを活用したコミュニケーション獲得モデル構築および支援方法開発	3,120,000円
27	京都府	一般社団法人防窮研究所 理事長　白取（しらとり）　耕一郎（こういちろう）	防窮プログラムの確立と効果検証	3,560,000円
28	大阪府	四天王寺大学教育学部 准教授　鈴木（すずき）　浩太（こうた）	注意欠如多動症（ADHD）児に対する自己管理スキルトレーニングの国内導入に向けた研究	720,000円
29	東京都	一般社団法人ドナーリンク・ジャパン 代表理事　仙波（せんば）　由加里（ゆかり）	精子・卵子提供で生まれた人と提供者の心理・社会福祉支援をする専門家養成のためのテキストの開発	1,700,000円

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
30	東京都	特定非営利活動法人東京乾癬の会P-PAT 理事長　添川（そえかわ）　雅之（まさゆき）	乾癬ウィメンズキャラバン	730,000円
31	千葉県	東京理科大学創域理工学部 教授　高嶋（たかしま）　隆太（りゅうた）	介護予防の社会実装に向けたエビデンスと政策評価手法の開発	3,960,000円
32	大阪府	NPO法人Reジョブ大阪 理事長　多田（ただ）　紀子（のりこ）	軽度高次脳機能障害・失語症者の会話能力評価ツール開発	650,000円
33	鳥取県	鳥取大学医学部 助教　中村（なかむら）　裕子（ゆうこ）	医療的ケア児に対する福祉避難所の阻害因子の検討－都市部と過疎地での違いを明らかにする－	760,000円
34	東京都	東京大学先端科学技術研究センター 准教授　並木（なみき）　重宏（しげひろ）	障害学生の実験科目支援に関わるオンライン共用プラットフォームの整備	3,810,000円
35	神奈川県	横浜市総合リハビリテーションセンター 地域リハビリテーション部研究開発課 担当課長　西村（にしむら）　顕（あきら）	進行性疾患に対応した住環境整備評価提案シートの作成とその効果検証	1,730,000円
36	熊本県	熊本大学大学院生命科学研究部 助教　橋野（はしの）　明香（あすか）	Webビデオ会議ツールを用いたCOPD患者の吸入手技と睡眠に関する横断調査研究	1,320,000円
37	岡山県	岡山大学学術研究院医歯薬学域 准教授　長谷井（はせい）　嬢（じょう）	メタバースで全国を繋ぐ －小児・AYA世代希少がん患者のメンタルヘルス向上を目指した新システムの開発－	7,380,000円
38	東京都	一般社団法人COMHCa 代表理事　松本（まつもと）　衣美（えみ）	専門職者と経験専門家が共同運営する所沢市の「経験専門家養成講座」プログラムの他地域への適用支援事業	2,040,000円
39	長野県	信州大学医学部 助教　三代澤（みよさわ）　幸秀（ゆきひで）	シリアスゲームによるNICUからの退院支援教育	2,340,000円
40	兵庫県	甲南大学人間科学研究所 客員研究員　森（もり）　茂起（しげゆき）	児童養護施設における家庭的養育の実現に向けた実践的研究－HOME評価尺度児童養護施設版を用いて	2,140,000円
41	神奈川県	特定非営利活動法人こまちぷらす 理事長　森（もり）　祐美子（ゆみこ）	持続可能な居場所が社会に広がるための当事者・中間支援研究・実践	3,730,000円
42	東京都	東京都健康長寿医療センター研究所福祉と生活ケア研究チーム 研究員　涌井（わくい）　智子（ともこ）	ランダム化比較試験による認知症介護のモニタリング・テーラーメード支援システム評価	3,600,000円
			合 計　42件	110,000,000円

（所属先・職名については2024年９月11日現在）

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉 1 被害者加害者及びその家族を含めた「犯罪によって傷ついた人々」の包括的な支援体制の構築に関する実践研究

特定非営利活動法人 World Open Heart
理事長 阿部　恭子

犯罪報道が伝える被害者加害者像は、両者が完全に対極にある印象を与えるが、その実態は単純ではなく被害者加害者双方に属する人々が存在する。日本の殺人の半数は家族間で発生しており、残された家族は被害者家族であり加害者家族でもある。

本研究は、犯罪被害者等支援法を根拠とした被害者及びその家族へ支援、再犯防止法を根拠とした加害者更生支援が進む中、犯罪加害者家族等、公的な救済の枠組みからこぼれる人々のニーズを把握し、犯罪発生後の包括的・修復的な支援体制の在り方について被害者加害者対話の実践から導くものである。

社会福祉 2 「知的障害のある人の健康測定による未病改善への継続的取り組み」

社会福祉法人かしの木会
理事長 飯田　雅子

日本の高齢化率は30％に届く勢いで、平均寿命は約84歳、健康寿命は約74歳と世界のトップレベルであるが、知的障害者人口に占める65歳以上の知的障害者の割合は15％程度、平均寿命も健常者に比べ10年～20年近く低いと言われている。

要因は様々あるが、知的障害者の平均寿命・健康寿命・QOLを伸ばすことは重要な課題である。しかし、知的障害者への平均寿命・健康寿命を伸ばす取り組みはほとんど聞かない。

骨密度計や体組成計等の身体状況を測定し、音楽療法等の脳波への影響を調査し、それらの結果の分析から未病改善に向けての取り組みを進め、少しでも知的障害のある人の平均寿命・健康寿命の延伸に貢献したい。

社会福祉 3 だれもが一人で出かけられるまちづくりのためのナビゲーションタグ整備と普及展開に向けた実践的研究

特定非営利活動法人アイ・コラボレーション神戸
理事長 板垣　宏明

ナビタグ（ナビゲーションタグ）とは、点字ブロックや壁にシール貼付されたコードを、アプリで読み取って情報提供を行う技術である。開発メーカーは複数あり、日本では2019年頃から実証実験を経て実導入され始め、視覚障害者への認知が広がっている。

点字ブロックは日本で生まれて世界中に普及した。ただ、分岐点でどこに行けば良いか、目的地に辿り着けたのかは分からなかった。

ナビタグはこの問題を解決する。GPSを使用しない画像認識でズレ無く、分岐点や目的地を多言語で案内できる。

2025年の万博開催と連携し、来訪者の移動の容易性や回遊性を高めるツールである「ナビタグ」による移動支援の実証実験を行う。

社会福祉 4 エビデンスに基づくトラウマケア及び心的外傷後ストレス症治療の全国実装

国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター
部長 伊藤　正哉

生命の危機や重症を負う体験、性被害といったトラウマティックな出来事を体験し、心的外傷後ストレス症（PTSD）などの様々な問題を抱える人は少なくない。しかし現状として、エビデンスに基づくトラウマケアやPTSD 治療の社会実装や普及は遅れている。申込者らはこれまでに 認知処理療法（CPT）の有効性と安全性を確認した。本事業では、トラウマケアや PTSD 治療の基礎知識を学べるデジタルプラットフォームを構築 すること、CPT の実技訓練や臨床実践を支援する体制を構築することを目的とする。今後、我が国で研修を継続できるよう、CPT 開発者のリーシック教授らを招へいして専門家訓練者養成研修を行う。

社会福祉 5

聴覚障害のあるアルコール依存症者のグループ検討会

聴覚障害のあるアルコール症者のグループ検討会
代表 稲　淳子

聴覚障害のある人たちの中でのアルコール依存症理解は、まったくと言っていいほど進んでいないとの認識を新たにしている。「飲みすぎるのは意志が弱く、だらしない人だ」というお決まりのレッテルが仲間の中でも貼られ、アルコール問題が顕在化するも、適切な治療・支援につながらない現状にも置かれている。聴覚障害者の支援者、アルコール依存症の支援者の間には大きな溝も存在する。

「聴覚障害者理解」と「アルコール問題理解」を、当事者や支援者が相互に深めあうための啓発事業や、それぞれの立場で理解を共有化するための「Q&A」の作成に取り組み、当事者の発見を通じ、依存症からの回復のための自助グループの立ち上げにつなげる。

社会福祉 6

心理的安全性を担保した児童相談所の子ども参画援助方針策定方法の開発

西南学院大学人間科学部
准教授 栄留　里美

改正児童福祉法で、施設等への措置などの重要な決定における子どもの意見聴取が義務づけられた。現状は事前に子どもの意見が聴取されるに留まり、児童相談所の援助方針策定過程への子どもの参画が想定されていない。そのため、広島県東部こども家庭センターと代表者が協働で援助方針策定過程への子ども参画を実現するため準備を進めてきた。取り組みは権利保障として意味があるが、子どもの意向に沿わない結果になった場合の対応等懸念も生じている。そのため先行する英国に、広島県東部の現場職員と出向き対応策を明らかにする。その後試行実践を行い効果を検証する。心理的安全性が担保された参画方法を現場とともに開発する予定である。

社会福祉 7

在宅要介護高齢者のセルフケア行動継続戦略に関する探索的研究：混合研究法

東京大学大学院医学系研究科
特任講師 エルタイバニ　サメハ

高齢化が進む本邦において、心不全患者がセルフケア行動を維持することは、疾患悪化や不要な入院等を防ぐ手段として極めて重要である。本研究では、在宅療養中の心不全を有する要介護高齢者が、セルフケア行動をどのように維持しているかを明らかにすることを目的とし、心不全患者のセルフケア行動を維持・促進する方法の確立を目指す。対象は心不全の診断がある65 歳以上で、訪問診療を利用している者とした。質問紙（定量的データ）及びインタビュー（質的データ）から要介護高齢者のセルフケア行動の維持に関連する要因を多角的に捉える。本研究は開拓的な研究であり、本邦の社会福祉の向上に資することが期待できる。

社会福祉 8

高齢者向け住宅居住者の生活ならびにサービスの国際比較
―日本、シンガポール、台湾の国際共同研究―

順天堂大学医療看護学部
助教 王　迪

アジア諸国において高齢化が進んでおり、高齢者向け住宅が注目されている。日本では高齢者向け住宅は環境や入居者に提供されるサービスの内容などにおいて、多様なものが存在しており、その実態の評価は明らかになっていない。シンガポールや台湾では高齢者向け住宅は導入されて日が浅く、そのサービスの評価も十分にされていない。そこで、シンガポール、台湾、日本の高齢者向け住宅入居者の健康状態、生活、サービスの実態を把握し、ドナベディアン・モデルの視点から介護サービスの質と効果を三国間で比較し、各国に適した高齢者向け住宅入居者のQOLの維持・向上に向けたケアモデルを検討する。

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉 9 フォニックス指導法を活用した聴覚障害児童生徒のための英語読み書き学習支援システムの開発と実践

三重大学教育学部
特任教授 大野　恵理

本調査研究では、聴覚障害のある児童・生徒のうち、通常学級（インクルーシブ）で学ぶ児童・生徒の英語の読み書きを支援する学習システムの開発と実践を２年計画で行う。従来のルビを暗記する学習法ではなく、英語の読み書きの基本である「フォニック」のルールを活用して、英単語の読み（発音）書き（スペル）を習得する方法とする。本研究では、Google Slideを活用して1500の発信語彙について教材スライドを作成し、若干名の聴覚障害のある児童・生徒を対象にスライドを活用して学習支援を実践。児童・生徒、指導者等にインタビュー等の調査を行い本システムの検証を行い、改善する。

社会福祉 10 わが国の実態に配慮をした意思決定支援のフレームワークの構築と実装に関する検討

国立がん研究センター東病院精神腫瘍科
科長 小川　朝生

わが国においても障害者権利条約を受けて、意思決定支援の普及が求められている。しかし、ガイドラインの作成は進む一方で、意思決定支援の質を担保する体制に関してはほとんど議論されていない。

本調査研究は、障害者権利条約の批准を受けて進められている意思決定支援をわが国において実装するために、意思決定を実践するためのフレームワークを関連領域の専門家のコンセンサスにて構築し、体制整備と実装の方法を手引きとして公開することを目的としている。フレームワークが明らかになることで、支援の質を確保するための体制を提言することが可能となる。

社会福祉 11 院内虐待対応組織（Child Protection Team: CPT）の地域連携機能強化に向けたアセスメントに関する研究

国立成育医療研究センター政策科学研究部
政策開発研究室長 越智　真奈美

児童虐待の防止は、依然として日本の喫緊の課題であり、様々な取組みが続けられている。その中で、虐待を把握する端緒となる医療機関と市区町村の母子保健や児童福祉関連機関が連携して対策を講じることの重要性が認識されている。こうした連携体制の構築には、医療機関内の対応組織の在り方が焦点の一つだが、現状において係る対応組織の運営は機関ごとに異なり、各地域で実情に即した取組みが展開されているとは言い難い。本研究は、医療機関内における対応組織の設置・運営や地域の関係機関との連携について調査分析を経た上で、客観的に評価する基準方法を確立しようとするものであり、地域における児童虐待防止に係る有効な体制確保への寄与を目指している。

社会福祉 12 認知・身体機能が低下し孤立する認知症ご本人の社会参加のための当事者利用型生成A.I.の研究開発・社会実装

特定非営利活動法人イシュープラスデザイン
代表 筧　裕介

本研究では認知・身体機能が低下し孤立する認知症当事者の社会参加を支援する当事者利用型生成A.I.の研究・構築に取り組む。社会全体で効率化・省力化目的に AI の利活用が急速に進む中、認知・身体機能が低下し孤立する認知症当事者は社会から取り残されつつある。生成 AI が労働やコミュニケーションの障壁を解決し、高齢者の社会的つながりを維持・強化するツールとなる可能性はあるが、残念ながら現時点ではその活用は未想定であり、むしろ助長している。本研究では、認知症支援先進地域である神奈川県大和市を実証実験フィールドにし、認知症ご本人にも参加してもらいながら当事者利用型生成A.I.のモデル構築に取り組む。

社会福祉 13

ダウン症候群におけるアルツハイマー病発症時の社会生活能力低下の特徴解析と病院前認知症診断調査票の開発

京都府立医科大学大学院医学研究科
准教授 笠井　高士

成人期ダウン症研究バイオバンクに登録されている16歳から60歳のDS患者を対象とし、年齢階層別DS者を対象とした比較的小規模な探索研究を行う。SM社会生活能力評価を用い全得点から算出される社会年齢および身辺自立、移動、作業、意志交換、集団参加、自己統制に関連する下位領域別社会年齢を算出し、各対照における１年後の変化を解析対象とする。ADバイオマーカー診断によってDS-AD発症の有無を客観的に判定し、非DS-AD群における社会年齢の特徴、経年的変化、下位領域別社会年齢の特徴を明らかにする。同時にDS-AD群における１年間の社会年齢低下率、低下しやすい社会生活能力領域・具体的な質問内容を確認する。

社会福祉 14

音楽を通じた障がい者理解の当事者意識を育むプログラム構築―ホワイトハンドコーラスの活動から考える―

京都女子大学発達教育学部
教授 ガハプカ　奈美

2014年「障害者権利条約批准」が動き出して10年が経つ。より良い社会を目指してきたが、その目指した社会に近づいただろうか。本研究は、「音楽を通じた障がい者理解の当事者意識を育むプログラム構築―ホワイトハンドコーラスの活動から考える―」と題し、音楽の力を通じて障がい者理解を深める。これにより、自らどこに不便さを感じているかを知ることができ、周囲とその経験の共有ができる。共有することで、互いの立場や意見の違いを理解することができる。音楽を通じて、障がい者と非障がい者が、共感と共有する場を設け、持続可能な社会の実現を目指す相互理解の基盤定着、また、関係性の基礎構築教育支援を検討するものである。

社会福祉 15

インターネットを用いたAIと医療者によるハイブリッドがん相談システムの構築と検証

浜松医科大学医学部附属病院腫瘍センター
副センター長 柄山　正人

本研究では、オンラインがん相談専用webアプリに寄せられた質問に対して、①生成AI、②医療者、および③AIの回答に医療者が追記・修正したハイブリッド回答を作成し、３種類の回答を専門医療者と患者の双方が比較評価し、ハイブリッド回答の有用性を検証することを目的とする。AIによる分野横断的な知識と迅速な回答と、医療者による医療・社会・倫理的な妥当性の担保および患者心理への共感・配慮を兼ね備えた、オンラインのハイブリッドがん相談システムを構築し、実地診療における対面相談だけでは不十分であったがん相談のアンメットニーズの解決と、AIのサポートによる医療者の業務負担の軽減という課題の解決を目指す。

社会福祉 16

高齢者の質の高い看取り（QODD）と栄養マネージメントに関する研究: 看取りの予測

旭川荘総合研究所特別研究部門
研究員 狩谷　明美

高齢者の看取りの時期には、フレイルや栄養障害が進行する。研究者らは、フレイルを客観的・段階的にとらえ、栄養状態の評価から重症化予防ができるよう検討している。本研究では、これまで観察・データ収集した高齢者に加え、滋賀県・大阪府・岡山県・広島県在住の高齢者を新たにリクルートし、合計1,000人の多面的なフレイル関連データの収集を行う。

特に体組成成分のうち(1)下肢の筋力低下と(2)体水分率に着目して、フレイルレベルの段階との紐づけを行う。高齢者の健康状態の評価や看取り予測の手法の確立を目指し、フレイル予防や介護の重度化予防に寄与する基礎研究とする。

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉 17 本邦における保育の『構造の質』に関わる実証的研究―縦断的保育士調査の自由記述分析を中心として―

ケアの倫理・ケア労働研究会
会長 川池　智子

本邦の「保育政策」が「保育の量的整備から質的向上へ」とシフトしたのは近年のことである。この政策転換には「保育の質の向上は子どもの発達のみならず社会の経済発展に欠かせない」というエビデンスを示したOECDの研究と、それを受けた先進諸国の政策動向が影響している。

本研究では、「保育士の労働環境」と「専門職アイデンティティ」が〈保育の質〉の中軸となるという仮説のもと、数万人の保育士の［声：自由記述分析］に［対話：保育ワークショップ］を重ね、従来の「構造の質」の捉え方を問い直すと共に、〈保育の質〉向上のための保育実践のあり方に新たな視座を示す。さらに、研究成果を基に創るコンテンツを保育士・保育学生・地域社会に発信する。

社会福祉 18 精神障害当事者と支援者との共創に基づくリカバリーに向けた共同意思決定実施ガイダンスの開発

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
リサーチフェロー 川口　敬之

精神障害者（当事者）のリカバリーに向けた生活支援の実施にあたり、当事者と支援者間の対等な関係による共同意思決定（shared decision making: SDM）の実装は精神保健福祉の重要課題であるが、いまだなされていないのが現状である。また、当事者の権利擁護や生活の困難さの視点を研究に取り入れようとする国際的な潮流から、当事者による研究への参画が重要である。そのため、本課題は当事者と支援者、研究者の立場性を踏まえた研究体制を構築し、リカバリーに向けたSDM実施上のガイダンスを開発することを目的とする。これにより、精神保健福祉におけるSDMの具体的実践過程の実装および普及啓発を目指す。

社会福祉 19 外国人災害死に対応する者たちのためのメンタル訓練用バーチャル教材制作

JUMP
代表 熊谷　章子

毎年開催される岩手県主催総合防災訓練の項目である「行方不明者相談受理訓練」「遺体引き渡し訓練」で、令和６年度は外国人災害死を想定し、警察、検案医、歯科医師、訓練開催地自治体職員の方々、納棺業者等が連携して、行方不明者相談受理から発見された遺体の身元特定、遺体が引き渡されるまでの一般的な一連の流れが確認できる訓練を実施する。その映像と音声を保存し編集することで、死者や遺族に対応する者たちが実動訓練に参加しなくとも外国人災害死対応を学べるメンタル訓練用バーチャル教材を制作する。最終的には岩手から全国に発信できる災害時の「死」への理想的な対応モデルの構築を目指す。

社会福祉 20 認知症の本人や家族の想いを踏まえた地方自治体認知症施策推進計画の策定に向けた議論および手引きの作成

特定非営利活動法人日本医療政策機構
代表理事 乗竹　亮治

2024年１月１日に共生社会の実現を推進するための認知症基本法（認知症基本法）が施行された。特に認知症基本法では、認知症の本人や家族等の意見を社会づくりや政策形成の場面において取り入れる必要性が明記されている。そのため今後、各自治体ではプロセス面・内容面ともに、地域の状況や当該地域の認知症の本人や家族等の意見を踏まえた計画策定（努力義務）が期待される。本事業ではこうした背景を踏まえ、モデル地域における計画策定を見据えた議論の場の主宰、自治体職員向けのシンポジウム、計画策定に向けた提案および手引き作成をする。本事業を通じて的確な計画策定に向けた自治体間のレベルの底上げ等の効果が期待される。

社会福祉 21

デフリンピックに関する資料・映像の収集、保存、展示、普及のためのプロジェクト

社会福祉法人全国手話研修センター
理事長 黒﨑　信幸

2025年11月にデフアスリートを対象としたデフリンピックが日本で初めて開催される。デフリンピックは100年の歴史がある国際総合スポーツ大会だが、日本における認知度はパラリンピックと比較して極めて低い。そこで本事業では、デフリンピックの資料や記録映像などを活用して「東京2025デフリンピック」の広報だけでなく、同時に聴覚障害者や手話言語に対する啓発も視野に入れて、パネル・映像等による展示会を全国で開催する。デフリンピックの資料や記録映像の収集、展示パネルの作成、展示会の企画等は、国際ろう者スポーツ委員会や全日本ろうあ連盟をはじめとした聴覚障害の関係団体と連絡調整を行いながら取り組みを進める。

社会福祉 22

日本でベトナム人技能実習生が直面する就労経験と身体的健康およびメンタルヘルスの問題解決に向けた研究

京都大学大学院医学研究科
特定講師 河野　文子

日本では少子高齢化に伴う労働力不足を補うため1993年から外国人技能実習制度が導入されている。現在、ベトナムからの技能実習生が最も多く、約50万人が日本で働いている。しかし、彼らが職場で同僚や日本人の知人と交流したり、医療機関の利用などで医療者とかかわる際にどのような経験をしているか、その実態は十分に明らかにされていない。さらに、ニュースではベトナム人が関連する傷害事件や犯罪が報じられ、悪いイメージが先行しがちである。日本社会における外国人との共生のための課題を、当事者の声から明らかにしていく必要がある。このために重要な要素を、ベトナム人技能実習生の心の内に迫るインタビュー研究を通して解明していきたい。

社会福祉 23

重複肢体不自由者の共生社会の実現に向けた移動支援ロボットとスマートウォッチによる心と身体の状態推定

山梨大学大学院総合研究部
教授 小谷　信司

本研究は、これまで14年にわたる特別支援学校での取り組みの集大成であり、先駆的、開拓的な、またモデルとなり得る研究である。

重複肢体不自由者の意思伝達を、視線入力で可能にする機器の開発実績を踏まえ、提案・実装する絶対にぶつからない移動支援ロボットや、スマートウォッチの活用により、より豊かなコミュニケーションが可能になることを目的としている。音声言語で自らの意思を表出することが難しい当事者にとっても、自らの意思が受け止められる経験を通して、その主体性の発揮につながる。

特別支援学校の在学中の取り組みが中心となるが、卒業後の環境整備も視野に入れた研究の展開を計画している。

社会福祉 24

小児期から膠原病をもつ子の「就労」について考える

北海道小児膠原病の会
代表 さくま　しほこ

膠原病の子どもや家族が望ましい働き方、職場に伝えるべきこと、社会制度を知り、学生時代に磨くスキル、社会に出る準備を考えることは大切である。イベントでは患者や保護者が、社会福祉士や働く患者の話を聞き、社会に出る準備として「自分の説明書」を書き、将来を考える時間をもつ。

パネル展では、イベントの内容をパネルにし市民に膠原病への正しい理解の普及を働きかける。市民が膠原病患者の就労・生活・困りごとについて知り、合理的配慮を考える機会を作りたい。

助成金をえて①就労イベントの実施②イベント内容をパネル展にすることによる市民への啓蒙活動③“自分の説明書”の作成④学会での情報発信・共有の４事業を展開する。

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉 25

沖縄のシングルマザーの貧困と孤立に対する居場所事業の構築と調査研究

立命館大学衣笠総合研究機構生存学研究所
准教授 桜井　啓太

沖縄県は全国のなかでも貧困率が高く、特にシングルマザー家庭の貧困は非常に深刻である。本プロジェクトは、①シングルマザーの貧困の調査研究と、②その貧困・社会的孤立の解消を目指す事業による連携・協働型プロジェクトとなる。シングルマザー支援に長年の実績がある「しんぐるまざあず･ふぉーらむ沖縄」とともに、既存の量的調査による分析に加え、当事者への質的インタビューを通じて社会福祉制度の課題や利用状況を明らかにする。また、シングルマザーが安心して参加できる居場所を提供し、交流やメンタルケアを行う実践的な支援活動を展開し、その評価を行う。調査研究と支援事業を有機的に連携させ、沖縄地域における困窮の実態とその解決に向けた具体的な方針を描きたい。

社会福祉 26

重症心身障害児に対するICTを活用したコミュニケーション獲得モデル構築および支援方法開発

熊本保健科学大学防災・減災教育支援室
教授 佐々木　千穂

新生児・周産期医療の高度化によるハイリスク児の生命維持技術の発展を背景に、重度の肢体不自由と知的障害を併せ持つ重症心身障害児は増加傾向にある。当該児らに対するICT機器類を活用した学習支援や社会参加支援は、今後ますます一般的になっていくことが予想される。医療依存度の高い児らにとってコミュニケーションの獲得は、吸引等の要望を伝えるという点で生命維持にも深く関わる。また、児らの自立支援や社会参加において重要なだけでなく、インクルーシブ社会の実現にとって喫緊の課題といえる。本研究では、重症心身障害児に対するICTを活用したコミュニケーション獲得モデルを提唱し、それに応じた支援方法を開発する。

社会福祉 27

防窮プログラムの確立と効果検証

一般社団法人防窮研究所
理事長 白取　耕一郎

現在、社会経済の変容を背景として、幅広い層において生活困窮リスクが高まっている。その上、国民の生活はコロナ・パンデミックのような予測不可能なリスクにさらされている。生活困窮リスクに対しては、生活保護はもとより生活困窮者自立支援制度をはじめとする様々な制度や事業が用意されているものの、実際に生活困窮に直面した場合に、円滑かつ確実にこれらの支援にたどり着ける仕組みが整備されているとは言い難い状況にある。

本研究は、自治体などと連携しながら、独自に開発した支援制度検索アプリ、またそのアプリを活用した教育プログラム「防窮訓練」などからなる防窮プログラムを開発し、効果検証を行い、その成果の普及を図る。

社会福祉 28

注意欠如多動症（ADHD）児に対する自己管理スキルトレーニングの国内導入に向けた研究

四天王寺大学教育学部
准教授 鈴木　浩太

ADHD児に対して、心理社会的支援を行うことが必要である。海外において、心理社会的支援として自己管理スキルトレーニング（OST）の有効性が示されている。しかし、国内においてOSTが普及していない。本研究では、OSTを国内導入し、基本的なプログラムを作成することを目的とする。OSTは米国で開発されたものであるが、本邦と米国の学校の状況は異なっている。質問票を作成することで、国内の状況に合わせた自己管理スキルを明らかにし、評価方法としての活用を目指す。また、ADHD児は、通常の学級に参加しながら、通級における指導を受けることは少なくない。通級における実践を通して、OSTのプログラムを作成する。

社会福祉 29

精子・卵子提供で生まれた人と提供者の心理・社会福祉支援をする専門家養成のためのテキストの開発

一般社団法人ドナーリンク・ジャパン
代表理事　仙波　由加里

日本では提供精子を使う人工授精での出生者が約２万人いると言われている。精子提供は原則匿名で行われてきたため、出生者は提供者や異父母きょうだいを知ることができず、提供者も出生者について知ることができない。当法人は出生者や提供者を支援し、結び付ける（ドナーリンク）活動を行っているが、これには当事者の心理・社会福祉面からの支援やケアが不可欠である。この支援やケアのための専門家育成が必要であり、本事業では、海外のこの分野の専門家を招聘して日本のこの分野に関心を持つ心理士・社会福祉士を対象に講座を開催し、その参加者から出される意見やアイデア等を参考に、日本の当事者支援専門家のためのテキストを作製する。

社会福祉 30

乾癬ウィメンズキャラバン

特定非営利活動法人東京乾癬の会 P-PAT
理事長　添川　雅之

乾癬には尋常性・関節性・難治性があり、近年は皮膚だけでなく血管の炎症等を含めて全身疾患として捉えられている。正しい治療法と共にその見た目から心理的な支援を必要とする疾患である。特に女性においては、思春期・妊娠・出産・閉経とホルモンや日常のフェイズの変化が病状に大きく影響を及ぼすこととなり、子どもへの遺伝も含めて多くの患者が悩みを抱えながら支援を受けにくい状況である。幸い数々の医療機関と専門医に恵まれ、相談医の支援を受けてウィメンズに特化した学習会も開催している当団体が、患者会のない地域に赴き女性ならではの困難を支え、医療情報の共有・地域の共助の活動を醸成するための交流会を開催する。

社会福祉 31

介護予防の社会実装に向けたエビデンスと政策評価手法の開発

東京理科大学創域理工学部
教授　高嶋　隆太

本研究は、ポストコロナ時代の地域包括ケアシステムの構築を目指すべく、運動介入、施設の場所の選定が、どのように介護予防に影響し、健康寿命の延伸へと至るのかについて、経済性指標等のエビデンスを提示し、地域包括ケアへ示唆を与えるような社会・学術の両面に貢献することを目的とする。本研究により高齢者が運動プログラム等の介護予防事業に対して、対面もしくはオンラインのような参加形態を選択することが可能であることを考慮し、運動介入の健康影響のみならず政策に対する選好を把握することが可能となる。本研究の成果は、効果指標等のエビデンスを提供し、自治体の政策決定を支援することによって、社会実装への貢献も期待できる。

社会福祉 32

軽度高次脳機能障害・失語症者の会話能力評価ツール開発

NPO 法人 Re ジョブ大阪
理事長　多田　紀子

2020年から、軽度の失語症・高次脳機能障害が就労に及ぼす困りごとについて、インタビュー調査をしてきた。その結果、疾患名や障害名、職種を問わず、コミュニケーションが課題として挙げられた。

本研究では、社会的場面を想定した「聞く」「話す」について、30名にモニターからデータを収集し、健常といわれる人達と、どこで、どの程度、異なるのか、またはずれるのかについて調べる。データ分析は、量的な分析は研究ソフトを利用し、質的な分析は言語聴覚士が行う。

同じく就労の場面で、コミュニケーションが課題となっている発達障害の人にも応用ができると考えている。本研究の結果をもとに、改善プログラムの開発までつなげたい。

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉 33 医療的ケア児に対する福祉避難所の阻害因子の検討―都市部と過疎地での違いを明らかにする―

鳥取大学医学部
助教 中村　裕子

令和３年度に内閣府は、指定福祉避難所の指定及びその受け入れ対象者の公示、指定福祉避難所への直接の避難の推進、緊急防災・減災事業債等を活用した指定福祉避難所の機能強化を掲げた。しかしながら、福祉避難所の設立運営には課題が多い。直接避難を推進していても、実際に直接避難できる体制を構築できている自治体は少なく、福祉避難所を指定していても発災直後から稼働させることは困難な現状がある。都市部では福祉避難所は機能するが、地域によっては機能していないのではないかと考えた。この仮説を明らかにするために、アンケート調査を行う。アンケート調査をもとに、我々が介入できる部分の検討を行い提言する。

社会福祉 34 障害学生の実験科目支援に関わるオンライン共用プラットフォームの整備

東京大学先端科学技術研究センター
准教授 並木　重宏

障害学生への大学進学において、教室における支援についてはノウハウが確立しつつある一方、実験・実習の場面での支援は遅れている。理工系への進学を希望しているにもかかわらず、実験のバリアの存在によって進路を変更する学生は少なくない。本研究では、理工系分野での合理的配慮の手配に対し、場所や組織を問わずに利用できる共通のリソース「実験支援ツール」を整備することを目指し、その実現可能性を検証することを目的とする。全国の教育機関で必要となる支援のリソース（人的資源・資金・ノウハウ）を共有することで、障害学生支援に関わる取り組みのスケールメリットを効果的に活用することも意図している。

社会福祉 35 進行性疾患に対応した住環境整備評価提案シートの作成とその効果検証

横浜市総合リハビリテーションセンター
地域リハビリテーション部研究開発課
担当課長 西村　顕

難病患者の住環境は、病状やその経過等、生活の実態が把握しづらい状況下で先行研究は極めて少なく、特に進行性疾患の変化に対応したタイムリーな支援や考え方等の知見は不十分である。横浜市総合リハビリテーションセンターでは、1987年より障害児者を住環境整備の側面から支援してきた。2022年度の新規相談件数は1,174件であり、この相談件数は全国的にも類のない規模である。また疾患別でもっとも多いのは神経難病患者（33%）であり、ニーズの多さを実感できる。

本調査研究は当センターの過去の相談記録や熟練職員のヒアリング等から、住環境整備の評価提案シートを作成し、その評価シートの効果検証をおこなう。

社会福祉 36 Webビデオ会議ツールを用いたCOPD患者の吸入手技と睡眠に関する横断調査研究

熊本大学大学院生命科学研究部
助教 橋野　明香

慢性閉塞性肺疾患（Chronic Obstructive Pulmonary Disease; COPD）は、進行性の気流閉塞を引き起こす慢性疾患であり、睡眠の質が低下している傾向にある。主たる治療は気管支拡張薬の吸入療法であるが、高齢者の多いCOPD患者では半数以上が手技エラーを生じており、夜間の睡眠の質の低下を招いていると考えられる。

そこで、本研究では、１ヶ月以上継続して吸入薬の治療を行うCOPD患者に対し、自記式質問紙および、ビデオ会議ツールを活用して吸入薬の手技チェックを行い、吸入手技や対象者の睡眠の質（ピッツバーグ睡眠質問紙日本語版；PSQI-J）を含む様々な症状やQOLの現状、吸入薬の教育状況を調査し、吸入教育と吸入手技エラー、睡眠の質に関連があるかを調査する。

社会福祉
37

メタバースで全国を繋ぐ ―小児・AYA世代希少がん患者のメンタルヘルス向上を目指した新システムの開発―

岡山大学学術研究院医歯薬学域
准教授 長谷井　嬢

本研究では、希少がんを患う小児・若年成人（AYA世代）の患者を対象に、メタバース技術を活用した新しい交流システムを開発する。希少がん患者は、治療中に孤独を感じやすく、また心理的・社会的な問題に直面している。そこで、地理的・時間的制約を越えて、患者が仮想空間内で他の患者とつながり、サポートし合うことができるメタバース空間を提供する。この空間では、アバターを通じて匿名で参加できるため、外見の変化や病気の影響を気にせず交流が可能である。さらに、生成AIを用いたメンタルケアシステムも開発する。この取り組みは、希少がん患者のQOLを向上させ、社会的な支援を強化する。

社会福祉
38

専門職者と経験専門家が共同運営する所沢市の「経験専門家養成講座」プログラムの他地域への適用支援事業

一般社団法人 COMHCa
代表理事 松本　衣美

「経験専門家」は、慢性疾患や障がいをもつ当事者それぞれの「経験」に対する敬意を込めた呼び名であるが、日本ではあまり知られていない。自分の経験について語るためのトレーニングを受けた経験専門家は当事者、家族、一般市民に向けて講演をしたり、専門職者や行政の会議等で自分自身の経験に裏打ちされた意見、考えを述べる活動を行う。日本では埼玉県所沢市において、市の事業として2021年から精神障がいを持つ人を対象とした経験専門家養成講座を開講している。現在では、複数の修了者が経験専門家としての発信を行っている。本事業は、本講座の他地域適用を支援し、「経験専門家」という呼び名と経験専門家の活動の普及を目指している。

社会福祉
39

シリアスゲームによるNICUからの退院支援教育

信州大学医学部
助教 三代澤　幸秀

新生児医療の進歩を背景に、人工呼吸器や胃瘻などの医療的ケアを必要とする医療的ケア児が増加し、NICUからの退院支援における多職種連携の重要性が高まっています。本研究では、家族や支援者が退院後の在宅医療に移行する過程を疑似体験できるシリアスゲームを開発します。ゲーム内では、NICUでの医療的ケアの習得や退院指導、療育手帳の取得、訪問看護の利用などを学び、選択肢によるインタラクティブなシナリオを通して、現実に即した支援方法を学べる教育ツールを提供します。これにより、支援者が退院後の生活を具体的に理解し、適切な支援を提供できるようになることを目指します。

社会福祉
40

児童養護施設における家庭的養育の実現に向けた実践的研究―HOME評価尺度児童養護施設版を用いて

甲南大学人間科学研究所
客員研究員 森　茂起

児童福祉施設における「家庭的養育」の実現が課題となっている。進められている小規模化等の環境整備とともに、日々の養育実践における「家庭的」なあり方の検討がさらに必要である。本事業・研究では、子どもと養育者へのインタビューと生活環境観察によって家庭の子育ち環境を評価する技法、HOME（Home Observation for Measurement of the Environment）の施設版を用い、神戸市の児童福祉施設間の相互訪問によって環境評価の実践を行う。結果のフィードバックおよび評価の検証によって、子ども一人ひとりの子育ち環境の向上、職員研修、施設間交流の実践展開および効果検証を行う。HOME施設版を、普及、定着の段階に進め、子育ち環境とケアの質向上に繋げることを目指す。

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉 41

持続可能な居場所が社会に広がるための当事者・中間支援研究・実践

特定非営利活動法人こまちぷらす
理事長 森　祐美子

社会の変容に伴い、孤独・孤立の深刻化が新たな社会問題として注目され、孤独・孤立から脱却するための支援等の取組が、官民を挙げて進められるようになってきている。その中で、孤独・孤立の解消方策のひとつとしていわゆる「居場所づくり」があり、現在、様々な主体によって様々な地域で居場所が立ち上げられている。一方で、居場所の立ち上げや運営に関して適切なサポートが確立しているという状況にはない。こうした中、本調査研究は、カフェ型居場所の実例調査を行い、立ち上げから運営の定着、官民ネットワークの形成などについて課題や必要な支援策を整理し、持続可能で自立した居場所の普及に寄与する。

社会福祉 42

ランダム化比較試験による認知症介護のモニタリング・テーラーメード支援システム評価

東京都健康長寿医療センター研究所福祉と生活ケア研究チーム
研究員 涌井　智子

本研究は、認知症介護の現場で生じる様々な周辺症状の発症を予測し、それを家族介護者に提示することで、ケアの質の向上と介護者の負担経験を目指す調査研究である。申請者らが既に開発したCARE-VIPプログラムを基盤に、認知症の周辺症状を機械学習を用いて予測するシステムをさらに発展させ、認知症ケアの質の改善を目指すものである。本プログラムの介入効果をランダム化比較試験（RCT）によって検証するとともに、社会実装が可能な支援策としての実現可能性（Feasibility）を評価し、新たな認知症ケアの可能性を拓くことを目的としている。

第6回（2024年度）三菱財団文化財保存修復事業助成先一覧

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
1	北海道	小樽市総合博物館 館長　石川（いしかわ）　直章（なおあき）	小樽市総合博物館蔵　鍬形 補修整備事業	690,000円
2	京都府	平等寺 代表役員　大釜（おおがま）　諦順（たいじゅん）	絹本着色薬師十二神将像保存 修理事業	5,000,000円
3	兵庫県	賀茂神社 代表役員　岡（おか）　研作（けんさく）	室津賀茂神社宋風獅子修復事業	1,990,000円
4	茨城県	茨城県近代美術館 館長　荒屋鋪（あらやしき）　透（とおる）	小川芋銭「江村六月、雲巒烟水」 修復事業	2,700,000円
5	千葉県	川村（かわむら）　研一（けんいち）	「木造毘沙門天立像邪鬼」保存 修復事業	1,500,000円
6	青森県	弘前市立博物館 館長　熊谷（くまがい）　義昭（よしあき）	紙本著色天海僧正像修復事業	3,170,000円
7	群馬県	公益財団法人竹久夢二伊香保記念館 理事長　木暮（こぐれ）　香峰子（かねこ）	竹久夢二筆「黒船屋」修復事業	1,240,000円
8	北海道	長万部町教育委員会 教育長　近藤（こんどう）　英隆（ひでたか）	「長万部見取絵図」保存修復事業	2,630,000円
9	東京都	公益財団法人五島美術館 理事長　巴（ともえ）　政雄（まさお）	「小倉色紙　伝 藤原定家筆」 修理事業	3,940,000円
10	神奈川県	本誓寺 代表役員　成田（なりた）　昌弥（まさみ）	本誓寺阿弥陀如来立像保存修理 事業	1,790,000円
11	高知県	絵金蔵運営委員会 会長　浜田（はまだ）　義隆（よしたか）	紙本墨画淡彩　高砂図屏風 （林洞意筆）六曲一隻 保存修復事業	2,000,000円
12	京都府	宗教法人天長寺 代表役員　三浦（みうら）　敬志（たかし）	絹本著色十一面観音像ほか2幅 保存修理事業	5,000,000円
13	神奈川県	神奈川県立近代美術館 館長　長門（ながと）　佐季（さき）	紙本墨画 俵屋宗達筆《狗子図》 保存修復事業	1,350,000円
14	福岡県	宗教法人戒壇院 住職　森﨑（もりさき）　裕道（ゆうどう）	木造鑑真和上坐像修理事業	1,870,000円
			合 計　14件	34,870,000円

（所属先・職名については2024年9月11日現在）

文化財保存修復事業助成概要

文化財 1

小樽市総合博物館蔵　鍬形補修整備事業

小樽市総合博物館

館長　石川　直章

「鍬形」とは16世紀から19世紀にかけてアイヌ民族が使用した、金属製の呪術具である。近世アイヌ社会では強大な力をもつ道具とみなされ、家屋内に収納することができず、集落からも離れた地点に収納、もしくは埋納された。そのため、伝世により採集されることはほとんどなく、国内の現存資料数は20点に満たず、公開できる形状の資料は９例のみである。

当資料は二本の角と円形の基部からできており、長さ43cm、幅25cm。上記の理由により、調査や展示など借用依頼が多い資料である。

今回三菱財団のご助力により修復を実施し、当館での展示、普及活動に活用するとともに、全国での公開展示、調査などにも貸出しが可能となる。

文化財 2

絹本着色薬師十二神将像保存修理事業

平等寺

代表役員　大釜　諦順

本図は、中幅に十一面観音と文殊菩薩を脇侍とする薬師三尊で、他に例を見ない。特に十一面観音が白鹿に騎乗するというのは図像儀軌類にも依拠せず、独特な信仰背景を持つものと考えられる。本図は裏書によれば土佐光茂筆とされるが、手堅い技術により平明な室町期仏画の特徴をよく示す作品で、光茂作品の可能性が高いと考えられ、今後の調査研究が待たれるところである。

現状は経年劣化が進み取扱いに注意が必要な状況となっており本堂内に祀ることが困難となっている。修復後は宗教行事の本尊としてお祀りするのみならず、公開展示や調査の機会を設け、美術史の研究、薬師信仰の研究など学術面での研究にも広く貢献して行きたい。

文化財 3

室津賀茂神社宋風獅子修復事業

賀茂神社

代表役員　岡　研作

室津賀茂神社宋風獅子とは、中世に中国で製作され日本にもたらされた石造獅子像の総称である。現在、西日本を中心に19例が知られており、兵庫県下では唯一のものと思われる。

賀茂神社所蔵宋風獅子は南宋末～明初までの三躯。①玉取獅子（全高44.7cm）と②の子持獅子（全高30.0cm）は、元代末～明代初頭、③玉取獅子（全高12.0cm）が、南宋代末～元代初頭と推測されている。

賀茂神社の神庫内にて保管されていたところ、近年再調査し、井形進氏（九州歴史資料館）の調査において中国伝来の宋風獅子と判明した。公開･活用及び指定に向けて（公財）元興寺文化財研究所にて保存修復を行う。

文化財 4

小川芋銭「江村六月、雲巒烟水」修復事業

茨城県近代美術館

館長　荒屋鋪　透

本作は、明治から昭和期にかけて活躍した日本画家・小川芋銭が最晩年に手がけた代表作の一つである。芋銭は、本作において、茨城の筑波山や常陸国にかつて存在した湖を取り合わせ、自身の夢の中に出てきた想像の湖を重ねて描いている。こうした空想と現実の融合は、中国や日本の古典等から様々な知識をたくわえながら、河童伝説の残る牛久沼の地で自然を見つめ続けた芋銭の真骨頂だといえる。

しかし、画面に浮き、亀裂、汚れなどが多く発生しており、このまま放置すればさらに劣化が進行する恐れがある。早急に修復を施すことで、展示公開および調査研究を長きにわたって行うことを可能とし、今後も広く文化に貢献する役割が期待される。

文化財 5

「木造毘沙門天立像邪鬼」保存修復事業

川村　研一

本像は、2022年度助成により修復した毘沙門天立像本体の台座にあたる邪鬼である。南部町斗賀霊現堂には本像を含め、鎌倉時代に製作された仏像、神像が多数所蔵されており、いずれも北東北の信仰史を考えるうえで重要な資料として評価されている。邪鬼は本来、毘沙門天立像の台座となる部分であるが、腐朽と虫損の進行が著しく保存状態が劣悪だったため、本体と分離して保管されてきた。しかし、当初の形態を維持しており、本来の像容を窺い知ることができる。修復は現状維持を原則とし、像本来の姿が損なわれないよう実施する。南部町では博物館施設の整備を進めており、先に修復を完了した毘沙門天立像の本体と一緒に展示される予定である。

文化財 6

紙本著色天海僧正像修復事業

弘前市立博物館
館長　熊谷　義昭

本像は、江戸時代初期に幕府の宗教政策に深く関与した天台宗の僧侶、天海大僧正の肖像画である。作者は弘前藩九代藩主津軽寧親に重用された天台宗薬王院十三代住職の覚範であり、自筆の箱書きから文政５年（1822）に寧親より賛を得たとわかる。弘前藩では二代藩主信枚が天海に帰依し密接な関係を築いたという経緯もあり、藩主と天台宗との強い関わりを示す本像は、弘前藩政史及び東北の宗教史において極めて重要な資料である。

現状は、本紙全体の折り皺や断裂が甚だしく表装も損傷が散見され、展示や調査研究に耐えることができない。修復によって、本像の価値を広く周知することが可能となり、学術振興に貢献できると考える。

文化財 7

竹久夢二筆「黒船屋」修復事業

公益財団法人竹久夢二伊香保記念館
理事長　木暮　香峰子

本作は表具師・飯島勝次郎氏が表装の展覧会に出品するための作品として、竹久夢二に依頼し制作されたもので、表装は飯島氏自身の手による。飯島氏の書簡から1919年作と考えられ、描かれた女性は自叙伝『出帆』から推察するに最愛の人・彦乃であろう。竹久夢二（1884～1934）は大正ロマンを代表する画家として知られ、「黒船屋」はその代表作として高く評価されている。

本作は制作から100年以上が経過し、本紙の横折れ、ゆがみ、表装裂の裂け、金箔の剥離が見られる。今回の修復が国内外の方に竹久夢二を知っていただく機会となり、明治・大正・昭和初期に活躍した夢二の美術的価値を改めて考える契機になることを期待する。

文化財 8

「長万部見取絵図」保存修復事業

長万部町教育委員会
教育長　近藤　英隆

本図は、明治23年に長万部戸長に任じられた川上十郎が作成した長万部村域の絵図で、先住民族アイヌの人びとのコタンをはじめ、移住者の集落、家屋等が詳細に描かれ、余白部分には各地域の実見に基づく記録が細かく記述されている。

北海道のいわゆる開拓事業が進む明治30年前後の状況が仔細に記録されていること、また作成者・川上十郎は他にも明治維新前後の戊辰戦争などの記録や明治期の長万部をはじめ北海道各地に関する記録を残していることから、本図の保存・修復は長万部にとっては勿論のこと、近代北海道史の研究や幕末～明治の庄内藩史、日本史にとってたいへん貴重な資料が新たに提供され、学術研究の振興に資するものになると期待される。

文化財保存修復事業助成概要

文化財 9

「小倉色紙　伝 藤原定家筆」修理事業

公益財団法人五島美術館
理事長　巴　政雄

本作は、藤原定家（1162～1241）が古今の歌人の和歌百首をそれぞれ色紙1枚に書いたと伝わる「小倉色紙」の一つ。その中でも、定家自筆の巻子本の断簡を継いだ一連の料紙の紙背に書かれたもので、晩年の藤原定家が子息為家の岳父蓮生（宇都宮頼綱）の懇望によって書いた「嵯峨中院色紙形」の草稿である可能性が高い重要な作品である。

現状は、本紙及び台紙に経年使用による大小多数の縦横の折れや亀裂、擦れ、糊浮きがみられ、また表装の総裏紙の本紙部分をふくむ全体に糊離れによる浮きが顕著で、表具形式の維持そのものに危険を及ぼしている。本作の修理により、書道史・歌道史・茶道史の研究に更なる貢献ができるものと考える。

文化財 10

本誓寺阿弥陀如来立像保存修理事業

本誓寺
代表役員　成田　昌弥

本像は、神奈川県指定重要文化財に指定されている、足裏に仏足文や木芯に銅線を巻き付けて螺髪にする特殊な阿弥陀如来像の代表的な作例のひとつです。外面からも瞼の二重、左足を僅かに浮かせて来迎の姿を現している等の特異さが伺えます。所々に切金文様を確認することができ、修理により、金泥塗りや切金が鮮明に残る姿になると考えられます。さらに、修理時に造像銘記等の発見も期待できます。本像の彫刻の技術が優れている点から、造像した仏師は、中央で活躍した仏師と想定され、像内に造像銘記等を残している可能性も高いと見込まれます。修理後には、神奈川県立歴史博物館等で公開を予定しております。

文化財 11

紙本墨画淡彩　高砂図屏風（林洞意筆）六曲一隻保存修復事業

絵金蔵運営委員会
会長　浜田　義隆

「六曲一隻屏風　高砂図」から視る絵金について

本屏風の右端、第1扇下部には「洞意筆」の落款がある数少ない資料となる（洞意とは絵師・金蔵、通称絵金（1812～76）が、江戸の駿河台狩野家で絵を学んだ頃に授かった号である）。絵金の作品としては初めて見いだされた六曲一隻屏風で、かつ高砂図を描いた作品としてもその美術的価値が注目される。

現在は画面、表装とも損傷が進んでおり、詳細に調査研究することが難しい状態である。また制作されてから一度も修復がなされていない「うぶ」の作品であると見られ、表装の形態や歴史的変遷を考える上でも本作品を修復し、調査研究することによって得られる情報は貴重であることが推測される。

文化財 12

絹本著色十一面観音像ほか2幅保存修理事業

宗教法人天長寺
代表役員　三浦　敬志

左手に蓮華、右手で錫杖を打つ姿の「長谷寺式十一面観音像」は古より霊験豊かで貴賤の信仰を集めてきた。上記像の佛画においては奈良国立博物館本（鎌倉時代作）が最も古く、天長寺に蔵する佛画は製作時期は室町時代となるが奈良国立博物館本同様に光背に煩瑣なほどに植物文を表し、周縁に十一面観音の種子（梵字）を繞らすことで長谷寺本尊像の原初の姿を示唆している。しかし残念であるが現在は褪色甚だしく顔容が不分明となっているため早急な修復が望まれる。本作が修復される事により新たな発見、気づきが見つかるよう期待していると共にまたこれから次の時代の人へと本作が残るよう願いたい。

文化財 13

紙本墨画 俵屋宗達筆《狗子図》保存修復事業

神奈川県立近代美術館
館長 長門　佐季

本作は江戸時代初期に活躍した画家俵屋宗達（生没年不詳）による子犬の水墨画である。日本画家木下翔逅（1926 ～ 1998）旧蔵の美術作品の一つで、2005年にご遺族から神奈川県立近代美術館へ寄贈された。これまでに修復処置が施された形跡はなく、宗達特有の墨の微妙な階調をもつたらしこみが子犬の様子を繊細かつ生き生きと伝える、美術史的に価値の高い作品と評価されている。受贈時より本紙に多数の横折れ、墨の剥落といった損傷が見られ、これらが経年により進行している。宗達の絵画は近代の画家たちにも多大な影響を与えており、本作を修復、展示公開し、近現代美術史の文脈において検証し直すことは、美術史研究の上で重要である。

文化財 14

木造鑑真和上坐像修理事業

宗教法人戒壇院
住職 森﨑　裕道

本像が伝来する太宰府市の戒壇院は、奈良時代に日本の三戒壇の一つとして西国に設立、江戸時代の元禄年間に復興され、観世音寺から独立したのが現戒壇院である。本像は唐招提寺の根本像の模刻像であり、宝永２年（1705）に造立されたことが知られるが、戒壇院復興の一環として造立された可能性が高いといえる。また、本像の坐す礼盤や背障も造立当初のものが伝わる点も貴重であり、東大寺の像よりも早い時期に造立された点も注目される。本像は西国における戒律復興の様相を知る上でも、歴史的な価値は高いといえる。現状は本体、礼盤、背障ともに彩色の剝落や浮きが著しく、早急に修理を施して適切に保管管理が必要である。

三菱財団社会福祉特別助成〈三菱財団 × 中央共同募金会　共同助成〉
～赤い羽根　ポスト・コロナ（新型感染症）社会に向けた福祉活動応援キャンペーン ～
「外国にルーツがある人々への支援活動応援助成（第５回）」
助成先一覧

① 生活等支援プログラム

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
1	神奈川県	ArtLabOva 代表　鈴木　敬之	海外につながるこどもと家族のための居場所と相談支援事業	2,530,000円
2	福島県	特定非営利活動法人　福島就労支援センター 理事長　小野　康平	福島県内の外国人が就労問題の相談ができる相談窓口の開設	2,200,000円
3	大阪府	特定非営利活動法人 関西国際交流団体協議会 理事長　三木　秀夫	外国にルーツがあるこどもたちの社会問題を解決するためのこどもプラザ事業	1,050,000円
4	東京都	特定非営利活動法人 豊島子どもWAKUWAKUネットワーク 理事長　栗林　知絵子	WAKUWAKU×ルーツ； 外国にルーツを持つ子ども・若者のための居場所事業	650,000円
5	福島県	一般社団法人SJW 代表理事　Dhananji Fernando	「双葉郡・いわき市で暮らす外国にルーツを持つ子どものための継続した支援事業：フリースクール、居場所・食事提供」	3,000,000円
6	福島県	公益財団法人　福島県国際交流協会 理事長　小沢　喜仁	外国にルーツがある子どもの学校への早期適応のための支援事業	3,000,000円
7	大阪府	特定非営利活動法人　Deep People 理事長　牧　文彦	大阪市浪速区の外国にルーツのある子どもたちのためのオンラインツールを活用した居場所作り支援及び学習支援事業	2,600,000円
8	愛知県	特定非営利活動法人　名古屋難民支援室 代表理事　名嶋　聰郎 川口　直也	東海地域に暮らす難民同士のピアサポートおよび法的支援事業	3,000,000円
9	兵庫県	特定非営利活動法人 アジア女性自立プロジェクト 代表理事　奈良　雅美	地域に暮らす外国にルーツがある女性のための相談・情報発信事業	2,150,000円
10	神奈川県	特定非営利活動法人 カラバオの会 代表理事　八重樫　宣仁	横浜市伊勢佐木町を中心としたタイ人コミュニティの生活支援事業	720,000円
11	東京都	特定非営利活動法人　MAIKEN 理事長　三浦　左千夫	ラテンアメリカにルーツがある在日住民のための無料の医療相談会を通じて、身体とこころの健康管理の必要性と公衆衛生知識の普及を図り、生活習慣病を予防し心身共に生活の質を高めるための支援事業	1,820,000円
12	香川県	香川まるがめ子どもにほんごひろば 会長　安藤州　一	外国人散在地域において、地域の社会資源との連携を強化し、子ども・若者の未来を拓く地域共生支援プログラム	2,640,000円

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
13	東京都	特定非営利活動法人　メタノイア 代表理事　山田　拓路	クルド人の子どもと地域社会が共に学びつながるための日本語教室事業	3,000,000円
14	山口県	青年海外協力隊山口県OB会 会長　山尾　和宏	散在地域に住む外国ルーツの子どものための日本語支援の空白をうめる支援事業	1,600,000円
15	兵庫県	特定非営利活動法人 場とつながりの研究センター 理事長　長谷川　計二	在留外国人の健康と困りごとの把握と構築した「つながり」から継続的な相談活動事業	3,000,000円
16	兵庫県	特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター（KFC） 理事長　金　宣吉	誰も取り残さずに、緊急性の高い就労・居住支援を実現するための体制構築事業	2,970,000円
17	東京都	特定非営利活動法人 アジア人文文化交流促進協会 理事長　石川　憲彦	OFP＆スポットOFPで外国人住民の生活課題を解決して、安定的な社会的に絆を築き、日本社会になじみやすくなるための総合生活支援	2,930,000円
18	大阪府	特定非営利活動法人 介護保険市民オンブズマン機構大阪 代表理事　三木　秀夫	介護現場で働く外国人介護職員を支援するための研修及び社会発信事業	2,360,000円
19	東京都	特定非営利活動法人 日本在住ベトナム人協会 代表理事　竹内　勇	ベトナム人労働者のための相談窓口	3,000,000円
20	愛知県	特定非営利活動法人　希望の光 代表理事　山家　ヤスエ	外国ルーツの子どもたちの母語に基づいた包括的教育サポート事業	3,000,000円
21	兵庫県	特定非営利活動法人 NGO神戸外国人救援ネット 理事長　飛田　雄一	窮迫する外国人への総合的な生活支援事業	3,000,000円
22	東京都	特定非営利活動法人 HATI JAPAN 多文化多言語の子ども発達支援 代表理事　東谷　知佐子	中野区鷺宮地域に外国ルーツの人や子ども、保護者の「居場所」を作り、多様なニーズのある人々が暮らしやすい地域のためのネットワーク構築を目指す事業	3,000,000円
23	愛知県	特定非営利活動法人　ABT豊橋ブラジル協会 代表理事　鈴木　秀子	ポルトガル語およびスペイン語圏の人のための夢の実現に向けた初期日本語学習支援と、外国にルーツのある子どもたちのための居場所づくり事業	2,960,000円
24	愛知県	特定非営利活動法人　アイキャン 代表理事　鈴木　真帆	岐阜県美濃加茂市の外国にルーツがある人々への課題提起型の日本語学習拠点の整備・運営事業	3,000,000円
25	東京都	VILLA EDUCATION CENTER 東京女子大学教授　松尾　慎	困難な状況を生きる在日ミャンマー人の人生をサポートするための日本語学習支援・教科学習支援・生活サポート相談事業	2,980,000円
26	兵庫県	インターナショナルセワソサエティー 代表　LAMA GOLE PRITAM	外国にルーツがある児童生徒の居場所作りと学習支援・母文化母語保持教室事業	2,090,000円
27	兵庫県	特定非営利活動法人 にほんご豊岡あいうえお 理事長　植村　健二	日本語教室からはじまる多文化共生　外国人市民と地域をつなぐ ～あいうえお子育てカフェ～	1,860,000円

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
28	熊本県	特定非営利活動法人 外国から来た子ども支援ネットくまもと 理事長　竹村　朋子	熊本県内に在住する外国ルーツの子どもたちのための支援事業	3,000,000円
			プログラム①　小計　28件	69,110,000円

② 共生促進プログラム

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
29	愛知県	特定非営利活動法人　Nagoya Ryugakusei Net 理事長　松浦　好治	Covid-19後において、名古屋地区に留学する大学院生や若手研究者が効果的・組織的に日本社会の実像を理解し、専門家・地域の人々・日本人学生と交流する一方、研究活動を通じて日本での広がりのある留学体験	1,000,000円
30	三重県	特定非営利活動法人　愛伝舎 理事長　坂本　久海子	四日市市河原田地区連合自治会と在住外国人のための多文化共生交流事業	950,000円
31	秋田県	Pour Bébé 代表　作左部　紀子	妊娠中や乳幼児を子育て中の家族のための、やさしい日本語と外国語による子育て支援事業	310,000円
			プログラム②　小計　3件	2,260,000円

③ 中間支援・ネットワーク支援

番号	所在地	名　称	使　途	金　額
32	愛知県	特定非営利活動法人　シェイクハンズ 代表理事　松本　里美	尾張北部、市町を超えた外国人・子ども支援団体のネットワークの拡大と強化	1,400,000円
33	愛知県	特定非営利活動法人 多文化共生リソースセンター東海 代表理事　土井　佳彦	愛知県における外国人コミュニティの活動継続展開及びネットワーク構築のための支援事業	2,000,000円
34	東京都	在日韓国人福祉会 会長　金　榮子	外国人高齢者問題の可視化と支援基盤をつくるための事業 ～新宿地域を中心としたネットワーキングを目指して～	2,000,000円
35	愛媛県	特定非営利活動法人　Community　Life 理事長　松本　光司	外国人支援ネットワーク構築と支援団体の育成事業	1,990,000円
36	東京都	特定非営利活動法人　東京英語いのちの電話 理事長　ドミトレンコ･アレクサンダー	外国にルーツを持つ人々のためのメンタルヘルスワークショップ事業（特に中学校、高校、大学のコミュニティ向け）	1,390,000円
			プログラム③　小計　5件	8,780,000円
			総　合　計　36件	80,150,000円

（所属先・職名については2024年10月29日現在）

注）上記特別助成については、一件ごとの概要説明を省略致します。
助成総額の内訳は、当財団拠出分40百万円、中央共同募金会拠出分40,150千円です。

三菱財団のあらまし

設立趣意書

三菱事業の発生は、1870年（明治３年）10月に遡る。この時、創立者岩崎弥太郎が、彼の郷里土佐において海運業の経営に着手した。三菱企業は、近代日本の曙と共に生まれ、爾来日本経済と運命を共にして、幾多の苦難を経ながらも今日に至った。

即ち、今やわが国は、全世界を瞠目させる高度成長を遂げ、本格的国際化時代を迎えて、さらに大きく雄飛せんとしているが、三菱グループもまた、今日の姿を土台として、さらに国民経済の発展のために前進しようとしている。

しかしながら、周知のごとく、このような急速な経済発展の陰において、避け難いひずみとも見られる社会資本の不足があり、また国民生活の向上が、必ずしも国民福祉の向上と共存、均衡していないという問題がある。

更には、精神文化の退潮、自然科学特に基礎科学部門における頭脳流出現象、次代を託すべき青少年教育、発展にとり残された社会階層の存在等々今後克服さるべき問題は少なくない。

これらの不均衡の是正こそ国の政策と相まって、社会的責任ある代表的企業にとっての重大なる責務であり、関心事であるといわねばならない。

三菱グループは、創業以来公益に奉ずることを以て経営の基本理念として来た。たまたま明年秋、創業百周年の記念日を迎えるにあたり、伝統の精神を生かした最も有意義な事業を以ていささか社会に報い、一層の国民経済発展に資するため、関係各社相集い、財団法人三菱財団を設立せんとするものである。

当財団は、わが国社会の学術、教育、文化ならびに福祉の向上に資することを目的として、さしあたっては学術研究の助成、社会福祉に関する事業の助成を主たる事業とし、当初250百万円を以て発足するが、将来はさらに時代に適合した事業をも加え、今後10年間にわたり相当額の寄附を重ねて事業規模ならびに財団基礎を拡大強化せんとするものである。

（設立 昭和44年９月11日）

The Mitsubishi Foundation

Purpose of the Establishment of the Foundation

The formation of the Mitsubishi Group of Enterprises goes back to October, 1870 (the 3rd year of Meiji), when their founder Yatarō Iwasaki started marine transportation business at his native province, Tosa. In other words, the Mitsubishi Group was born at the daybreak of the modern age in Japan. Since then it has shared its fate with Japanese economy overcoming various kinds of trials.

Our country, Japan, has recently made such an astonishingly rapid growth, as has been looked upon by other nations in open-eyed astonishment, and going to take another flying jump in a coming age of more highly internationalized society. The Mitsubishi Group wishes to participate in such future development of national economy, marching forward from the bases so far attained.

As is commonly known, however, only insufficient amount of money has been spent for the welfare of the society—a fact which may appear to be a dark spot hidden behind such a rapid development in economy. We should therefore raise the question of whether the enhancement of standard of living has been followed by the corresponding development in the welfare of the people.

We wish to point out further that there are quite a few problems to be solved, such as decline in moral civilization, so-called "brain effluence" in the field of natural sciences, especially of basic sciences, unsatisfactory conditions in the education of the youth to whom the coming age is to be entrusted, and existence of a large portion of the society left behind the progress of the society.

We believe that to help to correct this imbalance, hand in hand with the measures to be taken by our government, should be a pressing duty and a matter of grave concern of leading enterprises on which rests high social responsibility.

It has been the basic policy for the Mitsubishi Group to serve the public benefit since its foundation. In line with this tradition, the companies forming the Mitsubishi Group jointly decided to establish a foundation to commemorate the 100th anniversary of the birth of the Mitsubishi business in the fall of next year(i.e., 1970), in the hope of making greater contribution to society and to the further development of our national economy.

The said Foundation is aimed at giving assistance to the enhancement of scholarship, education, culture and welfare in our society. The Foundation will start with the initial fund of 250 million yen to be used mainly for giving assistance to academic research, and activities concerned with social welfare. It is expected that the companies belonging to the Mitsubishi Group will make further contribution toward the Foundation in a substantial amount in the ten years to come, and that the Foundation will thereby be able to expand its scope of activities.

(The Mitsubishi Foundation was established on September 11, 1969.)

助成実績推移

（単位：円）

事業年度		自然科学研究助成		人文科学研究助成		社会福祉事業研究助成		文化財保存修復事業助成		その他の諸事業助成		合　計	
		件数	金　額	件数	金　額	件数	金　額	件数	金　額	件数	金　額	件数	金　額
昭和45年度	1970	14	99,156,000			8	45,300,000			7	8,547,000	29	153,003,000
46	1971	16	99,103,400			7	48,036,000			21	12,811,028	44	159,950,428
47	1972	14	100,140,000	4	23,100,000	6	50,165,600			24	11,493,100	48	184,898,700
48	1973	14	109,700,000	5	19,950,000	7	50,000,000			26	12,772,675	52	192,422,675
49	1974	21	200,000,000	5	30,000,000	13	100,000,000			26	15,000,000	65	345,000,000
50	1975	14	110,000,000	4	25,000,000	9	50,000,000			28	15,000,000	55	200,000,000
51	1976	12	110,000,000	6	25,000,000	7	50,000,000			26	15,000,000	51	200,000,000
52	1977	15	110,000,000	8	25,000,000	10	50,000,000			22	13,460,000	55	198,460,000
53	1978	14	110,000,000	6	25,000,000	6	50,000,000			12	10,327,900	38	195,327,900
54	1979	21	200,000,000	7	35,000,000	14	100,000,000			10	8,300,000	52	343,300,000
55	1980	13	110,000,000	7	25,000,000	7	50,000,000			13	14,475,000	40	199,475,000
56	1981	16	150,000,000	11	35,000,000	11	70,000,000			6	5,500,000	44	260,500,000
57	1982	17	150,000,000	11	35,000,000	9	70,000,000			7	6,620,000	44	261,620,000
58	1983	17	150,000,000	12	35,000,000	10	70,000,000			9	9,330,000	48	264,330,000
59	1984	19	150,000,000	14	35,000,000	10	70,000,000			16	14,770,000	59	269,770,000
60	1985	16	150,000,000	13	35,000,000	11	70,000,000			11	12,785,000	51	267,785,000
61	1986	20	150,000,000	15	34,604,000	10	70,000,000			7	7,700,000	52	262,304,000
62	1987	23	170,000,000	15	34,990,000	10	70,000,000			5	2,500,000	53	277,490,000
63	1988	23	170,000,000	16	40,000,000	8	70,000,000			5	4,300,000	52	284,300,000
平成元年度	1989	30	220,000,000	23	45,000,000	12	80,000,000			4	3,000,000	69	348,000,000
2	1990	29	250,000,000	30	50,000,000	11	80,000,000			2	3,000,000	72	383,000,000
3	1991	31	271,000,000	25	55,000,000	11	85,000,000			4	5,000,000	71	416,000,000
4	1992	34	300,000,000	28	55,000,000	12	85,000,000			5	5,200,000	79	445,200,000
5	1993	35	300,000,000	16	55,000,000	11	85,000,000			5	3,500,000	67	443,500,000
6	1994	37	300,000,000	12	55,000,000	12	85,000,000			0	0	61	440,000,000
7	1995	37	300,000,000	11	55,000,000	11	85,000,000			4	3,400,000	63	443,400,000
8	1996	35	300,000,000	12	55,000,000	12	85,000,000			1	1,000,000	60	441,000,000
9	1997	35	300,000,000	9	55,000,000	13	85,000,000			0	0	57	440,000,000
10	1998	36	300,000,000	13	60,000,000	12	80,000,000			3	2,700,000	64	442,700,000
11	1999	40	300,000,000	17	60,000,000	21	90,000,000			1	1,000,000	79	451,000,000
12	2000	44	320,000,000	17	75,000,000	31	110,000,000			13	13,500,000	105	518,500,000
13	2001	40	300,000,000	20	60,000,000	27	90,000,000			7	9,600,000	94	459,600,000
14	2002	43	320,000,000	24	60,000,000	32	90,000,000			5	7,000,000	104	477,000,000
15	2003	43	300,000,000	26	60,000,000	42	90,000,000			3	4,700,000	114	454,700,000
16	2004	44	300,000,000	35	60,000,000	41	90,000,000			7	8,900,000	127	458,900,000
17	2005	47	300,000,000	36	60,000,000	42	90,000,000			5	5,000,000	130	455,000,000
18	2006	49	300,000,000	39	60,000,000	46	90,000,000			8	12,000,000	142	462,000,000
19	2007	49	300,000,000	40	60,000,000	47	90,000,000			7	10,900,000	143	460,900,000
20	2008	51	300,000,000	32	60,000,000	47	90,000,000			3	3,000,000	133	453,000,000
21	2009	51	300,000,000	36	58,500,000	41	90,000,000			3	5,000,000	131	453,500,000
22	2010	52	300,000,000	34	57,900,000	42	90,000,000			3	2,500,000	131	450,400,000
23	2011	46	250,000,000	30	50,000,000	35	70,000,000			0	0	111	370,000,000
24	2012	43	250,000,000	33	47,500,000	35	70,000,000			0	0	111	367,500,000
25	2013	45	250,000,000	34	50,000,000	35	70,000,000			2	1,500,000	116	371,500,000
26	2014	47	250,000,000	34	50,000,000	35	70,000,000			0	0	116	370,000,000
27	2015	50	259,000,000	36	52,000,000	38	74,000,000			2	1,500,000	126	386,500,000
28	2016	50	280,000,000	34	58,000,000	39	82,000,000			3	3,000,000	126	423,000,000
29	2017	50	300,000,000	32	60,000,000	38	90,000,000			2	1,300,000	122	451,300,000
30	2018	50	300,000,000	32	60,000,000	37	90,000,000			1	3,000,000	120	453,000,000
令和元年度	2019	67	352,000,000	47	100,000,000	41	100,000,000			4	8,000,000	159	560,000,000
2	2020	91	810,000,000	44	100,000,000	94	200,000,000			1	3,000,000	230	1,113,000,000
3	2021	61	340,000,000	28	58,700,000	80	130,000,000	11	25,000,000	0	0	180	553,700,000
4	2022	67	365,000,000	31	70,000,000	75	140,000,000	12	30,000,000	3	3,000,000	188	608,000,000
5	2023	66	365,000,000	29	68,900,000	75	140,000,000	11	30,000,000	2	2,000,000	183	605,900,000
6	2024	74	420,000,000	33	85,000,000	78	150,000,000	14	34,870,000	3	3,000,000	202	692,870,000
合　計		2,018	13,870,099,400	1,171	2,699,144,000	1,484	4,614,501,600	48	119,870,000	397	339,891,703	5,118	21,643,506,703

注）人文科学研究助成の実績には、50周年記念特別助成として実施した文化財修復事業助成（令和元年度：9件･20百万円、2年度：8件･20百万円）が含まれています。

役員及び評議員名簿

（2025年6月25日現在、50音順）

役　職	氏　名	常勤・非常勤の別	現　職
理事長	三毛　兼承	非常勤	(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ取締役執行役会長
常務理事	七條　博明	常勤	
理事	泉澤　清次	非常勤	三菱重工業(株)取締役会長
理事	上野谷　加代子	非常勤	日本医療大学教授 同志社大学名誉教授
理事	岡田　清孝	非常勤	京都大学名誉教授 基礎生物学研究所名誉教授
理事	垣内　威彦	非常勤	三菱商事(株)取締役会長
理事	岸本　美緒	非常勤	お茶の水女子大学名誉教授
理事	黒田　玲子	非常勤	中部大学卓越教授 東京大学名誉教授
理事	佐藤　勝彦	非常勤	日本学術振興会学術システム研究センター顧問 東京大学名誉教授
理事	白井　克彦	非常勤	早稲田大学名誉顧問
理事	永井　良三	非常勤	自治医科大学学長
理事	早瀬　昇	非常勤	(福)大阪ボランティア協会理事長
理事	坂東　眞理子	非常勤	昭和女子大学総長
理事	細野　秀雄	非常勤	東京科学大学 元素戦略MDX研究センター 特命教授、栄誉教授
理事	室伏　きみ子	非常勤	お茶の水女子大学名誉教授・前学長
監事	池谷　幹男	非常勤	三菱UFJ信託銀行(株)特別顧問
監事	高岡　英則	非常勤	三菱金曜会事務局長
監事	西川　洋一	非常勤	東京大学名誉教授
監事	松尾　憲治	非常勤	明治安田生命保険(相)名誉顧問
評議員	安西　祐一郎	非常勤	慶應義塾学事顧問・同大学名誉教授 独立行政法人日本学術振興会顧問
評議員	飯野　正子	非常勤	津田塾大学名誉教授
評議員	磯崎　功典	非常勤	キリンホールディングス(株)代表取締役会長CEO
評議員	越智　仁	非常勤	三菱ケミカルグループ(株)シニアエグゼクティブコンサルタント
評議員	樺山　紘一	非常勤	東京大学名誉教授
評議員	岸　輝雄	非常勤	東京大学名誉教授 東京大学先端科学技術研究センターフェロー
評議員	北沢　利文	非常勤	東京海上日動火災保険(株)相談役
評議員	工藤　泰三	非常勤	日本郵船(株)特別顧問
評議員	小林　健	非常勤	三菱商事(株)相談役
評議員	佐々木　丞平	非常勤	京都大学名誉教授 京都国立博物館名誉館長
評議員	杉山　博孝	非常勤	三菱地所(株)特別顧問
評議員	竹内　章	非常勤	三菱マテリアル(株)特別顧問
評議員	佃　和夫	非常勤	三菱重工業(株)元取締役会長
評議員	遠山　敦子	非常勤	(公財)トヨタ財団顧問
評議員	野依　良治	非常勤	名古屋大学特別教授 日本学士院会員
評議員	平野　信行	非常勤	(株)三菱UFJ銀行特別顧問
評議員	堀田　凱樹	非常勤	東京大学名誉教授
評議員	水田　邦雄	非常勤	(福)恩賜財団母子愛育会理事長

選考委員

（2025年4月1日現在）

自然科学関係　11名

委員長	十倉好紀	理化学研究所領域統括 東京大学卓越教授、特別栄誉教授
委　員	幾原雄一	東京大学大学院工学系研究科特別研究教授
委　員	小川誠司	京都大学大学院医学研究科教授
委　員	村田茂穂	東京大学大学院薬学系研究科教授
委　員	澤本和延	名古屋市立大学大学院医学研究科教授 脳神経科学研究所長
委　員	須藤　靖	高知工科大学総合研究所特任教授
委　員	野崎京子	東京大学大学院工学系研究科化学生命工学専攻教授 理化学研究所理事
委　員	東山哲也	東京大学大学院理学系研究科教授
委　員	藤尾圭志	東京大学大学院医学系研究科内科学専攻アレルギー・リウマチ学教授
委　員	村上修一	東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻教授
委　員	本橋ほづみ	東北大学大学院医学研究科医化学分野教授

人文科学関係　5名

委員長	岩波敦子	慶應義塾大学理工学部教授
委　員	粕谷　誠	東京大学大学院経済学研究科教授
委　員	高嶋　航	早稲田大学スポーツ科学学術院教授
委　員	納富信留	東京大学大学院人文社会系研究科教授
委　員	宮路淳子	奈良女子大学研究院人文科学系教授

社会福祉関係　6名

委員長	鈴木俊彦	日本赤十字社副社長
委　員	曽根直樹	日本社会事業大学大学院福祉マネジメント研究科教授
委　員	泉　陽子	東北大学東北メディカル・メガバンク機構教授
委　員	空閑浩人	同志社大学大学院社会学研究科教授
委　員	緒方　徹	東京大学大学院医学系研究科外科学専攻 感覚・運動機能医学講座リハビリテーション医学分野教授
委　員	野尻紀恵	日本福祉大学学長補佐／社会福祉学部教授

文化財保存修復関係　3名

委員長	小松大秀	公益財団法人永青文庫館長 秋田市立千秋美術館館長
委　員	岩佐光晴	成城大学文芸学部教授
委　員	林　　温	慶應義塾大学文学部名誉教授

（敬称略、就任順）

2024年度　決算報告書

貸借対照表

2025年3月31日現在

（単位：円）

科　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ 資産の部			
1. 流動資産	432,627,907	406,511,620	26,116,287
2. 固定資産	35,489,567,752	35,552,524,786	△ 62,957,034
(1) 基本財産	29,554,650,563	30,028,345,233	△ 473,694,670
(2) 特定資産	5,923,574,591	5,514,903,759	408,670,832
(3) その他固定資産	11,342,598	9,275,794	2,066,804
資産合計	35,922,195,659	35,959,036,406	△ 36,840,747
Ⅱ 負債の部			
1. 流動負債	221,911,663	222,417,444	△ 505,781
2. 固定負債	16,912,000	14,292,000	2,620,000
負債合計	238,823,663	236,709,444	2,114,219
Ⅲ 正味財産の部			
1. 指定正味財産	9,473,041,000	9,832,725,000	△ 359,684,000
2. 一般正味財産	26,210,330,996	25,889,601,962	320,729,034
正味財産合計	35,683,371,996	35,722,326,962	△ 38,954,966
負債及び正味財産合計	35,922,195,659	35,959,036,406	△ 36,840,747

正味財産増減計算書

2024年4月1日から2025年3月31日まで

（単位：円）

科　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
①基本財産運用益	696,191,648	637,756,879	58,434,769
②特定資産運用益	142,611,881	125,043,961	17,567,920
③運用財産運用益	251,739	4,176	247,563
④雑収益	1,058,774	11,290,530	△ 10,231,756
経常収益計	840,114,042	774,095,546	66,018,496
(2) 経常費用			
①事業費	791,217,359	706,879,289	84,338,070
②管理費	38,313,875	41,515,621	△ 3,201,746
経常費用計	829,531,234	748,394,910	81,136,324
評価損益等調整前当期経常増減額	10,582,808	25,700,636	△ 15,117,828
評価損益等計	310,146,232	3,170,665,387	△ 2,860,519,155
当期経常増減額	320,729,040	3,196,366,023	△ 2,875,636,983
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益	0	0	0
(2) 経常外費用	6	1	5
当期経常外増減額	△ 6	△ 1	△ 5
当期一般正味財産増減額	320,729,034	3,196,366,022	△ 2,875,636,988
一般正味財産期首残高	25,889,601,962	22,693,235,940	3,196,366,022
一般正味財産期末残高	26,210,330,996	25,889,601,962	320,729,034
Ⅱ 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	△ 359,684,000	△ 188,166,000	△ 171,518,000
指定正味財産期首残高	9,832,725,000	10,020,891,000	△ 188,166,000
指定正味財産期末残高	9,473,041,000	9,832,725,000	△ 359,684,000
Ⅲ 正味財産期末残高	35,683,371,996	35,722,326,962	△ 38,954,966

キャッシュ・フロー計算書

2024年4月1日から2025年3月31日まで

（単位：円）

科　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ 事業活動によるキャッシュ・フロー			
1. 事業活動収入			
① 基本財産運用収入	696,191,648	637,756,879	58,434,769
基本財産利息収入	552,291,748	527,125,429	25,166,319
基本財産配当金収入	143,899,900	110,631,450	33,268,450
② 特定資産運用収入	142,611,881	125,043,961	17,567,920
③ 運用財産運用収入	251,739	4,176	247,563
④ その他の事業活動収入	733,177	6,169,491	△ 5,436,314
事業活動収入計	839,788,445	768,974,507	70,813,938
2. 事業活動支出			
① 事業費支出	785,817,873	731,574,010	54,243,863
② 管理費支出	36,707,748	42,603,789	△ 5,896,041
③ その他の事業活動支出	438,384	0	438,384
事業活動支出計	822,964,005	774,177,799	48,786,206
事業活動によるキャッシュ・フロー	16,824,440	△ 5,203,292	22,027,732
Ⅱ 投資活動によるキャッシュ・フロー			
1. 投資活動収入	3,573,493,949	5,380,959,249	△ 1,807,465,300
2. 投資活動支出	3,564,202,102	5,459,687,385	△ 1,895,485,283
投資活動によるキャッシュ・フロー	9,291,847	△ 78,728,136	88,019,983
Ⅲ 財務活動によるキャッシュ・フロー	0	0	0
Ⅳ 現金及び現金同等物の増減額	26,116,287	△ 83,931,428	110,047,715
Ⅴ 現金及び現金同等物の期首残高	404,985,920	488,917,348	△ 83,931,428
Ⅵ 現金及び現金同等物の期末残高	431,102,207	404,985,920	26,116,287

主要年度日誌

年 月 日	摘　　要
2024年　9.11	2024年度自然科学研究、人文科学研究、社会福祉事業・研究、文化財保存修復事業助成金贈呈式開催
10.21	2025年度社会福祉第１回選考委員会　審査方針、応募要領等の決定
10.28	2025年度文化財保存修復第１回選考委員会　審査方針、応募要領等の決定
10.29	第69回臨時理事会（決議の省略）　「社会福祉特別助成」助成先決定の件ほか
10.30	2025年度自然科学第１回選考委員会　審査方針、応募要領等の決定
11. 5	2025年度人文科学第１回選考委員会　審査方針、応募要領等の決定
12.13	2025年度人文科学研究助成、文化財保存修復事業助成公募受付開始
12.20	2025年度社会福祉事業・研究助成公募受付開始
2025年　1. 6	2025年度自然科学研究助成公募受付開始
1.10	2025年度人文科学研究助成公募を締め切る　応募件数　323件、金額　1,017百万円
1.10	2025年度文化財保存修復事業助成公募を締め切る　応募件数　63件、金額　175百万円
1.17	2025年度社会福祉事業・研究助成公募を締め切る　応募件数　222件、金額　802百万円
2. 3	2025年度自然科学研究助成公募を締め切る　応募件数 1,291件、金額　10,405百万円
2. 3	第70回理事会（決議の省略）　第33回評議員会開催の件
2.26	第71回理事会　2025年度（2026年３月期）事業計画・収支予算及び資金調達と設備投資の見込みの件ほか
2.26	第33回評議員会　2025年度（2026年３月期）事業計画・収支予算及び資金調達と設備投資の見込みの件ほか
3.17	2025年度社会福祉第２回選考委員会　助成有力候補選出、候補先面接等の分担・日程を決定
3.19	2025年度自然科学第２回選考委員会　具体的選考手順、審査分担の決定
3.21	2025年度人文科学第２回選考委員会　助成有力候補選出、一部につき面接を決定
3.28	2025年度文化財保存修復第２回選考委員会　助成金贈呈先22件推薦を決定
3.31	2024年度（2025年３月期）期末決算
4. 7	2025年度人文科学第３回選考委員会　一部有力候補者の面接選考、助成金贈呈先37件推薦を決定
4.14 ～ 23	社会福祉助成有力候補者の面接選考
5. 9 ～ 11	2025年度自然科学第３回選考委員会　助成候補の審議検討、助成有力候補を選出
5.23	2025年度社会福祉第３回選考委員会　面接等に基づき、助成金贈呈先43件推薦を決定
5.27	第72回理事会（決議の省略）　2024年度（2025年３月期）事業報告・決算報告承認ほか
5.28	2025年度自然科学第４回選考委員会　助成有力候補者の面接選考、助成金贈呈先84件推薦を決定
6.24	第73回理事会 ○2025年度助成先決定 ・第56回（2025年度）自然科学研究助成金贈呈先84件の承認 ・第54回（2025年度）人文科学研究助成金贈呈先37件の承認 ・第56回（2025年度）社会福祉事業・研究助成金贈呈先43件の承認 ・第 7回（2025年度）文化財保存修復事業助成金贈呈先22件の承認 ○2026年度選考委員選出（自然科学11名、人文科学５名、社会福祉６名、文化財保存修復３名）
6.24	第34回評議員会 ○2024年度（2025年３月期）事業報告・決算報告承認 ○理事選任（新任１名・重任14名） ○監事選任（新任１名、重任３名）
6.24	第74回理事会 ○代表理事（理事長・常務理事）選定の件

三菱財団基金拠出会社

三菱重工業株式会社
株式会社三菱UFJ銀行
三菱商事株式会社
三菱UFJ信託銀行株式会社
明治安田生命保険相互会社
東京海上日動火災保険株式会社
三菱電機株式会社
ENEOSホールディングス株式会社
キリンホールディングス株式会社
三菱地所株式会社
三菱自動車工業株式会社
AGC株式会社
三菱マテリアル株式会社
三菱UFJ証券ホールディングス株式会社
三菱ふそうトラック・バス株式会社
日本郵船株式会社
三菱ガス化学株式会社
株式会社ニコン
三菱倉庫株式会社
三菱ケミカルグループ株式会社
三菱製鋼株式会社
三菱製紙株式会社
三菱化工機株式会社
株式会社三菱総合研究所
MAアルミニウム株式会社
郵船ロジスティクス株式会社
三菱電線工業株式会社
株式会社島津製作所
株式会社GSユアサ
旭ファイバーグラス株式会社
大日本塗料株式会社
三菱UFJニコス株式会社
三菱HCキャピタル株式会社
アストモスエネルギー株式会社
三菱ロジスネクスト株式会社
日本タタ・コンサルタンシー・サービシズ株式会社
三菱鉱石輸送株式会社
三菱総研DCS株式会社
三菱ケミカル株式会社
ピーエス・コンストラクション株式会社

以上40社
（2025年7月現在）

公益財団法人 三菱財団

〒100-0005
東京都千代田区丸の内2丁目3番1号
三菱商事ビルディング21階
電　話　(03)3214-5754
ＦＡＸ　(03)3215-7168
E-mail　info@mitsubishi-zaidan.jp
三菱財団 ホームページ
https://www.mitsubishi-zaidan.jp
三菱グループ ホームページ 助成活動紹介サイト
https://www.mitsubishi.com/ja/philanthropy/

公益財団法人 三菱財団
THE MITSUBISHI FOUNDATION